

富山県福光町

在 房 遺 跡 I

2001年3月

福光町教育委員会

富山県福光町
在 房 遺 跡 I

2001年3月

福光町教育委員会



在房遺跡 遠景



在房遺跡 1 地区の遺物



在房遺跡 2 地区の遺物

序

福光町の東部に位置する北山田地区は、山田川と大井川にはさまれた水田地帯であります。近年の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史的遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区の実施に伴なう在房遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりましたが、一部の面工事箇所と用排水路敷設部分について本調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代の終わり頃の竪穴住居と、平安時代の掘立柱建物、祭祀を行った土坑や井戸などがみつかりました。またそれらの遺構に伴なって、土師器、須恵器、製塩土器、白磁などの遺物が出土しました。本書は、その調査の成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していくだければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター、福光町シルバー人材センター、富山県農林水産部、ほ場整備事業北山田北部地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大な御協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成13年3月

福光町教育委員会

教育長 石崎栄一

例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山山北部地区に伴う富山県福光町在戸遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、平成12年6月7日から同12月15日までである。調査面積は3,175m²である。調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。
3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、指導文化係長 森山智之、指導文化係主事 佐藤聖子が調査事務を担当し、生涯学習課長 中島英二が総括した。調査の担当及び本書の執筆は、生涯学習課指導文化係主事 深田亞紀、同課嘱託 中井英策、富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越前慶祐が行った。
4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
安念幹倫・池田恵子・大平愛子・大平奈央子・岡本淳一郎・久々忠義・境洋子・塙田明弘
高梨清志・高橋浩二・太崎勇・常本健治・林敏三・宮崎順一郎・宮田進一（敬称略・五十音順）
5. 本書で使用した方位は真北である。上層の観察には、小出正忠・竹原秀雄著1967「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。
6. 調査参加者は次の通りである。
井口仙吉・井口富士雄・井口義雄・川合孝夫・河合弘・棚田俊雄・出村正雄・仲筋音次・林長敏
藤井賛正・細木孝寿・前川昌一・水口良男・溝口外雄・溝口日出雄・山山和夫・山山健二
山田賢生・山山善之・湯浅健二・湯浅三郎・天池ふさの・荒井とよ・井口艶子・井口光枝
井幡喜久子・大井川あや子・大島笑子・加藤あい子・川島芳江・大門そと・竹治芳子
館山須美子・館充子・中山すず・西川好子・福田セツ・水口貞子・水口浜子・溝口秋子
溝口あさ子・本居君子・山道文子（現地作業員）
荒谷裕香・伊藤美紀・新谷綾香
木戸一代・木下真由美・竹治由佳里・西川和美・堀越芳・安田富子（遺物整理作業）

目 次

巻頭図版

在房遺跡遠景

1 地区の遺物

2 地区の遺物

I 位置と環境	1
第1図 位置と周辺の遺跡	1
第1表 遺跡の概要	2
II. 調査に至る経緯と経過	2
III. 調査の概要	3
1. 調査の方法	
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	4
第3図 地形と各調査区割	5
2. 1地区の概要	6
第4図 1地区基本層序	6
第2表 1地区堅穴住居計測表	11
第3表 1地区掘立柱建物計測表	11
第4表 1地区下層出土遺物計測表	15
第5表 1地区上層出土遺物計測表	17
3. 2地区の概要	21
第5図 2地区基本層序	21
第6表 2地区出土遺物計測表	25
4.まとめ	27
第6図 在房遺跡遺構分布図	27
引用・参考文献	28
図版凡例	29
第7図 1地区下層遺構配置図	30
第8図 1地区下層の遺構(1)	31
第9図 1地区下層の遺構(2)	32
第10図 1地区下層の遺構(3)	33
第11図 1地区下層の遺構(4)	34
第12図 1地区下層の遺構(5)	35
第13図 1地区上層遺構配置図	36
第14図 1地区上層の遺構(1)	37
第15図 1地区上層の遺構(2)	38
第16図 1地区上層の遺構(3)	39
第17図 1地区下層の遺物(1)	40
第18図 1地区下層の遺物(2)	41
第19図 1地区下層の遺物(3)	42
第20図 1地区下層の遺物(4)	43
第21図 1地区下層の遺物(5)	44
第22図 1地区上層の遺物(1)	45

第23図 1地区上層の遺物(2)	46
第24図 1地区上層の遺物(3)	47
第25図 1地区上層の遺物(4)	48
第26図 2地区調査区配置図	49
第27図 2地区調査区A	50
第28図 2地区調査区B	51
第29図 2地区調査区B 廃物群	52
第30図 2地区的遺物(1)	53
第31図 2地区的遺物(2)	54
第32図 2地区的遺物(3)	55
第33図 2地区的遺物(4)	56
第34図 2地区的遺物(5)	57
第35図 2地区的遺物(6)	58

写真図版

図版1 1地区的遺構(1)	
図版2 1地区的遺構(2)	
図版3 1地区的遺構(3)	
図版4 1地区的遺構(4)	
図版5 1地区的遺構(5)	
図版6 1地区的遺構(6)	
図版7 1地区的遺構(7)	
図版8 1地区的遺構(8)	
図版9 1地区的遺構(9)	
図版10 1地区下層の遺物(1)	
図版11 1地区下層の遺物(2)	
図版12 1地区下層の遺物(3)	
図版13 1地区下層の遺物(4)	
図版14 1地区上層の遺物(1)	
図版15 1地区上層の遺物(2)	
図版16 1地区上層の遺物(3)	
図版17 1地区上層の遺物(4)	
図版18 2地区的遺構(1)	
図版19 2地区的遺構(2)	
図版20 2地区的遺構(3)	
図版21 2地区的遺構(4)	
図版22 2地区的遺物(1)	
図版23 2地区的遺物(2)	
図版24 2地区的遺物(3)	
図版25 2地区的遺物(4)	
図版26 2地区的遺物(5)	
図版27 2地区的遺物(6)	

I 位置と環境

富山県福光町は、富山県の西南部に位置する。石川県金沢市との県境をなす、靈峰医王山を西に仰ぎ、南の山塊を背に東の城端町と並び、北西に広がる小矢部市、福野町が位置する砺波野の周縁部を望む。

南部山塊から段丘を刻みつつ流れでてくる小矢部川はその支流とともに平野部を形成する。市街地は主に小矢部川沿いに展開し、小矢部川と支流である山田川にはさまれた段丘には、これらを開析する小河川が縦横に走る。現在、これらの小河川は管理利用され田地を潤している。

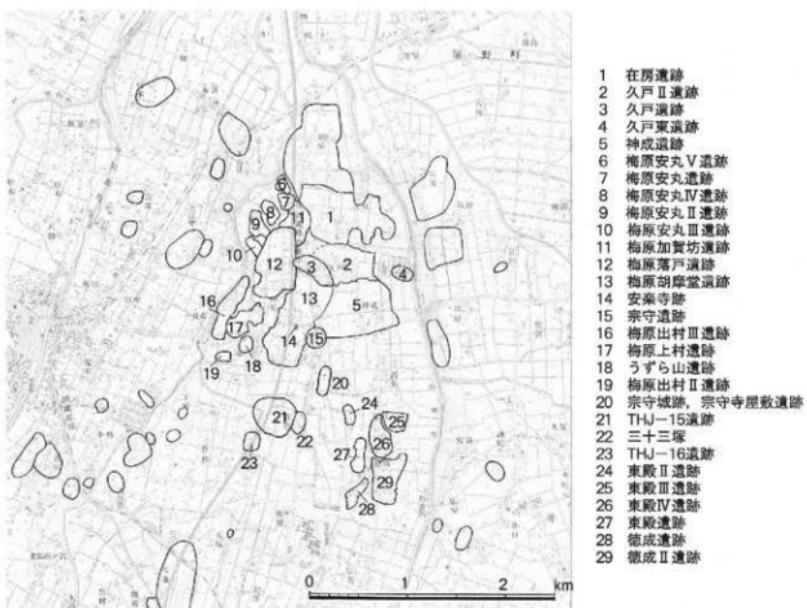
このような地形の俯瞰から、段丘は小河川によって開析され、谷・扇状地の堆積は繰り返し、複雑にからみあって南側に徐々に高い、一見、平坦な再堆積地形に変化しているとおもわれる。

在房遺跡は山田川左岸の標高67m前後から標高70m前後の緩やかな傾斜を持つ洪積台地場上の高官田尻面に位置し、行政区画上では福野町との境界に接する[金田章裕 1993]。

遺跡は、主に田地がひろがり、山田川を隔て、砺波野を一望できる微高地である。台地末端から河川域までの比高差は2m前後であり山田川の河川域まで緩やかに降りる。

周辺は、近年の調査で中世以降に信仰を求心力として発展をとげる、歴史的景観が徐々に解明されている。梅原胡摩堂遺跡をはじめとする中世の大遺跡群は、この台地上を高地に向かってその中心を移動しつつ発展をとげる。文献と調査結果を照らし合わせる作業も興味深い。

(中井英策)



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

II 調査に至る経緯と経過

平成10年（1998年）、福光町北山田北部地区において、県営は場整備事業（狙い手育成型）が策定された。この事業は農地を扱い手に集積し、経営規模を拡大させることにより低コスト化を目指すものであり、田の大区画化による基盤整備を行うものである。事業計画は在房、久戸、神成、宗守の約100haを対象とし、平成10年度から平成14年度までが工期とされていた。これに先立ち平成8年度に、町教育委員会は県埋蔵文化財センターの職員の派遣を受けて、事業計画地内で遺跡分布調査を行ったところ、広範囲において遺物の散布地を確認した。平成10年度からは同庫補助金を受けて遺跡の範囲確認を行うため試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺跡が広範囲に渡って遺存していることが確認されたため、県農地林務部、県教育委員会、地元上地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた。その結果、遺跡の大半は盛土を行うことで水田下に保存し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分のような遺跡が保存できない場所について本調査を実施することとなった。以降、試掘調査を毎年度継続して行い、平成12年度からは並行して本調査を行っている。

平成12年度の調査は、1地区2,100m²と、2地区1,075m²である。1地区は在房遺跡の北東端に、2地区は遺跡の中央からやや東よりに位置する。1地区は山の面工事と、それに伴なう用排水路の敷設のため、また2地区は用排水路の敷設により削平を受けるため本調査対象となった。

1地区の調査面積は当初2,400m²を予定していたが、ほ場整備事業の計画変更により、調査区の南西部分約300m²が調査対象外となった。また平成11年度の試掘調査で、調査区南隣りの田には、表土から約20cmと浅いところに土器埋納土坑（SX01）が遺存していることを確認していた。今後の耕作で遺構が破壊される可能性があるため今回の本調査対象地区の拡張区として、土坑周辺の45m²の調査を行うこととした。

北山田北部地区に所在する遺跡の、これまでの調査面積は次のとおりである。

（深田亜紀）

	試掘調査対象面積	本調査面積	調査対象遺跡
平成10年度	約 6.0ha		在房遺跡
平成11年度	約24.3ha		在房遺跡
	約 9.4ha		久戸Ⅱ遺跡
平成12年度	約 6.1ha		在房遺跡
	約 6.0ha		久戸遺跡
	約 3.8ha		久戸Ⅱ遺跡
	約 0.9ha		久戸東遺跡
	約 9.3ha		神成遺跡
		3,175m ²	在房遺跡

第1表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
在房遺跡	縄文時代晩期、古墳時代、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、井戸、柱穴	縄文上器、須恵器、土師器、製塙土器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、木製品、土製紡錘車
久戸遺跡	縄文時代、中世	柱穴、土坑、溝	縄文上器、須恵器、土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、肥前系陶磁器
久戸Ⅱ遺跡	弥生時代、古墳時代、古代、中世	竪穴住居？、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	弥生土器、須恵器、土師器、珠洲、中世土師器、珠洲、木製品
久戸東遺跡	中世	なし	なし
神成遺跡	古代	土坑、柱穴、溝	須恵器、土師器

III 調査の概要

1. 調査の方法

1 地区

調査の障害となる田の畦畔ブロック等を重機と人力を併用して除去する事から始めた。調査区域の設定後、試掘の成果にもとづき調査員の立ち会いのもと、重機による耕作土および前回は場敷借時の盛土の除去を行った。耕作土は調査区南の山に搬出した。

表土除去後に、調査区に合わせて任意に基準杭を設置して調査区割りを行った。区割りは、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字で表記した。

調査区割りに合わせて20m毎にサブトレンドを設定し、地山面まで掘り下げて層位確認を行った。その後、杭を中心にしてセクションベルトを残し、人力による包含層掘削・遺構検出・遺構削削を行った。土坑・溝・サク状遺構の削削は、遺構埋土の堆積状況を観察するために半載するか、セクションベルトを2本ないし3本残して削削した。柱穴はすべて南側、または東側半分を断ち割り、土層の記録作業が終わりしだい完掘した。また、掘立柱建物が調査区外までひろがっているものについては、坪堀りして柱穴の位置のみを確認した。排土は、ベルトコンベヤーにより調査区外へ搬出した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成して全てに遺構番号をつけた。遺構の検出状況や断面、また遺物の出土状況は手実測で図化した。スナップ写真を除く記録写真は調査員が撮影した。遺構完掘後、ヘリコプターによる空中写真撮影を行い調査区全体の遺構平面を図化した。調査区には部分的に遺構検出面が2面あったため、計2回に分けて撮影・図化を行った。また、遺構のマーキングに配慮し、第1面・第2面の判別が容易にできるようにして撮影した。

(深田亜紀)

2 地区

2地区は調査対象地の中央を横切る水路を境に南側を調査区A、北側を調査区Bとする。

調査の着手にあたり、調査対象区を試掘調査の成果に照らすと、その大部分が旧河道にあたることが判明し、旧河道の削削に伴う土量が多いことが察せられた。しかし、旧河道を覆う茶褐色粘質土が包含層であるため、重機削削については、耕作土及び、茶褐色粘質土の直上までとし、調査員立ち会いのもと慎重に掘り下げた。これより下層についての削削はすべて人力で行った。削削土量の多い場所については、ベルトコンベヤーによる排土の搬出を行い、作業の能率化を図った。

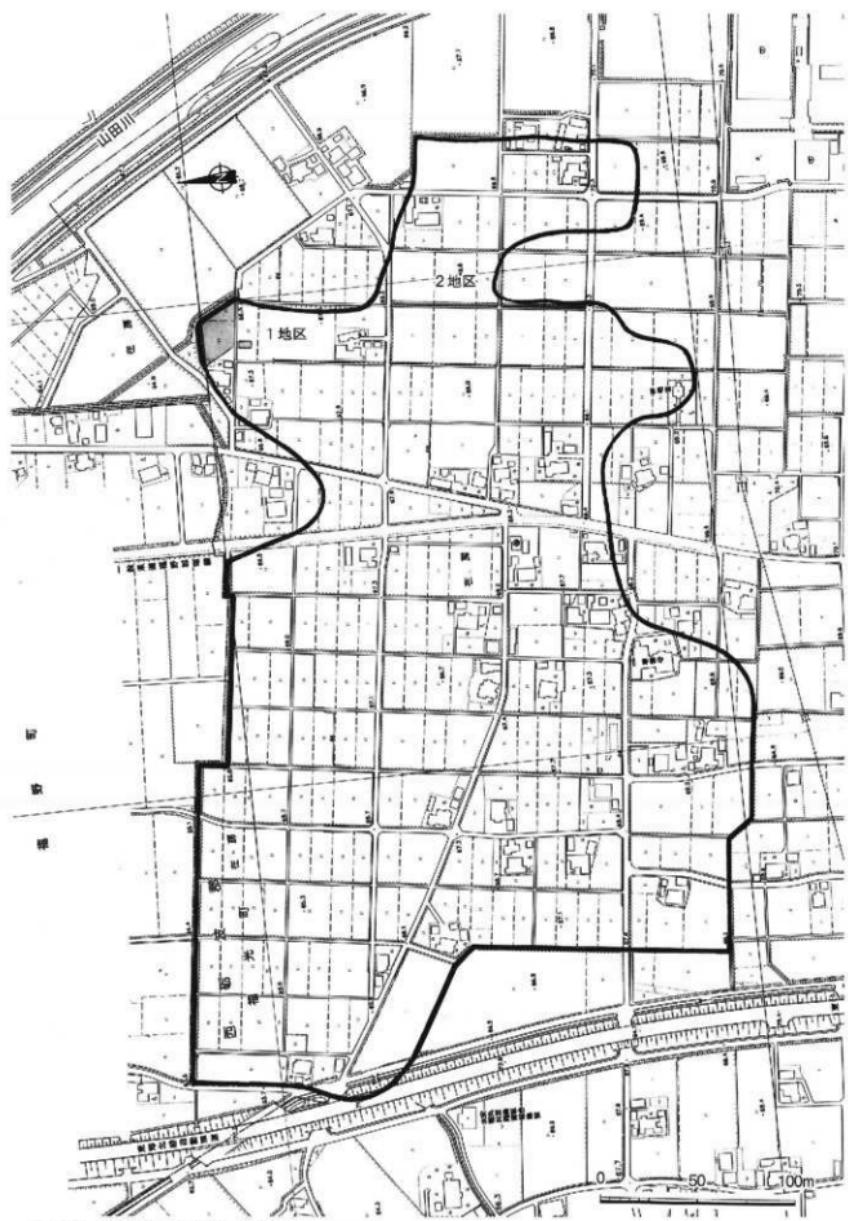
区割りの設定については、1地区の方法に準ずるが、調査区がやや離れることから新たな基準を調査区の南端部道路上に設け、そこからX軸を調査区の長辺方向に合わせてメッシュを展開した。人力削削は各10mごとのX座標にあわせセクションベルトを設け、土層の確認を行なながら掘り下げた。また、柱穴断面・旧河道等には必要に応じて、任意の上層確認用セクションベルトを設けた。

記録は調査の進行状況に合わせて図化及び、写真撮影等を随時行う。また、必要に応じて撮影用足場等を使用した。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を図化用に行い、あわせて俯瞰・斜め写真等を撮影した。空中写真撮影は調査区が長大なため、調査区Aと調査区Bの2回にわけることとした。

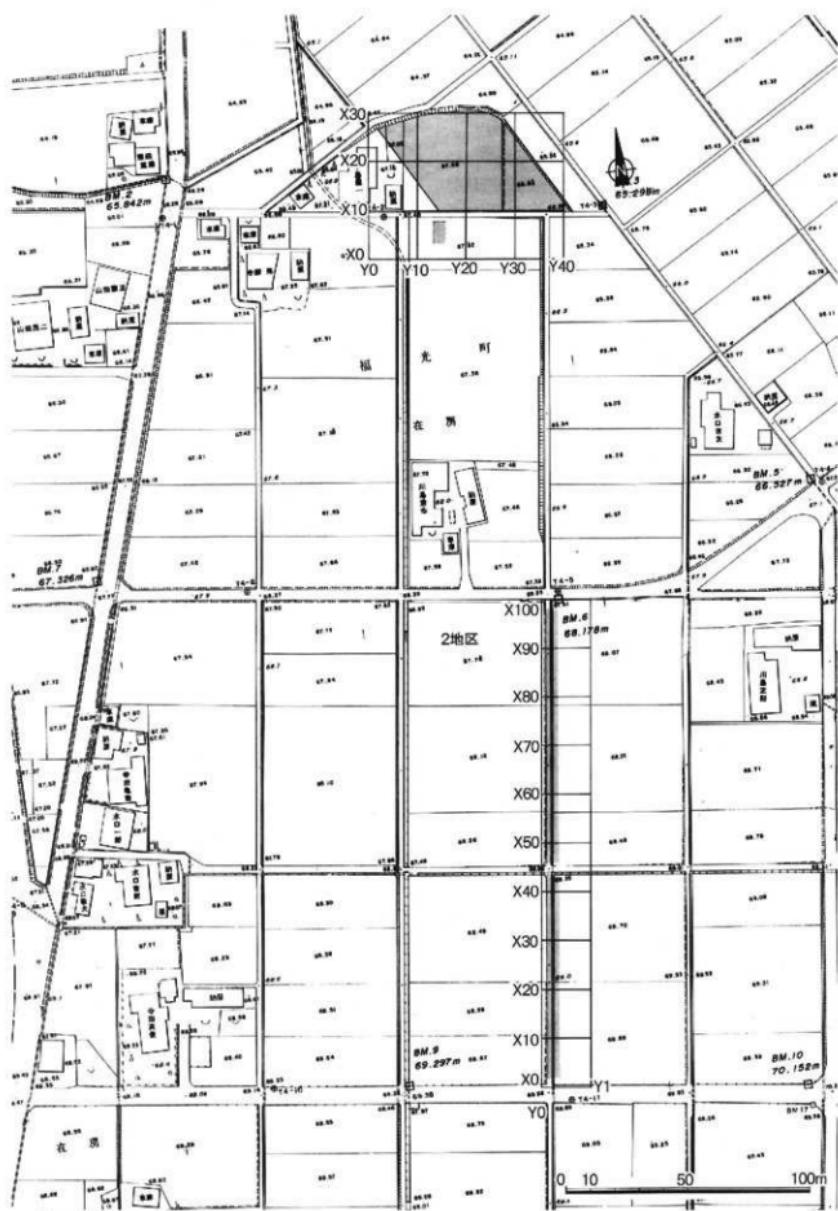
整理作業

出土遺物の整理は現地作業に並行して開始し、洗浄後、バインダー処理・注記・仕分けをした。接合・復元等は降雨時や現地作業終了後に行った。遺物尖端やトレイス等は基準の統一をはかり、報告書の図版を作成した。写真整理・図面整理の作業は各地区ごとにファイルにまとめた。これらの作業は担当調査員を中心に整理員が補助をした。

(中井英策)



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1:5,000)



第3図 地形と各調査区割 (S=1:2,000)

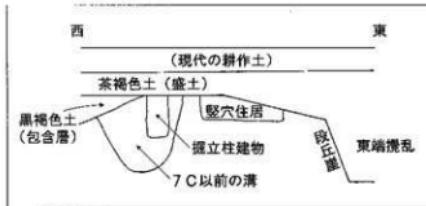
2. 1地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第4図)

1地区は山田川左岸の下位段丘の先端部に位置し、周囲との比高差は約2mにおよぶ。海拔は約66.6~67.0mを測り、地形は南西から北側および東側に緩やかに傾斜している。地表から地表面までは約30~40cmであり、遺物包含層(黒褐色粘質土)、前回は場整備時の盛土(茶褐色粘質土)、現代の耕作土の順に堆積している。遺物包含層からは古墳時代後半と古代の遺物が出土している。調査区のY18列以西、X19列以南にのみ堆積しており、この部分以外は削平を受けている。また、Y26列以東は地山面が削平を受けているため、遺構の造存状況はかなり悪い。Y35列以東には、前回は場整備時に約1mの盛土を行っている。ここから出土した遺物が竪穴住居出土土の遺物と接合していることから、この盛土は調査区内の遺物包含層、遺構、地山を削平して盛った土であると思われる。

(2) 検出遺構の概観 (第7図、第13図)

- ・ 1地区全体
 - ・ 7世紀前半と9世紀中頃と12世紀前半の遺構を検出した。
 - ・ 各時期に連続性はない。
- ・ 7世紀前半
 - ・ 7棟の竪穴住居と自然流路を検出した。
 - ・ おおむね一辺が5m前後である。
 - ・ 竪穴住居はほとんどの主軸が真北よりやや西に振れている。
 - ・ 7棟のうち5棟でカマド跡を検出しており、カマドは住居の南東側に位置している。
 - ・ 調査区の南西から北東に向かって流れしており、幅は約10m、深さは約90cmを測る。
 - ・ 自然流路の最下層からは竪穴住居と同時期の遺物が出土している。
 - ・ ほとんどが土器類であり、須恵器は数点の出土にとどまっている。
- ・ 9世紀中頃
 - ・ 竪穴住居を3棟検出した。
 - ・ 住居の一辺は2.0~2.5mと7世紀の住居と比較するとやや小さい。
 - ・ 3棟のうち2棟が農道の下に位置しており、造存状態は良くない。
 - ・ この時期の住居から検出したカマド跡は南向きに作られている。
 - ・ 須恵器の杯・蓋、須恵器製作技法の土器器窓などがある。
- ・ 12世紀前半
 - ・ 掘立柱建物5棟、小穴、溝4条、土坑6基、井戸1、土器埋納土坑2基などを検出した。
 - ・ 主軸は真北からやや西にふれている。床面積が170m²以上の大型建物も検出している。
 - ・ 土坑・柱穴・井戸で土器祭祀を行っており、土地の地鎮から屋敷地廃絶までの一連の流れを追うことができる。
- ・ 出土遺物
 - ・ 土器器窓・皿、白磁碗などがある。
 - ・ 特に土器埋納土坑2基から、あわせて100点を超す土器器窓と皿が出土し、接合して完形になったものも多い。
- ・ その他の時期
 - ・ サク状遺構を調査区全体で検出している。
 - ・ サク状遺構には、方向や間隔に規則性が無く、詳しい時期や性格は不明である。



第4図 1地区基本層序

(3) 遺構の概要

A. 7世紀前半の遺構

竪穴住居7棟、土坑3基、溝1がある。

SI01・SK05（第8図、図版2）

調査区の北西側、X22～25、Y6～10付近に位置する。住居の中央付近から東側にかけて貼床がある。この住居は2棟あるいは3棟の住居が重複している可能性があるが、上部が削平を受けており、切り合は確認できなかった。住居の東辺と南辺で壁面に沿った浅い溝を検出している。また住居の北端と東端と西端の3ヶ所にカマド跡と考えられる炭化物と焼土の集積を確認した。これらの遺存状態は悪く、北端のカマド跡にのみ袖石と考えられる石と、焚出口と燃焼部付近に浅い掘りこみを検出した。煙道は不明である。出土遺物には、土師器壺、内面黒色椀などがあり、住居の床面直上から出土している。カマド付近からは特に上器が集中して出土している。また住居の南端の浅い穴からは土師器把手付壺(5)が出土している。

SK05はSI01の北に位置する。南北方向約1.1m、東西方向約1.6m、深さ約30cmの楕円形の土坑である。埋土は黒褐色粘質土を基本とし、地山や炭の入り方で4層に分層できる。SK05はSI01に関連した土坑であると考えられる。この土坑からは土師器椀・壺、ほぼ完形に復元できる瓶などがまとまって出土している。

SI02（図版3）

調査区の東寄り、X15～19、Y26～30付近に位置する。削平を受けており、わずかに残る住居の輪郭を検出した。土師器壺が出土しているが、この住居に伴なうかは不明である。

SI03・SK02（第9図、図版2）

調査区の南側X11～14、Y18～20付近に位置する。かなりの削平を受けており、また地山砂礫上に掘りこんでいたため住居の平面形や規模、床面の状態の確認は困難であった。カマドの跡とみられる、焼土や炭混じりの層を検出したが、袖石らしき石は遺存していないかった。

SK02はSI03の南側に位置する南北方向約3.1m、東西方向約1.6m、深さ約40cmの長方形の土坑である。埋土は黒褐色砂混じりシルトを基本に、炭や焼土の混ざり具合から4層に分層できる。土師器椀・壺(11～15)が集中して出土しており、SI03出土の土師器と同一個体のもの(16)もある。SI03の関連施設と考えられる。

SI04（第10図、図版3）

調査区のほぼ中央、X15～19、Y21～25付近に位置する。住居には壁面に沿って幅約20cm、床面から約10cm掘りこむ溝がある。壁はほぼ垂直に立ちあがり、貼床はない。住居の南東辺にカマド跡を2基検出した。南側のカマド2の遺存状態が良いことに対し、北側のカマド1は袖部や袖石がほとんど遺存していないことから、カマド1のほうを廃棄してカマド2を作り替えたと考えられる。カマド1は奥行き約1.8m、幅約1.0mを測り、南東壁を深さ約20cm掘りこむ。その東側には約1.0mの煙道を確認している。また燃焼部と思われる焼上層と、かき出し部分にあたる浅い穴を検出した。カマド2は奥行き約1.8m、幅約1.1mを測り、南東壁を深さ約25cm掘りこむ。東側に約1.1mの煙道を検出した。カマド2の天井部は全く遺存していないが、袖部はほぼ遺存している。袖石と考えられる被熱した石も検出しており、これらは使用時の位置を保っていると推定できる。また住居内に土坑を2基検出した。出土遺物には土師器椀・壺、製塙土器などがある。遺物はカマド付近の床面直上から多く出土している。一個体がつぶれたような状態のものはなく、破片が散らばって出土している。

SI05（第11図、図版4）

調査区の南東寄り、X12～16、Y10～14に位置する。住居の東側半分は削平を受けてほとんど遺存していないが、西側の遺存している部分等から推定すると、一辺約7mの大型の竪穴住居である。住居内には幅約

25cm、床面から約10cm掘りこむ溝がある。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。床面は貼床はないが、黒褐色土と地山土が混ざり固くしまっている。住居の中央付近に直径約1.3mの円形の土坑を検出し、この土坑から土師器碗・壺がまとまって出土した。住居の東側ではカマド跡と考えられる焼土を検出した。天井部、袖石は全く遺存しておらず、煙道も不明である。焼土の南側に炭化物が集積した約15cmの掘りこみがあり、ここから土器片が出上している。出土遺物には須恵器の杯蓋、土師器碗・壺、内面黒色碗、球状土製品、製塙土器がある。

SI06 (第11図、図版3)

調査区の北東寄り、X28～31、Y25～29付近に位置する。住居内に土坑を2基検出し、特に住居南端の土坑から遺物がまとまって出土している。東半分が削平されているため、住居の全容は不明であり、カマドも確認できなかった。

SI07 (第9図、図版4)

調査区の北東寄り、X22～25、Y22～26付近に位置する。住居の東辺と南辺に壁面に沿って溝がある。溝の幅は約30cmで、床面から約5cm掘りこんでいる。壁はゆるやかに立ちあがる。東辺の北寄りにカマド跡と煙道を検出しているが、サブトレンチや上層の柱穴に壊されており、カマドの規模は不明である。住居の北東側には部分的に貼床があるが、住居内に倒木痕があり正確な範囲は不明である。東辺の溝からは完形の須恵器の蓋が、南端の穴からは製塙土器が出土している。

SD01 (第7図、第8図、図版5)

調査区の南西から北東にかけて位置する。幅は約10m、深さは約90cmを測る自然流路である。最下層の黒色土層は溝として機能していた時期の堆積であり、出土遺物から7世紀前半と考えられる。その後は湿地化し、徐々に埋積した。9世紀中頃は、この時期の竪穴住居も溝を避けて位置することから、まだ湿地の状態であったと思われる。しかし上層の掘立柱建物が建てられる12世紀前半までは完全に埋没し、乾地化していた。出土遺物は細かい破片が多い。X20、Y14付近で土師器片がまとまって出土している。

B. 9世紀中頃の遺構

竪穴住居3棟がある。

SI08 (第12図、図版5)

調査区の北西端、X26～28、Y3～5付近に位置する。住居の南辺にカマド跡を検出した。奥行約1.0m・幅約0.6mを測り、壁面を約25cm掘りこんでいる。袖構成土は⑦層であり、袖石と考えられる被熱した石も検出した。これらは使用時の状態を保っていると思われる。またカマドの西側にも被熱した石が数個あり、天井部あるいは袖部の石が転がったものと考えられる。またカマドのかきだし部分と住居の中央付近に貼床がある。住居の西側にも壁面に沿って炭化物が多く入った溝状の窪みを検出したが、性格は不明である。遺物は、須恵器杯・杯蓋、土師器鍋、須恵器製作技法の土師器壺などが床面直上から出土している。

SI09

調査区の南側、X9～11、Y21～26付近に位置する。削平を受けており、わずかに残る住居の輪郭を検出した。規模から、SI08やSI10と同時期のものと思われる。

SI10 (第12図、図版5)

調査区の南端、X9～11、Y15～17付近に位置する。この住居で貼床は検出しなかった。住居の南東隅にはカマド跡を検出した。天井部は遺存していないが、⑦層が袖を構成する粘土であると考えられる。このカマド付近から土師器壺の破片や須恵器などが出土している。

(深田正紀)

C. 12世紀前半の遺構

掘立柱建物 5棟、土坑 6、溝 5、井戸 1、上器埋納土坑 2、柱穴がある。

SB01 (第13図、第14図、図版6、図版7)

4間7間で東西棟の総柱建物である。桁行の間尺は、ばらつきが大きい。東西1間ずつと真ん中1間の幅が広い。そのため、東西対象に配された2棟の建物の可能性も考えた。しかし、P20・P22は深さ数cm～10cm程度と他に比較してきわめて浅いことから、束柱の可能性を考えて1棟の建物とした。なお、北側1列・東西1列ずつの柱穴は、他に比べて小さく深いものが多い。南側1列はばらつきが大きいが、やはりその傾向が伺える。以上から、身舎2間5間の4面庇の建物を想定した。また、床面積は、約177.5m²を測り、県内では福光町梅原胡摩堂遺跡〔富文振 1994〕・田尻遺跡〔富文振 1996〕に次ぐ規模である。柱痕は北側2列で多く確認できた。しかし、多くの柱穴の埋積状況は、以前吉倉A遺跡で分類した〔県埋文センター 1993〕Type-Ib・Type-Icにあたり、柱は抜き取られていると考えられる。また、建物東半分の柱穴の平而形に歪なものが多いため、大半は柱を抜き取る際の攪乱によるものである。建物の廃絶時に、P1・P9・P19にロクロ土師器椀(204)・小皿(203・205)を1点ずつ埋納し、P25は、白磁碗(208)を埋納している。椀は伏位に、小皿は正位に埋納されていた。その他、柱を抜き取り後に15～20cm程度の石で蓋をしているものがある(P2・P26・P32)。久世康博氏の研究〔久世 1999〕によると祭祀の一例と考えることができる。また、抜き取り痕が確認できる柱穴の多くから、ロクロ土師器椀・皿が出土している。

SB02 (第13図、第14図、図版6、図版7)

4間5間で南北棟の総柱建物である。SB01に南接し、桁行は直交する。両建物の間は1.5mと狭く、同時に存在は考え難い。現時点では、SB01に後続する建物と考えている。床面積は約95m²でSB01の半分程度である。建物規模に比例して、柱穴規模も小型化する。しかし、南北東西各1間ずつの間尺が狭く、4面庇の建物を想定している。東側3列の柱穴には重複するものが多くみられる。付近には小穴が多くみられるところから、SB02の建て替えの可能性を考える。柱痕は、東側1列を除き比較的多くの柱穴で確認できる。柱痕は、10～17・18cm程度のものが多く、SB01に比べると細い。SB02の柱穴には、SB01のような廃絶に伴う祭祀はみられない。

SB03・04 (第13図、第14図、図版6、図版8)

両者に重複はみられないが、位置関係と建物方向より、SB03はSB01に伴い、SB04はSB02に伴うと考えている。ともに2間3間の側柱建物で、平面プランの歪みが大きい。さらに、SB03は柱間も一定しない。柱穴規模は小さく、柱痕も確認できない。遺物は、SB04-P7からロクロ土師器小皿がある。ただし、出土状況は確認しておらず埋納されたものかどうかは不明である。

SB05 (第13図、第14図、図版6、図版8)

SB01の西約7mに位置する2間2間の総柱建物である。西側の柱間が狭い変則的な構造だが、全体としては一辺4.7mの建物となる。根拠はないが、一応南北棟の建物とした。なお、SB01・SB02に方向を描える。断定はできないが、後述するSD02・SD03との位置関係から、SB01に伴う可能性はある。

小穴

建物として復元できた以外にも多くの小穴が確認できた。SB03～SB05の周辺には小穴が多くあり、何回かの建て替えが想定できる。また、調査区東半分にも多くみられる。これらは、断面形が先細りの「U」字形をした杭痕と推測できるものもあるが、柱痕が確認できるものも相当数ある。なお、建物の柱穴の平面プランは、礫層部分に疊つ建物を除きすべて多角形を呈している。これは、掘削の際の工具痕と考えてお

り、舟橋村浦田遺跡〔舟橋村教委 2000〕でも確認している。この掘削痕は、建物として復元できない小穴でも多くで確認することができた。柱痕の確認と併せて考えると、何らかの施設があったことが想定できる。しかし、小穴の時期を特定できるものは極少ない。

SX01（第16図、図版8）

完掘時点では直径4.8m深さ1.7mを測り、湧水層の疊層まで掘り込む。平面形は、最下部が方形を呈している。本来、約2m四方の木組み井戸枠が存在していたが、廃絶時に抜き取られたと考えている。井戸枠を抜き取るために上部を大きく壊した結果、断面半月形を呈する。井戸枠を抜き取った後は、人為的に埋め戻されている。井戸は、1基のみであることから、存続期間は屋敷の存続期間とほぼ重なるものと推測している。埋積土は、大きく3つに分けられる。下層部は炭が多く混ざり粘性が強く、中層部は砂・礫が多く混ざる。炭混じりの黒褐色シルト層が間にみられ、上層部は再び砂礫が多く混ざる上で埋め戻されている。完全に埋め戻す前に祭祀をおこないロクロ土師器小皿を埋納している。山上遺物は、埋納された土師器皿以外にロクロ土師器椀・皿が多いが、白磁・非ロクロ土師器皿も出土している。状況から判断して、埋納された土師器以外は多少の時間幅があるものと考えられる。

SX01（第15図、図版9）

約1.5m四方深さ30cm以上の隅丸方形の土坑である。上部は掘削されているが、SX02の例から、本来は深さ60cm以上あったと思われる。土坑内からは、完形もしくは完形に近いロクロ土師器椀・小皿が65点と白磁碗の破片1点が出土した。出土状況や出土土器の観察から、廃棄されたものではなく埋納されたものと判断した。椀・小皿は、それぞれに数枚ずつ単位で重なっており、上部に小皿を下部に椀を入れたようである。炭化物・木質などの出土はみられない。遺構は、建物位置や試掘調査の結果などからみて、屋敷地の南端に近い場所に位置していると考えている。石川県金沢市千木ヤシキダ遺跡〔金沢市教委 1987・1991〕や石川県松任市三浦・幸明遺跡〔松任市教委 1996〕、小矢部市五社遺跡〔富文振 1998〕の例や久世氏の研究成果等から、祭祀遺構と考えられる。さらに、これまでの研究成果に照らし合わせて考えると、かなり規模の大きな祀りを想定できそうである。

SX02（第15図、図版9）

直径約0.8m深さ約60cmの円形の上坑である。地山が細かい砂利層のため、断面形は少し袋状になる。完形もしくは完形に近いロクロ土師器椀・小皿39点が出土した。出土状況や出土土器の観察から、SX01同様埋納されたものと判断した。出土状況は、SX01ほど丁寧に重ねて埋納した様子は認められず、埋納の順番も特に規則性はみられない。埋積土は、大きくみて上下2つに分けられる。下部（②・③層）は、地山に近い砂利混じりの屑で、上部（①層）は、よりシルト分の多い層である。1層は、埋め戻し後に土が締まり沈下した後に埋積したものと考える。炭化物・木質などの出土はみられない。遺構は、SB04のすぐ北側に位置する。祀りの規模がSX01より小さいと考えられること、埋納の様子がSX01より丁寧ではないことから、建物の建て替え時の祭祀を想定している。

P62（第14図、図版9）

直径約0.35m深さ0.5mの小穴で、埋積土は単層、最下部にロクロ土師器椀3点が埋納されていた。椀は、正位で重なるように出土した。検出状況の観察では、周辺の小穴に比べて掘削痕が判然としなかった。これには、祭祀に伴う小穴のため丁寧に掘られた可能性と偶然の可能性の両方が考えられる。なお、小椀は、椀より若干上部から出土した。時間差は大してないものと考えるが、椀と共に埋納されたものか否かの判断は慎重に行う必要がある。なおSB02の底部分に位置し、建物の建て替え時の祭祀である可能性もあるが判然としない。

P 9

直径約0.4m深さ約0.36mの小穴である。SB05 P 7～P 9列の東側延長上に位置し、ロクロ上飾器小皿1枚が埋納されていた。SB05に関連した祭祀遺構の可能性もある。

SD02（第13図、第16図）

幅30～60cm深さ15cm程度の浅い溝である。SB02の西側に位置し、SB01のプランを切り、途中で途切れる。位置関係より、SB02の時期の屋敷地の東端を区画する溝と考えている。出土遺物は少ないが、白磁小片が出土したことから建物群と同時期と判断したものである。

SD03（第13図、第16図）

幅45～60cm以上深さ15～20cm程度の浅い溝である。SB01西側に位置し、SB05のプランを切る。北側ほど幅が広く深くなり、調査区北側の段丘崖に延びる。現地形が、昭和40年代のは場整備時に削られてできた可能性も否めないものの、少なくとも屋敷の存続時期には段丘崖がもっと北側であったことが分かる。時期が特定できる遺物の出土はないが、建物との位置関係からSD02と共にSB02の時期の屋敷地の東端を区画する溝である可能性と、SB01の時期の屋敷地の北・東端を区画する溝の可能性を考えている。

D. その他の時期の遺構

サク状遺構（第16図、図版8）

幅15～40cm深さ数cm～10数cm、長さ1.0～6.0m程度の溝である。全体的に削平のため、よく見られるサク状遺構のように連続するものではない。出土遺物からの時期決定はできないが、他の遺構との切り合い関係から大きく2時期に分けられそうである。1つは、7世紀代の堅穴住居群廃絶以降で屋敷が構えられる以前のもの。もう1つは、屋敷廃絶以降のものである。

（越前慶祐）

第2表 1地区堅穴住居計測表

遺構番号	主軸	規模(m) 南北×東西	床面積 (nf)	深さ (cm)	カマド	屋内施設	床面	時 期	備 考	
									溝	貼床
SI01	N-24°-W	4.8×5.3	25.44	17.0	○	溝	貼床	7C前半	重複しているものの1棟のみ	
SI02	N-36°-W	4.9×4.8	23.52	1.0		溝		7C前半		
SI03	N-45°-W	(3.6)×(3.1)	(11.78)	18.0	○			7C前半	痕跡から推定復元	
SI04	N-56°-W	4.4×5.1	22.44	28.0	○	土坑2 溝		7C前半	カマド作り替え	
SI05	N-35°-W	(7.1)×(6.7)	(47.57)	28.0	○	溝 土坑		7C前半	痕跡から推定復元	
SI06	N-34°-W	(5.0)×(6.1)	(30.50)	25.0		土坑2	貼床	7C前半	痕跡から推定復元	
SI07	N-51°-W	4.1×4.7	19.27	21.0	○	溝 穴	貼床	7C前半		
SI08	N-14°-W	2.5×2.7	6.75	18.0	○	土坑	貼床	9C中		
SI09	N-57°-W	3.6×4.0	14.40	3.0				9C中		
SI10	N-10°-E	3.2×2.9	9.28	33.0	○	土坑		9C中		

第3表 1地区掘立柱建物計測表

遺構番号	建物 方向	規模 面行×軒行	底 床面積 (m ²)	梁行 (m)	梁間平均柱間(m) 身合	桁行 (m)	桁間平均柱間(m) 身合	柱穴規格(平均値)(m)	特記事項				
									底	身合	底		
SB01	N-77.5°-W	4×7	4面底	177.5	9.7	2.5	2.4	18.3	2.4	2.7	底 身合51 底 身合59	42底 身合59	47
SB02	N-12.5°-E	4×5	4面底	94.9	7.3	2.2	1.8	13.0	2.9	2.4	底 身合29 底 身合35	26底 身合30	46
SB03	N-72°-W	2×3	無	28.1	4.6	2.3	-	6.1	2.6	-	底 身合34 底 身合31	21底 身合25	21
SB04	N-21°-E	2×3	無	31.7	4.6	2.3	-	6.9	2.3	-	底 身合31 底 身合37	25底 身合32	21
SB05	N-14°-W	2×2	無	22.1	4.7	2.3	-	4.7	2.3	-	底 身合37 底 身合33	25底 身合25	25

(4) 遺物の概要

A. 7世紀前半の遺物（第17図～第21図、図版10～13）

7世紀前半の出土遺物には、土師器椀・高杯・甕・把手付甕・須恵器杯・杯蓋・製塙土器・上製紡錘車がある。

SI01とSK05からは土師器の把手付甕と甕が出土している。甕(5)の調整は、内外面に縦方向にハケメを施す。内面は摩滅しており、粘土の接合痕が見られる。甕(10)は単孔・砲弾型で、内外面ともケズリが施されている。把手は、甕に比べ甕のほうが上方に湾曲する。また高杯の脚部(1)や口径が9.0～10.0cmの小型の椀(6・7)などが出土しており、SI01出土の土器は他の住居出土遺物とは組成がやや異なる。

SI03とSK02からは内面黒色椀・上師器甕が出土している。土師器椀(17)は口径14.8cmとやや大型で身が深く、内外面ともに横方向にミガキが施されている。SI03とSK02出土の土師器甕(16)が接合する。

SI05からは須恵器杯・杯蓋・内面黒色椀・土師器甕・製塙土器・球状土製品が出土している。須恵器杯(27)は口径約10.0cmと小型で、口縁端部はかなり薄い。また杯蓋はつまみがなく、杯・杯蓋とともに胎上は密で、焼成は良好である。土師器甕は口径12.0cm前後の小型のもの(32～34)と27.0cm以上の大型のもの(35、36)の2種類に分けられる。土師器甕の調整は外側が縦方向のハケメ、内面は上部にケズリ、下部にハケメを施す。製塙土器(37、38)は数個体出土しているが、全て棒状尖底の製塙土器である。

SI06からは土師器甕が出土している。土器の多くは住居内の南側の土坑からの出土である。土師器甕には口径12.0～13.0cmの小型のもの(33)と20.0cm以上のもの(34)がある。甕の調整は、内外面ともにハケメを施すが、内面はかなり摩滅している。

SI07からは、須恵器杯蓋・土師器甕・製塙土器が出土している。須恵器杯蓋(41)は完形で出土した。つまみがなく、内面に返りがつく。製塙土器(42)はSI05と同様に口縁部を内側に折れる、棒状尖底の土器であり、住居の南端の穴から集中して出土している。

SK01からは内面黒色椀(55)が1点出土している。内面に暗文を施し、外面には底部から体部にかけて「×」と記したヘラ記号ある。内外面ともにミガキを施す。

SD01からは内面黒色椀・土師器高杯脚部・甕・須恵器甕・製塙土器が出土している。高杯(57)は内面を黒色処理している。製塙土器(64)は堅穴住居出土のものと同じ、棒状尖底の土器である。須恵器甕(63)は頸部のみの破片であるが、内面には同心円状の当貝痕が、また外面は平行文の叩き目がみられ、くびれ部分から下部には自然軸がかかっている。

堅穴住居のほかに、小穴やサク状遺構からも須恵器杯蓋と製塙土器が出土している。

東端擾乱から、須恵器高杯・土師器椀・高杯・甕・内面黒色椀・紡錘車などが出土した。内面黒色椀(74、80)は口径約14.0cmである。また土師器椀は口径11.0～12.0cmと、16.0cm前後のものがある。土師器甕は口径15.0cm前後のものが多い。内外面ともハケメ調整を施すが、ほとんどがかなり摩滅している。

B. 9世紀中頃の遺物（第20図～第21図、図版12～13）

9世紀中頃の出土遺物には、須恵器杯・杯蓋・土師器甕がある。

SI08から、須恵器杯・杯蓋・土師器甕が出土している。この住居からは、内面に同心円状の当貝痕、外面には平行文の叩き目がある須恵器製作技法で作られた土師器甕が出土している。須恵器杯(44～46)は底部をヘラ切りし、体部が直線的に外傾する。時期は9世紀中頃と思われる。

SI10からは土師器甕・須恵器などが、カマド付近から出土している。また須恵器製作技法で作られた土師器甕も出土している。SI08と同時期と思われる。

(深田亜紀)

C. 12世紀前半の遺物（第22図～第25図、図版14～17）

12世紀前半の出土遺物には、上師器椀・皿・鉢、白磁がある。

ロクロ土師器椀・皿・鉢、非ロクロ土師器皿、白磁碗・皿がある。SX01・SX02・P62・SE01祭祀で良好な一括資料を得た。SX01→SX02→SE01祭祀の流れを考えている。P62は、SX01かSX02のどちらかに近い時期と考えている。ただし、時期幅は小さく、12世紀前半～12世紀中頃におさまると思われる。

SX01からは椀24点・小皿41点の計65点と白磁碗の小片が出土した。椀はプロポーションに多少のバラエティがあるが、基本的に体部下半が外反する。小皿は、底部よりa：「直線的に立ち上がり途中で軽く屈曲するもの」とb：「そのまま直線的にのびるもの」とに大別できる。前者が多く、屈曲部分から口縁端部にかけわざかに外反する。

SX02からは椀10点・小皿29点の計39点が出土した。全体的に硬質な感じを受ける。椀は、体部下半が外反するもの・体部上半が内湾するもの・体部下半が外反し、上半が内湾するものに大別できる。169は、器高が低く、底部との境が不明瞭で内湾気味に立ち上がる。口縁直下がくびれ、端部が肥厚または薄くなるII線は、SX02のみで確認できる。小皿は、SX01の2タイプに加え、SX02でのみ確認できるc：「外反しながら立ち上がり途中でわざかに肥厚するもの」がある。また、bタイプのものには、底部切り離し位置の加減で底部に厚い薄いがある。また、内湾気味に立ち上がる184は、169の椀に似たプロポーションで、基本的にbタイプと考える。

P62からは、椀3点と小椀1点が出土した。199・201は底部よりわざかに外反しながら立ち上がり、その後はやや内湾する。200は、SX02の口縁直下で薄くなるタイプに似る。全体的に法量などはSX01のものに似る。

SE01祭祀として取りあげたものは、小皿7点である。底部切り離し位置の加減の差はあるが、同タイプのものが多い。234～236・239・240には内面見込み部分がドーナツ状に陥む特徴がある。屋敷廃絶・井戸廃棄の時期、12世紀中頃を考えている。

SE01からはロクロ土師器椀・皿・鉢、非ロクロ土師器皿、白磁が出土している。遺物は、井戸廃棄に伴う埋め上からの出土のため、時期幅があると思われる。椀には有台椀と無台椀がある。無台椀は、SX01・SX02等と比べ底径が大きく厚いものが目立つ。有台椀は底部のみの出土で、高台の形状および大きさにばらつきがある。内面黒色土器は少なく、268以外に数点程度があるのみである。小皿はプロポーションがバラエティに富む。241は、胎土が他に比べ精良で体部の屈曲が明瞭、作りが丁寧である。SX01・SX02のaタイプのモデルを連想させる。242・243は、bタイプで、焼成が良すぎて硬質な感じを受ける。243は、灯明具で口縁外側に厚く油煙が付着する。その他、口径17cm程度の大型の皿（262・263）、低い柱状高台に直線的な体部がつくもの（255・259・260）などがある。大型の皿は灯明具である。柱状の高台部分の出土は多く、径4.0cm前後・底部厚1.6cm前後のもの、径4.5～5.5cm・底部厚2.2cm前後のもの、径3.5～5.0cm程度・底部厚3.0～3.7cm程度のものがある。全体を復元できた鉢は266のみである。内面は使用による摩滅が目立つ。非ロクロ土師器皿（271）は、1点のみの出土である。器厚は厚く、口縁端部を一段ナデで調整している。これまで、県内における非ロクロ土師器の普及は、国府関連遺跡を除くと12世紀中頃以降とされている。井戸の廃絶時期とあまり差はないと考えており、一応12世紀中頃としておく。

白磁は、碗・皿がある。SX01・SE01・SB01-P25から出土したほか、掘立柱建物付近の出土が多い。碗の口縁は、小さな不規則のものと端部がわざかに外反するものがあり、前者が多い。釉色は黄色がかかった白色で、化粧土がかかる。胎土は黄色がかかった灰色で陶器質である。外底のくりは浅いものと深いものがある。皿は量的に少なく、釉色・胎土は碗と差はない。275は、内面に櫛描文があり外反する。概ね、太宰府分類・編年（横山・森田 1978）・博多出土貿易陶磁分類表（福岡市教委 1984）のII類にあたる。

（越前慶祐）

⑤ 小 結

下層について

- ・7世紀前半の竪穴住居を7棟確認した。この時期の集落跡は県内では少なく、小杉・大門流通業務団地内遺跡群（№6遺跡、№7遺跡）[富山県教委1982]、婦中町中名IV遺跡[富文振2000]、小矢部市桜町遺跡（垂田地区）[小矢部市教委1985]、高岡市麻生谷新生園遺跡[高岡市教委1997]などで確認されている程度である。
- ・7世紀前半の竪穴住居は、SD01を挟んで東西に位置する。それぞれの間隔が狭いことから2時期程度には分かれるとと思われる。しかし、遺物の出土量や土器の形態などから、集落の存続期間はあまり長くないと考えている。
- ・SI01とSI03には住居跡の外側に土坑(SK05とSK02)が伴ない、それぞれから多くの土師器が一括出土している。SI01は数回の建て替えが確認できた。そのため、SK05は建て替えの際の廃棄土坑である可能性もある。
- ・今回調査で検出したカマドは、削平等のためはつきりしないものもあるが、いずれも完成された形態のカマドである。カマドの導入と須恵器の享受には密接な関係があることが各氏によって指摘されている[林博通 1973、三島道子 1998]。しかし、今回の出土遺物には、須恵器が極端に少ない。集落の性格を表すものである可能性があると思われる。
- ・7世紀前半の器種組成は、貯蔵具・煮沸具には土師器壺・小甕・把手付甕・瓶があり、食膳具には上師器椀・内面黒色椀・高杯、須恵器杯・蓋がある。その他、尖底製塩土器・紡錘車・球状十製品がある。
- ・9世紀中頃の竪穴住居は3棟確認した。7世紀前半のものに比べて小型であるが、同時期の遺跡である富山市県総合運動公園内遺跡群や任海宮田遺跡の竪穴住居とよく似た規模であることから、一般的な規模のものといえる。
- ・SD01は、断面形からみて本来自然流路であった可能性が高いと考えている。溝として機能していた時期は、出土遺物より7世紀前半と考えている。少なくとも12世紀までには完全に埋没し、乾地化していたと思われる。

上層について

- ・古代終末期の屋敷は、基本的に母屋一棟と付属屋一棟及び井戸一基で構成されている。建物はそれぞれ1回の建て替えが行われている。SB01は床面積約180m²、SB02は同約95m²の大型建物である。特に、SB01は県内有数の規模である。SB05は、SB01と同時期の可能性があるが確証はない。
- ・掘立柱建物の柱穴を検出状況の時点で詳しく観察してみると、舟橋村浦田遺跡の柱穴同様、掘削工具痕と思われる痕跡が確認できた。
- ・井戸は1基確認した。屋敷創設から廃絶までの間、一貫して使用されたと考えている。本来は木組み井戸だったと思われるが、廃絶時に木組みを抜き取っている。埋め戻しは一氣に行われ、最後に上師器小皿を埋納している。
- ・SD02・SD03は屋敷地西側の区画溝と考えている。段丘際に立地しているため区画の必要があるのは西側および南側だが、南側に溝があったかどうかは不明である。
- ・土器祭祀遺構が多く見つかった。土器埋納土坑（ピット）は、一括性が高いうえ出土遺物量も多いため良好な資料を提示できた。
- ・出土遺物は、ロクロ土師器椀・皿・鉢、非ロクロ土師器皿、白磁碗・皿がある。基本的に包含層が遺存していないため、ほとんどが遺構に伴うものである。その中でも「埋納土坑（ピット）」出土の遺物が大勢を占める。
- ・井戸の埋め戻し上中より、1点のみであるが非ロクロ土師器皿が出土している。県内における非ロクロ土師器皿の普及は、12世紀後半以降とされている。屋敷廃絶後の「古井戸」に混入した可能性があるが、その場合は一定量の非ロクロ土師器皿や青磁などが出土する事が想定される。このことから、一応屋敷廃絶と井戸の廃絶を同時と考える。
- ・土器祭祀については、資料が多い石川県で各氏によって考察されている。本田秀生氏[本田 1986]は、

建物柱穴掘方・柱痕埋土中からの完形上器の出土が建物の造営・廃棄に関わる祭祀と考えられるとして、楠正勝氏〔楠 1987〕・出越茂和氏〔出越 1991〕は、いわゆる「埋納土坑」が建物の造営・廃棄に際しての祭祀に伴う土坑であること。さらに、前田清彦氏〔前田 1996〕は、自然地形の凹地を利用した「土器溜」も祭祀の一形態と考え、その形態から、A型「土器溜」、B型「土坑」、C型「建物柱穴隣接ピット」、D型「建物柱穴掘方」の4つに分類している。

当遺跡の祭祀の形態をみてみると、次のいくつかのタイプに分けることができる。

I : 「埋納土坑」 土坑に数十枚の椀皿を埋納するもの。

II : 「建物隣接埋納ピット」 柱穴と規模に差がない小穴に土師器椀皿数枚を埋納するもの。

III : 「柱穴柱当埋納」 建物廃棄後、柱穴柱当に完形の土師器椀皿を埋納するもの。

県内における11世紀代から12世紀代の資料は、近年になって増加し始めており、しかし、今回ほど一括りが高くかつまとまった資料はみられない。

(越前慶祐)

第4表 1地区下層出土遺物計測表

単位:cm

図版番号	写真図版	遺物番号	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	口径残存率%	特記事項
第17図	図版10	1	SI01	土師器	高杯か器台	—	—	7.6	—	
第17図	図版10	2	SI01	内面黒色土器	碗	15.0	—	—	10%	
第17図	図版10	3	SI01	土師器	甕	17.2	—	—	13%	
第17図	図版10	4	SI01	土師器	甕	17.0	—	—	87%	
第17図	図版10	5	SI01	土師器	甕	20.0	—	—	50%	
第17図	図版10	6	SK05	土師器	碗	9.0	3.8	5.2	43%	
第17図	図版10	7	SK05	土師器	碗	10.5	—	—	18%	
第17図	図版10	8	SK05	土師器	甕	13.0	—	—	18%	
第17図	図版10	9	SK05	土師器	甕	19.0	—	—	6%	
第17図	図版10	10	SK05	土師器	甕	39.0	26.3	(10.0)	60%	
第18図	図版11	11	SI03	土師器	甕	11.0	—	—	13%	
第18図	図版11	12	SI03	土師器	甕	14.0	—	—	13%	
第18図	図版11	13	SI03	土師器	甕	11.0	—	—	13%	
第18図	図版11	14	SK02	土師器	甕	14.0	—	—	22%	
第18図	図版11	15	SK02	土師器	甕	15.0	—	—	78%	
第18図	図版11	16	SI03-SK02	土師器	甕	20.0	31.3	7.0	10%	
第18図	図版11	17	SK02	内面黒色土器	甕	14.8	—	—	25%	
第18図	図版11	18	SK02	製塙土器	甕	16.0	—	—	2%	
第18図	図版11	19	SI04	土師器	甕	13.0	—	—	13%	
第18図	図版11	20	SI04	内面黒色土器	甕	19.0	—	—	18%	
第18図	図版11	21	SI04	土師器	甕	17.0	—	—	13%	
第18図	図版11	22	SI04	土師器	甕	16.0	—	—	2%	
第18図	図版11	23	SI04	土師器	甕	—	3.8	—		
第18図	図版11	24	SI04	土師器	甕	30.0	—	—	3%	
第18図	図版11	25	SI04	製塙土器	甕	15.0	—	—	10%	
第19図	図版11	26	SI05	須恵器	甕	13.0	—	—	31%	
第19図	図版11	27	SI05	須恵器	杯	10.0	—	—	7%	
第19図	図版11	28	SI05	内面黒色土器	甕	12.0	4.0	4.2	25%	
第19図	図版11	29	SI05	内面黒色土器	甕	15.0	—	—	13%	
第19図	図版11	30	SI05	内面黒色土器	甕	10.6	5.4	3.6	25%	
第19図	図版12	31	SI05	土製品					20g 紡錐車か?	
第19図	図版12	32	SI05	土師器	甕	12.2	8.3	4.6	37%	
第19図	図版12	33	SI05	土師器	甕	12.7	—	—	25%	束縛乱の破片と接合
第19図	図版12	34	SI05	土師器	甕	—	—	4.8	—	
第19図	図版12	35	SI05	土師器	甕	27.0	—	—	13%	
第19図	図版12	36	SI05	土師器	甕	31.9	—	—	5%	
第19図	図版12	37	SI05	製塙土器	甕	17.5	—	—	3%	
第19図	図版12	38	SI05	製塙土器	甕	16.0	—	—	13%	
第19図	図版12	39	SI06	土師器	甕	13.0	—	—	38%	

図版番号	写真図版	遺物番号	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	口径残存率%	特記事項
第19回	図版12	40	SI06	土師器	甕	24.0	—	—	13%	
第19回	図版12	41	SI07	須恵器	蓋	9.6	2.3	—	100%	
第19回	図版12	42	SI07	製塙土器		16.0	—	—	10%	
第20回	図版12	43	SI08	須恵器	蓋	12.5	2.3	—	12%	
第20回		44	SI08	須恵器	杯	12.7	3.1	9.0	23%	
第20回	図版12	45	SI08	須恵器	杯	13.0	—	—	18%	
第20回	図版12	46	SI08	須恵器	杯	12.0	3.0	7.0	31%	
第20回		47	SI08	土師器	甕	14.0	—	—	—	
第20回		48	SI08	土師器	甕	20.2	—	—	—	
第20回		49	SI10	土師器	甕	—	—	—	—	須恵器製作技法
第20回	図版12	50	SI10	土師器	甕	—	—	—	—	須恵器製作技法
第20回		51	SI10	土師器	甕	—	—	—	—	
第20回	図版12	52	SI10	土師器	甕	12.0	—	—	13%	
第20回	図版12	53	SI10	土師器	甕	15.0	—	—	15%	
第20回	図版12	54	SI10	土師器	甕	20.0	—	—	14%	
第20回	図版12	55	SK01	内面黒色土器	椀	12.8	5.5	5.4	39%	暗文・ヘ記号
第20回	図版13	56	SD01	内面黒色土器	椀	18.0	—	—	6%	
第20回	図版13	57	SD01	内面黒色土器	高杯	—	—	—	—	
第20回	図版13	58	SD01	土師器	甕	14.0	—	—	15%	
第20回	図版13	59	SD01	土師器	甕	16.0	—	—	13%	
第20回	図版13	60	SD01	土師器	甕	17.0	—	—	6%	
第20回	図版13	61	SD01	製塙土器		20.0	—	—	5%	
第20回	図版13	62	SD01	土師器	甕	30.0	—	—	6%	
第20回	図版13	63	SD01	須恵器	甕	—	—	—	—	
第20回		64	SD01	製塙土器		—	—	—	—	
第21回	図版13	—	SD01	土師器	甕	—	—	—	—	
第21回	図版13	65	P13	須恵器	蓋	11.0	—	—	25%	
第21回	図版13	66	P386	須恵器	蓋	15.0	—	—	6%	
第21回	図版13	67	P392	製塙土器	蓋	15.5	2.8	—	36%	
第21回	図版13	68	X25Y15	須恵器	杯	11.8	2.3	7.0	13%	
第21回	図版13	69	X23Y30	須恵器	甕	—	—	—	—	
第21回	図版13	70	X14Y29	土師器	甕	—	—	—	—	
第21回	図版13	71	X17Y23	土師器	甕	—	—	—	—	
第21回	—	X5Y10	須恵器			13.0	—	—	10%	
第21回	図版13	72	東擾乱		紡錘車	3.1	2.8	4.2	100%	62g
第21回		73	東擾乱	土師器	甕	12.0	—	—	10%	
第21回		74	東擾乱	内面黒色土器	椀	14.2	—	—	18%	
第21回	図版13	75	東擾乱	須恵器	高杯	10.0	—	—	18%	
第21回	図版13	76	東擾乱	土師器	甕	11.0	—	—	35%	
第21回		77	東擾乱	土師器	甕	16.0	—	—	7%	
第21回	図版13	78	東擾乱	土師器	高杯脚部	—	—	9.0	—	
第21回		79	東擾乱	土師器	甕	12.0	—	—	15%	
第21回	図版13	80	東擾乱	内面黒色土器	甕	14.0	—	—	6%	
第21回	図版13	81	東擾乱	土師器	甕	13.0	—	—	13%	
第21回	図版13	82	東擾乱	土師器	甕	15.0	—	—	13%	
第21回		83	東擾乱	土師器	甕	15.5	—	—	13%	
第21回	図版13	84	東擾乱	土師器	甕	12.0	—	—	22%	
第21回	図版13	85	東擾乱	土師器	甕	14.6	—	—	20%	
第21回	図版13	86	東擾乱	土師器	甕	15.0	—	—	25%	
第21回	図版13	87	東擾乱	土師器	甕	15.0	—	—	10%	
第21回	図版13	88	東擾乱	土師器	甕	15.0	—	—	18%	
第21回		89	東擾乱	土師器	甕	—	—	—	—	
第21回	図版13	90	東擾乱	土師器	甕	—	—	—	—	
第21回		91	東擾乱	土師器	甕	19.0	—	—	10%	
第21回	図版13	92	東擾乱	土師器	甕	16.0	—	—	35%	
第21回		93	東擾乱	土師器	甕	31.0	—	—	7%	
第21回	図版13	94	東擾乱	土師器	甕	16.0	—	—	15%	

第5表 1地区上層出土遺物計測表

単位cm

図版番号	写真図版	遺物番号	造構番号	種類	器種	口径	器高	底径	身深	上縁部度	底部残	特記事項
第24図	図版16	211	P19	土師器	小皿	8.0	1.9	4.2	1.10	85%	100%	体部に傾い稜線
第24図	図版16	200	P62	土師器	碗	14.3	4.2	4.6	3.40	80%	100%	口縁端部に傾い面取り
第24図	図版16	201	P62	土師器	碗	13.6	4.2	4.5	3.30	100%	100%	
第24図	図版16	199	P62	土師器	碗	13.5	4.0	4.8	3.05	100%	100%	
第24図	図版16	202	P62	土師器	小碗	10.0	3.9	3.9	2.15	100%	100%	体部に傾い稜線、高台高1.4cm
第24図		204	SB01P19	土師器	碗	14.0	4.0	5.4	2.80	3%	66%	建物廃棄の際の埋納(伏位)
第24図	図版17	205	SB01P19	I:簡器	小皿	—	—	4.2	—	0%	100%	
第24図	図版17	208	SB01P25	白磁	碗	—	—	4.9	—	0%	55%	
第24図	図版16	203	SB01P9	土師器	小皿	8.6	2.2	4.0	1.35	40%	100%	建物廃棄の際の埋納(伏位)
第24図	図版16	206	SB02P15	土師器	碗	13.6	3.6	6.5	2.60	80%	100%	
第24図		207	SB04P7	I:簡器	小皿	9.2	—	—	—	40%	0%	
第24図	図版17	210	SD01上面	白磁	碗	15.0	—	—	—	6%	0%	
第24図	図版17	209	SD01上面	白磁	碗	14.0	—	—	—	5%	0%	
第25図		265	SE01	土師器	鉢	29.6	—	—	—	8%	0%	
第25図		264	SE01	土師器	鉢	25.6	—	—	—	8%	0%	
第25図	図版17	266	SE01	土師器	鉢	28.4	11.5	5.0	—	8%	25%	器高は推定復元
第25図		271	SE01	土師器	小皿	8.8	—	—	—	15%	0%	丸底、手づくね
第25図		248	SE01	土師器	碗	—	—	—	5.7	—	0%	100%
第25図		261	SE01	土師器	碗	—	—	6.0	—	0%	75%	
第25図	図版17	256	SE01	土師器	碗	—	—	5.6	—	0%	100%	
第25図	図版16	242	SE01	土師器	小皿	9.2	2.6	5.0	1.60	30%	100%	口縁端部に傾い面取り
第25図	図版16	243	SE01	I:簡器	小皿	9.4	2.4	4.8	1.60	75%	100%	灯明具、内外面油漬多量に付着
第25図	図版16	255	SE01	土師器	小皿	9.5	3.7	4.2	2.20	50%	100%	
第25図		246	SE01	土師器	碗	15.8	—	—	—	13%	—	
第25図		244	SE01	土師器	碗	13.0	—	—	—	13%	—	
第25図		247	SE01	I:簡器	碗	15.2	4.3	6.2	3.00	15%	100%	
第25図	図版16	241	SE01	土師器	小皿	8.2	2.1	4.5	1.35	100%	100%	体部に明瞭な棱線、胎土精良
第25図	図版17	251	SD01	土師器	小皿	—	—	—	4.0	—	0%	100%
第25図		250	SE01	I:簡器	小皿	—	—	4.0	—	0%	100%	
第25図		249	SE01	土師器	小皿	—	—	3.4	—	0%	50%	
第25図		253	SE01	土師器	小皿	—	—	2.1	—	0%	100%	
第25図		252	SE01	I:簡器	小皿	—	—	4.6	—	0%	50%	
第25図	図版17	270	SE01	土師器	小皿	16.0	—	—	—	15%	0%	
			SE01	白磁	碗	16.0	—	—	—	15%	0%	
第25図		269	SE01	白磁	碗	15.3	—	—	—	9%	0%	
第25図	図版17	273	SE01	白磁	皿	—	—	4.0	—	0%	8%	
第25図		245	SE01	土師器	小皿	14.0	—	—	—	6%	0%	
第25図	図版17	263	SE01	土師器	小皿	17.0	—	—	—	4%	0%	
第25図		262	SE01	I:簡器	小皿	17.0	—	—	—	6%	0%	
			SE01	土師器	小皿	14.4	—	—	—	10%	0%	
第25図	図版17	258	SE01	土師器	小皿	9.3	—	—	—	14%	0%	
第25図	図版17	257	SE01	I:簡器	小皿	9.2	—	—	—	8%	0%	
第25図	図版17	259	SE01	土師器	小皿	8.2	—	—	—	10%	0%	
第25図		260	SE01	土師器	小皿	8.4	—	—	—	15%	0%	

図版番号	写真図版	遺物番号	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	身深	口縫部残	底部残	特記事項
第25図	図版16	240	SE01祭	土師器	小皿	9.0	1.9	4.3	1.40	55%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第25図	図版16	239	SE01祭	土師器	小皿	9.0	2.0	3.3	1.60	90%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第25図	図版16	234	SE01祭	土師器	小皿	8.5	2.2	4.0	1.80	90%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第25図	図版16	235	SE01祭	土師器	小皿	8.6	2.5	3.9	1.85	100%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第25図		237	SE01祭	土師器	小皿	8.0	—	—	—	45%	0%	
第25図		236	SE01祭	土師器	小皿	8.5	2.3	4.0	1.90	37%	100%	口縫部に凹み、底部にシザーカット
第25図	図版16	238	SE01祭	土師器	小皿	8.6	2.4	4.5	1.45	100%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第24図	図版17	212	SX01	土師器	小皿				5.0	0%	100%	SB05に伴う可能性ある
第22図	図版14	138	SX01	土師器	小皿	8.7	2.1	3.9	1.40	100%	100%	
第22図		147	SX01	土師器	小皿	8.9	2.2	4.2	1.40	88%	100%	
第22図		135	SX01	土師器	小皿	8.9	2.3	4.0	1.60	100%	100%	体部に軽い稜線
第22図		120	SX01	土師器	小皿	8.8	2.3	3.6	1.50	25%	100%	
第22図		123	SX01	土師器	小皿	9.2	2.4	3.9	1.60	40%	100%	
第23図	図版14	149	SX01	土師器	小皿	9.1	2.3	4.1	1.50	100%	100%	
第22図		141	SX01	土師器	小皿	9.0	2.2	4.2	1.40	40%	100%	口縫部に軽い面取り
第22図		155	SX01	土師器	小皿	9.3	2.1	4.3	1.30	100%	100%	体部に軽い稜線
第22図		152	SX01	土師器	小皿	8.5	2.5	4.0	1.60	75%	100%	口縫端部に軽い面取り
第22図	図版14	118	SX01	土師器	椀	13.2	3.7	5.2	3.00	100%	100%	
第22図		132	SX01	土師器	小皿	8.9	2.2	4.0	1.35	95%	100%	口縫端部に軽い面取り
第22図	図版14	154	SX01	土師器	小皿	9.0	2.1	4.0	1.30	85%	100%	
第22図		105	SX01	土師器	椀	13.3	3.6	5.3	2.70	100%	100%	
第22図		109	SX01	土師器	椀	13.1	3.5	5.6	2.90	100%	100%	
第22図		111	SX01	土師器	椀	13.3	4.0	5.3	3.10	100%	100%	
第22図		114	SX01	土師器	椀	13.5	3.5	5.1	2.85	100%	100%	
第22図		124	SX01	土師器	小皿	9.0	2.0	3.9	1.15	80%	100%	口縫端部に軽い面取り、体部に軽い稜線
第22図		128	SX01	土師器	小皿	8.8	2.0	4.0	1.50	90%	100%	
第22図		106	SX01	土師器	椀	13.1	3.7	4.9	2.80	75%	100%	
第22図		125	SX01	土師器	小皿	8.6	2.5	3.9	1.70	66%	100%	
第22図		129	SX01	土師器	小皿	9.2	2.2	4.0	1.50	100%	100%	
第22図		140	SX01	土師器	小皿	9.3	2.2	4.0	1.40	75%	100%	
第23図		148	SX01	土師器	小皿	9.0	2.2	3.8	1.45	100%	100%	口縫端部に面取り
第22図		117	SX01	土師器	椀	13.1	3.8	5.0	2.90	100%	100%	
第22図		115	SX01	土師器	椀	13.3	3.7	5.3	2.90	100%	100%	
第22図	図版14	107	SX01	土師器	小皿							
第22図		104	SX01	土師器	椀	13.4	3.9	4.9	3.10	100%	100%	
第22図		112	SX01	土師器	椀	13.6	3.8	5.3	2.80	100%	100%	
第22図		110	SX01	土師器	椀	13.4	3.6	5.4	2.90	100%	100%	
第23図	図版14	151	SX01	土師器	小皿	9.1	2.2	4.0	1.40	80%	100%	体部に軽い稜線
第23図		157	SX01	土師器	小皿	8.9	2.4	4.0	1.60	63%	100%	口縫端部に軽い面取り、体部に軽い稜線
第22図		143	SX01	土師器	小皿	9.0	2.1	3.9	1.45	50%	100%	
第22図	図版14	134	SX01	土師器	小皿	8.9	2.2	3.7	1.50	90%	100%	口縫端部に軽い面取り
第22図	図版14	119	SX01	土師器	小皿	8.9	2.1	4.5	1.50	100%	100%	体部に軽い稜線
第22図		145	SX01	土師器	小皿	9.0	2.3	4.3	1.45	63%	100%	体部に軽い稜線
第22図		103	SX01	土師器	椀	13.1	3.8	4.9	2.75	100%	100%	
第22図		116	SX01	土師器	椀	12.7	3.6	4.5	2.65	100%	100%	

図版番号	写真図版	遺物番号	遺構番号	種類	器種	口径	唇高	底径	身深	口縁部残	底部残	特記事項
第22図		126	SX01	土師器	小皿	9.3	2.4	3.7	1.60	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		156	SX01	土師器	小皿	9.1	2.2	4.4	1.70	90%	100%	焼き至み大きい、体部に軽い棱線
第22図		96	SX01	土師器	碗	13.1	3.7	5.3	2.80	95%	100%	
第23図		158	SX01	土師器	小皿	9.1	2.2	4.2	1.45	90%	100%	
第22図		101	SX01	土師器	碗	13.3	3.6	5.4	2.80	100%	100%	
第22図	図版14	102	SX01	土師器	碗	13.1	3.4	4.6	2.45	100%	100%	
第22図	図版14	133	SX01	土師器	小皿	8.9	2.1	3.8	1.30	100%	100%	
第22図		99	SX01	土師器	碗	13.2	4.2	5.1	3.80	100%	100%	
第22図		136	SX01	土師器	小皿	9.0	2.2	4.1	1.40	95%	100%	
第22図	図版14	97	SX01	土師器	碗	13.6	3.7	4.9	2.80	100%	100%	
第22図		113	SX01	土師器	碗	13.7	3.7	6.0	3.00	100%	100%	
第22図		139	SX01	土師器	小皿	9.1	2.2	4.1	1.30	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第22図		108	SX01	土師器	碗	13.4	4.0	4.8	3.00	100%	100%	
第22図		146	SX01	土師器	小皿	8.9	2.1	3.8	1.45	10%	100%	
第22図		137	SX01	土師器	小皿	9.0	2.2	3.6	1.40	40%	100%	
第22図		98	SX01	土師器	碗	13.3	3.9	4.8	2.95	100%	100%	
第22図		142	SX01	土師器	小皿	8.9	2.0	4.3	1.30	88%	100%	口縁端部に軽い面取り
第22図		127	SX01	土師器	小皿	8.9	2.3	3.9	1.70	90%	100%	
第22図		130	SX01	土師器	小皿	8.8	2.3	4.1	1.45	88%	100%	口縁端部に軽い面取り
第22図		100	SX01	土師器	碗	13.8	3.9	5.3	2.85	100%	100%	
第22図		95	SX01	土師器	碗	13.3	3.8	5.3	3.10	100%	100%	
第22図		131	SX01	土師器	小皿	8.9	2.2	4.2	1.35	85%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		150	SX01	土師器	小皿	9.0	2.3	4.2	1.60	75%	100%	
第23図		153	SX01	土師器	小皿	8.7	2.3	4.0	1.60	66%	100%	体部に軽い稜線
第23図		159	SX01	土師器	小皿	9.0	2.1	3.9	1.30	37%	100%	
第22図		144	SX01	土師器	小皿	8.7	2.3	3.6	1.50	100%	100%	
第22図		122	SX01	土師器	小皿	8.8	2.1	3.9	1.30	50%	100%	
第22図		121	SX01	土師器	小皿	8.7	2.1	3.9	1.40	50%	80%	口縁端部に軽い面取り、体部に軽い稜線
第23図	図版15	168	SX02	土師器	碗	13.7	3.8	5.2	2.90	100%	100%	
第23図	図版15	160	SX02	土師器	碗	13.8	4.1	6.6	3.30	100%	100%	
第24図	図版15	195	SX02	土師器	小皿	8.9	2.1	3.9	1.50	100%	100%	見込みにドーナツ状の凹み
第23図		193	SX02	土師器	小皿	9.1	2.3	4.5	1.40	100%	100%	
第23図		170	SX02	土師器	小皿	8.9	2.5	4.2	1.70	100%	100%	
第24図	図版15	196	SX02	土師器	小皿	8.5	1.9	5.1	1.20	100%	100%	底部から丸みをもって立ち上がる
第23図	図版15	181	SX02	土師器	小皿	8.6	2.4	4.0	1.50	100%	100%	
第23図		176	SX02	土師器	小皿	8.9	2.3	4.3	1.50	100%	100%	
第23図		183	SX02	土師器	小皿	9.0	2.5	4.1	1.55	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第24図	図版15	198	SX02	土師器	小皿	8.9	2.1	4.8	1.20	100%	100%	
第23図		178	SX02	土師器	小皿	8.8	2.4	4.3	1.40	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第24図	図版15	197	SX02	土師器	小皿	8.8	2.0	5.2	1.35	100%	100%	
第23図	図版15	161	SX02	土師器	碗	13.9	4.2	5.6	3.10	95%	100%	
第23図		177	SX02	土師器	小皿	8.8	2.1	5.1	1.25	75%	100%	
第23図		184	SX02	土師器	小皿	8.6	2.2	4.4	1.45	100%	100%	底部から丸みをもって立ち上がる
第23図		188	SX02	土師器	小皿	8.6	2.0	4.9	1.45	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図	図版15	169	SX02	土師器	碗	14.2	3.4	7.1	2.65	100%	100%	

図版番号	写真図版	遺物番号	遺構番号	種類	器種	口径	器高	底径	身深	口縁部残	底部残	特記事項
第23図		191	SX02	土師器	小皿	8.6	2.3	4.8	1.30	100%	100%	口縁部に軽い面取り、またふつうノツヅがあり、またサクミズによって口縁が大きくならない。
第23図		174	SX02	土師器	小皿	8.6	2.3	4.7	1.40	100%	100%	
第23図		166	SX02	土師器	楕	14.0	4.0	5.3	3.40	100%	100%	
第23図		164	SX02	土師器	楕	13.6	4.1	5.9	3.20	100%	100%	
第23図		163	SX02	土師器	楕	14.5	4.1	6.1	3.05	100%	100%	焼き歪み大きい
第23図		185	SX02	土師器	小皿	8.4	2.5	3.8	1.65	100%	100%	体部に軽い縦線
第23図		162	SX02	土師器	楕	14.2	3.9	6.4	3.20	85%	100%	
第23図	図版15	182	SX02	土師器	小皿	9.0	2.4	4.2	1.50	100%	100%	
第23図		175	SX02	土師器	小皿	8.9	2.5	4.1	1.45	100%	100%	
第23図		190	SX02	土師器	小皿	8.6	2.3	4.9	1.50	100%	100%	見込みはドーナツ状に凹む
第23図		186	SX02	土師器	小皿	8.9	2.5	3.4	1.55	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		179	SX02	土師器	小皿	8.4	2.5	4.0	1.50	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		172	SX02	土師器	小皿	8.5	2.5	4.5	1.70	100%	100%	
第23図	図版15	187	SX02	土師器	小皿	8.6	2.0	4.9	1.30	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		167	SX02	土師器	楕	14.2	3.9	6.6	3.05	90%	100%	
第23図		192	SX02	土師器	小皿	8.6	2.5	4.3	1.50	75%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		173	SX02	土師器	小皿	8.6	2.4	4.9	1.55	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		165	SX02	土師器	楕	13.9	4.0	5.7	3.00	85%	100%	
第23図		180	SX02	土師器	小皿	9.1	2.3	5.0	1.30	100%	100%	口縁端部に軽い面取り
第23図		194	SX02	土師器	小皿	8.9	2.0	4.6	1.25	85%	100%	
第23図		189	SX02	土師器	小皿	8.4	2.4	3.5	1.60	100%	100%	
第23図		171	SX02	土師器	小皿	8.6	2.3	3.8	1.65	95%	100%	
第24図	図版17	226	X13Y13.S104	白磁	碗	13.3	—	—	—	10%	0%	
第24図		225	X13Y16	白磁	皿	10.0	—	—	—	6%	0%	
第25図	図版17	272	X25Y14	白磁	皿	—	—	4.0	—	0%	30%	
第24図	図版16	223	包含層	土師器	小皿	9.2	1.8	5.0	1.20	45%	100%	底部から丸みを持って立ち上がる
第24図	図版16	222	包含層	土師器	小皿	8.5	1.8	3.3	1.20	33%	100%	見込みはドーナツ状に強く凹む
第24図	図版16	219	包含層	土師器	小皿	8.2	2.1	4.7	1.35	37%	100%	見込みはドーナツ状に強く凹む
第24図		221	包含層	土師器	小皿	9.0	2.3	4.2	1.55	20%	60%	見込みはドーナツ状に強く凹む
第24図		230	包含層	土師器	小皿	8.8	—	—	—	30%	0%	
第24図	図版17	231	包含層	土師器	小皿	8.4	—	—	—	20%	0%	
第24図	図版17	232	包含層	土師器	小皿	9.2	—	—	—	20%	0%	
第24図	図版17	220	包含層	土師器	小皿	8.2	2.2	3.6	1.60	13%	100%	
第24図	図版17	227	包含層	土師器	小皿	7.6	2.0	4.2	—	13%	13%	
第24図		229	包含層	土師器	小皿	8.5	—	—	—	15%	0%	
第24図	図版17	233	包含層	土師器	小皿	9.2	—	—	—	20%	0%	
第24図	図版17	228	包含層	土師器	小皿	8.0	—	—	—	15%	0%	
第24図	図版17	214	包含層	土師器	楕	13.0	—	—	—	15%	0%	
第24図	図版17	213	包含層	土師器	楕	13.5	—	—	—	13%	0%	
第24図	図版17	218	包含層	土師器	小皿	8.0	2.2	4.1	1.40	18%	50%	
第24図		215	包含層	土師器	楕	13.0	—	—	—	10%	0%	
第24図	図版17	216	包含層	土師器	小皿	—	—	5.0	—	0%	100%	
第24図		224	包含層	土師器	楕	—	—	—	—	0%	0%	高台内縫紋り

3. 2地区の概要

(1) 基本層序 (第5図)

調査区の配置は南北に長く、田圃5区西にまたがる。調査地内の田面は雑壇状に北に緩やかに下がり、南端の山面の標高が68.8mで、北端部で68.1mを測り比高差は約0.7mである。これに対し、造構検出面は南端部で67.7m前後、北端部では68.0m前後と比高差は0.3mにおさまる。

調査地の南部・北部ともに旧耕作が造構の検出面に及ぶため、造構面の上方はやや削平を受けていると考えられよう。また、もともと比高差の少ない平坦面に田の水廻しの為に南北に人為的な土の移動がうかがえる。このため調査区Bの半分より以北では耕上直下に包含層が現れる。また検出面の全面に暗渠排水・水路・耕作農具痕等が見られる。また水路の埋積上はいわゆる青灰色系の還元色を呈する。

基本層序は1. 耕作土 2. 床土 (旧耕作上・盛り土含む) 3. 包含層 (暗茶褐色上) 4. 造構埋積土 (黒褐色上) 5. 流路内堆積土 (青灰色土) 6. 流路内包含層 (黒褐色土) 7. 地山 (黄褐色粘質土及びシルト質・砂質青灰色粘土) である。

(2) 造構の概要

A. 流路

調査区Aでは詳細不明だが古代以降であろう流路と、古代の流路を検出した。調査区Bでは、古代のものと思われる、流路2本を検出した。

SD01 (第28図)

調査区B北端部X92付近から地山が徐々に落ちていき耕上直下の茶褐色粘質土が厚みを増し堆積している状況を確認した。後述のSD02・03・04は上面を茶褐色粘質土に覆われることから、古代以降近代までの流路と思われるが、それを裏付ける遺物の出土を見なかった。

SD02 (第28図)

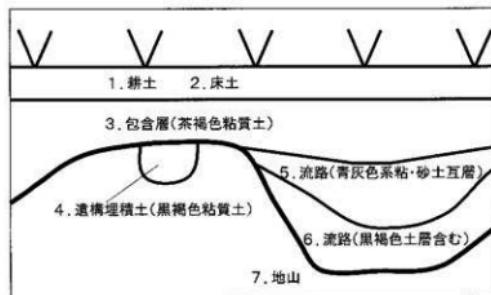
X57ライン区で地山が南西方向に落ち込む。深さは約1.7mで、断面の観察では大きく2層に分けられ上層は流路特有の細砂・粘質土の交互堆積が認められ、下層は有機質を含む砂質土を主に、黒褐色粘質土の薄い層が地山直上に認められる。流路の肩部で地山直上の黒褐色粘質土から内面黒色土器の杯が出土したことから、古代の流路と思われる。上層堆積土に、やや時期の古い須恵器(1)などが混じる。

SD03 (第27図)

調査区Bの調査区南端で追いきれなかったSD02の南側肩部は、調査区Aの北側で検出できるものと予想していたが、予想に反し青灰色の粘質土が堆積する落ち込みとして調査区Aの北端部で検出した。SD02の延長の堆積としてはやや様相が異なるため新旧の重なりを考えSD03とした。SD02の急激な落ち込みに対し、緩やかに立ち上がる。地山直上から遺物(69)が出土した。

SD04 (第27図) (図版20・21)

SD02と同様急激に落ち込む。深さは1.5mを測る。北側の肩部では地山直上の下層堆積から今回の調査の90%を越える上器が出土した。この部分は、肩部が直線的にのびると想定すれば、川幅は約20mと非常に



第5図 2地区基本層序

広くなる、しかし等高線に見られるように流路中央部に西側から張り出す部分があることから、本来の肩部は南側が直線に走り、北部側は凹部の一番奥まった部分を検出したことも想定できる。

B. 建物群（第29図）

建物群は調査区Bの北半部で4棟検出した。この地区は特に耕作に伴う暗渠排水や用水による擾乱を受けしており、失われている柱穴も多い。また、2棟については調査区外にのびるために推定である。検出したプランについては総柱としてもよいが、すべて側柱の堀方がしっかりと掘られており、内側の柱穴は浅く、不定形に近い。単なる東柱と考えるのが妥当であろう。このことから側柱建物と考えられる。また、時期を裏付ける土器が出土しなかったため、断定はできないものの隅丸方形の大きな堀方から7世紀後半のものと思われる。各建物の時期差については不明である。

SB01（第29図）（図版19）

X81Y1区の東壁に1辺70cm程の隅丸方形の穴を検出した。堀立柱建物の柱穴として間違いないものと思われる。方形の方向が、後述のSB02とは同じであるが、SB02の柱穴延長上ラインからは若干はずれるために別の建物として数える。検出した柱穴は1つであり、本体は調査区外に延びるためにプランは全く不明である。

SB02（第29図）（図版19）

X82.5Y1区を中心に検出したプランである。検出できた柱穴から2間×2間以上の建物と思われるが南隅を用水の擾乱により失っており、今回の調査区からは全体を明らかにはできない。柱穴2-4・2-5はいずれも梢円形で浅く、また柱間も短く本來の1間に東柱を追加したことを想定できる

SB03（第29図）（図版19）

北側の2間の柱列を検出した。3-1はほとんどが用水の擾乱中にあり、その埋土も他の柱穴の埋土に比べ若干異なる印象を受けたが、想定プラン上に合致したため、SB03の柱穴と考えて差し支えないだろう。北側を用水の擾乱により失っているため、詳細が不明だが2間×2間以上のプランを想定できる。柱穴列はSB02と方向列が同一であるが柱間が違うために別の建物とした。したがって、SB02とは切り合うために同時期に存在したとは考えにくい。

SB04（第29図）（図版19）

東西に1間、南北に2間の柱列を検出した。東側の柱列は側柱と見て間違いない、建物は西の調査区外に延びる。4-1・4-2・4-3の位置関係から桁行の方向はSB02同様東西と考えらる。また、隅柱4-6のそばに4-7を検出した。様子あとか。

③ 遺物の概要

遺物が出土したのは古代の流路のみである。その大半がSD04の土器溜まりから出土した。時期はおおむね7世紀後半～8世紀にかかる。ここでは遺構ごとにまとめ、器種ごとに概観する。また、杯A・B等について、数値詳細を計測表に記載する。

SD02（図版22・25）（第30・33図）

地山直上からへら記号の入った内面黒色土器（95）が出土している。また、調査区Bの南端部壁から須恵器大甕（1）が出土した。大甕の出土層位は底面の堆積ではなく、砂質の流れ堆積中であるため、周辺からの流れ込みであろう。この砂質の堆積上巾からは（8）のハソウも出土している。

SD03（図版24・25）（第32・33図）

杯B（69）地山直上のややねりのある層より出土した。SD04出土の杯B群に対し一回り大きく、深い。杯蓋（79）はX37Y2区より出土した。「×」の記号が、漆で大きく描かれている。

SD04 (岡版22~27) (第30~35図)

X20からX29にかけて流路の最下層部埋積土に多量の遺物が混じる。時期はおおむね8世紀初頭に收まるものと考えられる。転用窯が數多く見られ、完形の須恵器の杯身や杯蓋が多い。

須恵器大壺 2は灰白色で固く焼き縮まり、陶器のようである。頸部が短く立ち上がる。3は、胴部のみで、ひび割れを漆による補修した痕が見られる。

短頸壺 4は蛸壺のような外形を持つ長頸短頸壺である。底部は全くの平らで円盤からの成形かもしれない。5・6は似たような外形を持つが、5がやや灰白色の軟質な焼きであるに対し、6は燃焼部の近くで焼かれたのか全面に灰をかぶり、茶褐色の硬質な焼き上がりである。

壺蓋 7は小破片であるが、立ち上がりが直角に近く、また、口径から壺蓋と判断した。

高杯 須恵器の高杯はこの一点のみである。口縁部に幅2cmほど軽い面を作り上げる。

杯A 10~35の25点で図化し得なかったものをふくめるとさらに数が増える。異質なのは27で、壺の底部のように角張る。ヘラ記号を持つ物は28~35までの8点で、28は底部外側の角に小さな「×」印を29は底部外側に「*」印を刻んでいる。30~35は実測図を重ねると一致するほど、似かよっている。いずれも底部外側に「×」印を刻んでおり、これらは同一一人によるものと考える。

杯B 36~69までの33点で、図化し得なかつたものをいれるとさらに増える。明らかに転用窯として、認められる物は39・36・45・48・51・53・59・63である。36・51は高台のすぐ上方一角に「×」を漆で描き、転用窯である。この他、黒っぽい汚れが内面に認められるものがある。45は高台に囲まれた底部外側に「×」印のヘラ記号があり、46とともにヘラの押さえ跡が認められる。

杯蓋 23点図化し得た。この内、明らかに転用窯として認められるのは、72・73・74・76・77・79・80・83・86の9点である。このうち73はつまみ近くに漆記号を有し、80は正位で窯としている。

内面黒色土器碗 92~94で、いずれも内外面に細かいミガキが見られる。

内面黒色土器杯 96・97である。この2つには内面黒色上器の焼成外観を持つものの、外観は須恵器の杯Aと何ら変わりない。焼成のみ内面黒色上器の手法に従ったものであろう。

内面黒色土器高杯 脚部の形状は大きく3つに分かれ、杯部の形状は2つ分かれ。脚部が端部までハの字に伸びるもの100・103、途中屈曲の強弱があり端部に面をつくるもの101・102、柱状部を経てハの字に開くもの104である。杯部が須恵器の杯Aの形状をなすもの100・101・102と土師器の碗の形状をなすもの103・104である。

赤彩土師器碗 98は器高の1/3より上に右回転の調整が認められ、下に左回転のケズリが認められる。79は残存状況が悪く調整は不明だが、98よりも身が一回り深くなる。

土師器壺 105・106とも端部の角が鋭く仕上がり、外面は縦にハケを使った後、底部をケズリで仕上げる。内面は荒いハケを大きなストロークで斜め・横に掃く。

土師器小壺 107・108ともに似た細かいハケを縦に施す。109・110は底部にケズリが認められ胴部に横のハケが施される。

瓶 111である。荒いハケで仕上げる。112・113は似た調整を持つ口縁部で瓶の口縁部かもしれない。

土師器壺 114~124までの11点を図化することができた。ほとんどのものに底部が見られない。これらは被熱のために残りが悪いのかもしれません、あるいは底の抜けたものの廃棄が主かと思われる。

木製品 曲げ物の底板であろう。128は6ヶ所、129は2ヶ所の釘跡が認められる。

(4) 小結

調査区が限定されているために、遺構の全体を明らかにすることはできなかった。しかし、検出できた柱穴から建物のプランをかろうじて復元できた。この成果に今後訂正がないとはいきれないが、最低限の検討資料は提示できたと考える。

一部擾乱によって切り合い関係を明らかにすることのできなかったSB02とSB03の時期差など、残された課題も多いが、その柱穴規模と計画性に、建物群の性格を見いだすことができよう。

SD02・04は、ともに急角度の岸を持ち、人工的な水路を示唆している。また、SD04は推定で幅10m程の水路であろうが、今回検出した土器溜まり地点は、その北西部の岸辺に設けられた凹部である可能性が高い。また、遺存状況が悪く、十分な検討もなされていないが、土器溜まり地点に、杭列を検出しており、状況からの乱暴な推測ではあるが、川にかかった桟橋も想定できる。これにより、周間に土器が密集した状態が理解できるのではないだろうか。

出土した遺物については、流路内の遺物であるため、いわゆる一括資料として取り扱うことはできない。しかし、廐棄または遺失が永年にわたり、同一の場所で行われたとは考えにくいくことから、ほぼ同時期の比較資料として、評価されるべきであろう。転用硯・補修痕・墨痕・漆による汚れ等は、内容について明らかになった遺跡での類例が増えれば、使用形態や使用者達の実像に迫ることができるであろう。SD03から出土した土器の漆による記号など興味を惹くものも多い。また、今回は図示し得なかったが、凝灰岩系の切石の破片と思われるようなものもSD04の土器溜まりから出土している。

個々の遺構については耕土直下の同一検出面で、単独で検出された為に、時期の比較に決定的な要素を持たない。また、遺物も個々に検討していくと時期は微妙に整合性を欠く。このような状況で遺跡の性格付けをする事は非常に困難かつ、危険ではある。しかし、倉庫と思われる建物群や、水運が可能であったろう水路の検出、事務職を思わせる遺物の出土があり、文献資料に見られる流通拠点の存在等が確認されていることから、在房遺跡に古代における流通拠点としての位置づけを試みてよいのではないだろうか。

現時点での明確にできなかったことは建物群の規模であり、また、水路の平面での様相である。SD04とSD03・SD02との関連が現状では全く不明なことが水路に関する検討を全く困難にしている。

また、調査結果からはSD02・SD04の水量が豊富であったことを裏付けているが、現況で調査地と山田川との高低差は2m以上あり、大幅な地形の変化、あるいは水路の迂回を考えなければ、調査結果そのものに矛盾が生じるなど、山積みされた課題が多い。今後の調査においては、居住区等の有無の解明等、明確な課題を持って調査に望むべきであろう。

2地区から出土した遺物は次のとおりである。

- ・須 恵 器 大甕・短頸壺・壺蓋・高杯・ハソウ・杯A・杯B・杯蓋
- ・土 師 器 小甕・甕・瓶・
- ・内面黒色土器 杯身・高杯・碗
- ・赤彩土師器 瓢
- ・木 製 品 曲げ物底板
- ・そ の 他 砥石

(中井英策)

第6表 2地区出土遺物計測表

単位cm

図版番号	写真図版	遺物番号	通査番号	種類	器種	口径	器高	焼成	特記事項
第31図	図版23	10	S D04	須恵器	杯A	12.7	3.7	良	全面漆？付着
第31図	図版23	11	S D04	須恵器	杯A	13.3	3.9	軟	全面漆？付着
第31図	図版23	12	S D04	須恵器	杯A	13.5	3.8	軟	
第31図	図版23	13	S D04	須恵器	杯A	12.0	3.7	良	漆・墨、付着
第31図	図版23	14	S D04	須恵器	杯A	13.0	3.8	軟	被熱？土師器技法
第31図	図版23	15	S D04	須恵器	杯A	12.0	3.1	軟	土師器技法
第31図	図版23	16	S D04	須恵器	杯A	11.0	3.5	軟	土師器技法
第31図	図版23	17	S D04	須恵器	杯A	12.7	3.8	やや軟	
第31図	図版23	18	S D04	須恵器	杯A	11.9	3.5	良	
第31図	図版23	19	S D04	須恵器	杯A	12.6	3.6	やや軟	漆塗布
第31図	図版23	20	S D04	須恵器	杯A	13.6	3.8	良	全体漆付着
第31図	図版23	21	S D04	須恵器	杯A	13.0	3.5	軟	全体漆付着
第31図	図版23	22	S D04	須恵器	杯A	12.7	3.5	良	
第31図	図版23	23	S D04	須恵器	杯A	12.5	2.8	良	内面漆付着
第31図	図版23	24	S D04	須恵器	杯A	12.9	2.8	良	
第31図	図版23	25	S D04	須恵器	杯A	12.0	2.5	軟	内面付着物
第31図	図版23	26	S D04	須恵器	杯A	12.6	2.5	軟	
第31図	図版23	27	S D04	須恵器	杯A	12.0	3.5	良	
第31図	図版23	28	S D04	須恵器	杯A	12.0	3.3	良	ヘラ記号
第31図	図版23	29	S D04	須恵器	杯A	12.0	3.5	やや軟	焼きゆがみ、ヘラ記号、船上砂粒多し
第31図	図版23	30	S D04	須恵器	杯A	13.2	3.2	良	
第31図	図版23	31	S D04	須恵器	杯A	13.0	3.0	良	ヘラ記号、漆付着か？
第31図	図版23	32	S D04	須恵器	杯A	12.7	2.5	良	ヘラ記号
第31図	図版23	33	S D04	須恵器	杯A	12.8	3.0	良	ヘラ記号
第31図	図版23	34	S D04	須恵器	杯A	12.9	3.1	良	ヘラ記号
第31図	図版23	35	S D04	須恵器	杯A	12.5	2.9	良	ヘラ記号
第32図	図版24	36	S D04	須恵器	杯B	14.9	3.9	堅緻	漆記号、内面漆付着
第32図	図版24	37	S D04	須恵器	杯B	14.2	4.7	良	漆付着
第32図	図版24	38	S D04	須恵器	杯B	13.7	4.1	堅緻	ヘラ押さえ痕、胎土から黒色噴出物
第32図	図版24	39	S D04	須恵器	杯B	13.8	4.3	良	転用硯
第32図	図版24	40	S D04	須恵器	杯B	14.0	4.3	軟	漆付着
第32図	図版24	41	S D04	須恵器	杯B	14.2	8.9	堅緻	胎土に黒色粒混
第32図	図版24	42	S D04	須恵器	杯B	13.8	4.3	堅緻	内面明青灰色
第32図	図版24	43	S D04	須恵器	杯B	14.0	3.6	堅緻	内面漆
第32図	図版24	44	S D04	須恵器	杯B	14.6	3.9	堅緻	漆
第32図	図版24	45	S D04	須恵器	杯B	13.8	3.9	堅緻	ヘラ記号
第32図	図版24	46	S D04	須恵器	杯B	13.6	4.2	堅緻	ヘラ押さえ痕
第32図	図版24	47	S D04	須恵器	杯B	12.0	3.7	やや軟	
第32図	図版24	48	S D04	須恵器	杯B	13.0	3.8	堅緻	転用硯、墨痕、漆？
第32図	図版24	49	S D04	須恵器	杯B		3.5	良	
第32図	図版24	50	S D04	須恵器	杯B	13.8	4.0	軟	
第32図	図版24	51	S D04	須恵器	杯B	13.0	4.0	良	転用硯、漆記号、内面漆塗布か
第32図	図版24	52	S D04	須恵器	杯B	14.0	4.3	良	
第32図	図版24	53	S D04	須恵器	杯B	13.7	3.8	良	胎土に黒色粒、転用？、内面漆
第32図	図版24	54	S D04	須恵器	杯B	14.6	4.2	堅緻	内面漆
第32図	図版24	55	S D04	須恵器	杯B	14.4	4.2	良	
第32図	図版24	56	S D04	須恵器	杯B	13.6	4.3	堅緻	漆付着？
第32図	図版24	57	S D04	須恵器	杯B	14.0	4.6	良	ヘラ押さえ痕、内面漆、焼けぶくれ

図版番号	写真図版	遺物番号	造構番号	種類	器種	口径	器高	施成	特記事項
第32回	図版24	58	S D04	須恵器	杯B	13.9	3.8	良	
第32回	図版24	59	S D04	須恵器	杯B	14.4	3.9	良	転用硯
第32回	図版24	60	S D04	須恵器	杯B	14.7	4.4	やや軟	全面に漆?
第32回	図版24	61	S D04	須恵器	杯B	14.4	4.6	軟	
第32回	図版24	62	S D04	須恵器	杯B	14.4	4.3	堅敏	
第32回	図版24	63	S D04	須恵器	杯B	14.0	3.9	堅敏	転用硯、内面漆?、胎土黒色粒混
第32回	図版24	64	S D04	須恵器	杯B	14.5	3.9	良	内面漆?付着
第32回	図版24	65	S D04	須恵器	杯B	14.8	4.0	軟	内面漆か?
第32回	図版24	66	S D04	須恵器	杯B	16.8	4.2	良	内面漆か?
第32回	図版24	67	S D04	須恵器	杯B	9.0	4.6	堅敏	
第32回	図版24	68	S D04	須恵器	杯B	10.8	3.2	堅敏	高台剥離
第32回	図版24	69	S D03	須恵器	杯B	15.6	5.9	堅敏	
第33回	図版25	70	S D04	須恵器	杯蓋		4.1	軟	
第33回	図版25	71	S D04	須恵器	杯蓋	16.4	3.3	軟	墨痕
第33回	図版25	72	S D04	須恵器	杯蓋	16.9	3.1	軟	転用硯、内面摩耗
第33回	図版25	73	S D04	須恵器	杯蓋	18.0	4.0	良	転用硯、墨痕、つまみ近くに漆記号、つまみ先端剥離
第33回	図版25	74	S D04	須恵器	杯蓋	16.0	2.8	良	転用硯、内面漆混ざる?
第33回	図版25	75	S D04	須恵器	杯蓋	15.0	3.3	やや軟	
第33回	図版25	76	S D04	須恵器	杯蓋	13.8	3.0	良	内面摩耗痕、転用硯?
第33回	図版25	77	S D04	須恵器	杯蓋	16.4	2.5	堅敏	転用硯、漆混ざる?
第33回	図版25	78	S D04	須恵器	杯蓋	15.8	3.2	堅敏	漆付着あり、灰かぶる
第33回	図版25	79	S D04	須恵器	杯蓋	16.0	3.5	良	墨痕、転用硯
第33回	図版25	80	S D04	須恵器	杯蓋	15.0	2.1	堅敏	漆付着、正反で転用硯、胎土からの墨色剥離物
第33回	図版25	81	S D03	須恵器	杯蓋	15.2	2.9	良	漆記号
第33回	図版25	82	S D04	須恵器	杯蓋	15.0	2.5	良	胎土黒色粒
第33回	図版25	83	S D04	須恵器	杯蓋	15.0	2.0	堅敏	転用硯
第33回	—	84	S D04	須恵器	杯蓋	17.4	1.5	堅敏	
第33回	図版25	85	S D04	須恵器	杯蓋	15.8	2.5	良	
第33回	—	86	S D04	須恵器	杯蓋	16.6	2.5	良	転用硯
第33回	—	87	S D04	須恵器	杯蓋	16.1	2.3	良	
第33回	図版25	88	S D04	須恵器	杯蓋	16.0	2.3	やや軟	
第33回	—	89	S D04	須恵器	杯蓋	13.4	2.1	良	
第33回	—	90	S D04	須恵器	杯蓋	12.4	2.6	堅敏	
第33回	図版25	91	S D04	須恵器	杯蓋	14.0	2.7	堅敏	灰かぶる
第33回	図版25	92	S D04	内面黒色土器	碗	18.6	5.7	良	外面に漆?
第33回	図版25	93	S D04	内面黒色土器	碗	16.2	2.3	良	外面に漆のようなくすみ
第33回	図版25	94	S D04	内面黒色土器	碗	11.8	3.3	良	ヘラ記号
第33回	図版25	95	S D02	内面黒色土器	碗	15.2	3.8	良	ヘラ記号
第33回	図版25	96	S D04	内面黒色土器	杯	14.2	4.0	良	
第33回	—	97	S D04	内面黒色土器	杯	15.0	3.6	良	外面に被熱痕あり
第33回	図版25	98	S D04	赤彩土師器	碗	18.5	5.7	良	
第33回	図版25	99	S D04	赤彩土師器	碗	18.1	8.2	良	
第33回	図版26	100	S D04	内面黒色土器	高坏	12.5	5.3	良	内面の炭素吸着不良
第33回	図版26	101	S D04	内面黒色土器	高坏	13.7	5.7	良	
第33回	図版26	102	S D04	内面黒色土器	高坏	13.8	6.3	良	
第33回	図版26	103	S D04	内面黒色土器	高坏	14.9	5.0	良	
第33回	図版26	104	S D04	内面黒色土器	高坏	14.5	7.5	良	

4. 在房遺跡のまとめ(第6図)

- ・ 今年度の発掘調査では7世紀前半、7世紀後半～8世紀、9世紀中頃、12世紀前半の遺構を検出した。
- ・ 試掘調査結果から7世紀前半の集落は段丘の際に分布していることがわかつている。今回調査した1地区も段丘の際に位置する。
- ・ 7世紀前半の集落の特徴としては、存続期間が長期ではないこと、各住居に完成したカマドを持つが須恵器をほとんど持たないこと、が挙げられる。
- ・ 8世紀～9世紀の遺構は遺跡全体に広がっており、この時期が遺跡の主体となると考えられる。出土遺物には転用窯、墨書き土器などがあり、在房地区には拠点的な集落が営まれていたと考えられる。
- ・ 2地区は幅の狭い範囲での調査であったが、遺跡の全体像を考える上で重要な資料を得ることができた。
- ・ 12世紀前半の遺構・遺物は在房遺跡内ではあまり見つかっておらず、南隣の久戸Ⅱ遺跡のほうで遺物がまとまって出土している。この時期になると集落の中心は在房よりも南の久戸地区や梅原地区に移っていたと思われる。
- ・ 今回調査した1地区では、土器祭祀を多く行っている。同時期の久戸Ⅱ遺跡や梅原胡摩堂遺跡ではこのような遺構では検出しておらず、当地区はこの時期の中でも特殊な屋敷地であったことが伺える。

(深田亜紀)



第6図 在房遺跡遺構分布図 (1:10,000)

引用・参考文献

- 青山 晃2000「富山県におけるカマド出現期の様相―婦中町由名Ⅵ遺跡検出のカマド付き竪穴住居を中心として」『富山考古学研究 第3号』
- 戸瀬幹夫1983「能登式製塙 I: 器一型式分類とその変遷」『北陸の考古学』石川県考古研究会
- 石川県婦中島町教育委員会1995「ヤトン谷内遺跡」
- 内田麻希子1997「越川における古代土師器の編年考察」『埋蔵文化財調査概要―平成8年度―』財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 宇野隆大1989「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」真陽社
- 宇野隆夫1991「律令社会の考古学的研究」桂書房
- 小矢部市教育委員会1985「桜町遺跡・産田地区発掘調査概要一」
- 小矢部市教育委員会1990「北佐久遺跡」
- 柿田祐司2000「調査・研究報告4 能登地域における11・12世紀代のロクロ土師器について(粗描)」『石川県埋蔵文化財情報第3号』財团法人石川県埋蔵文化財センター
- 金沢市教育委員会1987「千木ヤシキダ遺跡II」
- 金沢市教育委員会1991「千木ヤシキダ遺跡III」
- 岸本雅敏1983「富山県における土器製塙の成立と展開」『北陸の考古学』石川県考古学研究会
- 久世康博1998「京都市域における埋納(祭祀)構造の集成。『研究紀要第5号』財團法人京都市埋蔵文化財研究所
- 財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1994「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」
- 財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1996「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
- 財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1996「梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・戸尻追跡発掘調査報告」
- 財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1998「五社遺跡発掘調査報告書」
- 財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所2000「埋蔵文化財調査概要」
- 山海堂1995「技術者のための地形学入門 研究第3号」
- 高岡市教育委員会1997「麻生谷遺跡・麻生谷新生山遺跡調査報告」
- 富山県教育委員会1982「富山県小杉町・大門町小杉流通業務町内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」
- 富山県埋蔵文化財センター1993「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3) 任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡」
- 富山県埋蔵文化財センター1994「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4) 吉倉B遺跡」
- 富山県埋蔵文化財センター1996「任海宮田遺跡発掘調査報告書I」
- 富山県埋蔵文化財センター1997「任海宮田遺跡発掘調査報告書II」
- 富山県埋蔵文化財センター1998「任海宮田遺跡発掘調査報告書III」
- 林 博通1973「カマド出現における二・三の問題」「水と土の考古学」小江慶雄先生還暦記念論集刊行会
- 福岡市教育委員会1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多一高速鉄道関係調査(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊
- 福岡市・医王山文化調査委員会1983「医王山文化調査報告書 医王は説く」
- 舟橋村教育委員会2002「浦川遺跡発掘調査報告(3)」
- 北陸古代土器研究会1996「北陸古代土器研究第5号」
- 北陸古代土器研究会1997「北陸古代土器研究第7号」
- 前田清志1996「第4章 [上] 研究面の調査 第4節 土器祭祀の様相」『松任市三浦・半明遺跡』松任市松任市教育委員会
- 松任市教育委員会1996「松任市三浦・半明遺跡」
- 三島道子1996「第V章 考察 2 富山県における出現期のカマドについて」『五社遺跡発掘調査報告』財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 三島道子1998「第V章 考察 3 五社遺跡古代後期の土師器の編年について」『五社遺跡発掘調査報告』財團法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 宮山進・1997「第4章 越中国の様相 第2節 越中国における土師器編年」『中近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 雄山閣 1996「考古学による日本歴史15 家族と住まい」
- 横田賀次郎・森山勉1978「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
- 吉岡康輔1991「「木海城の土器・陶磁 [古代編]」六興出版

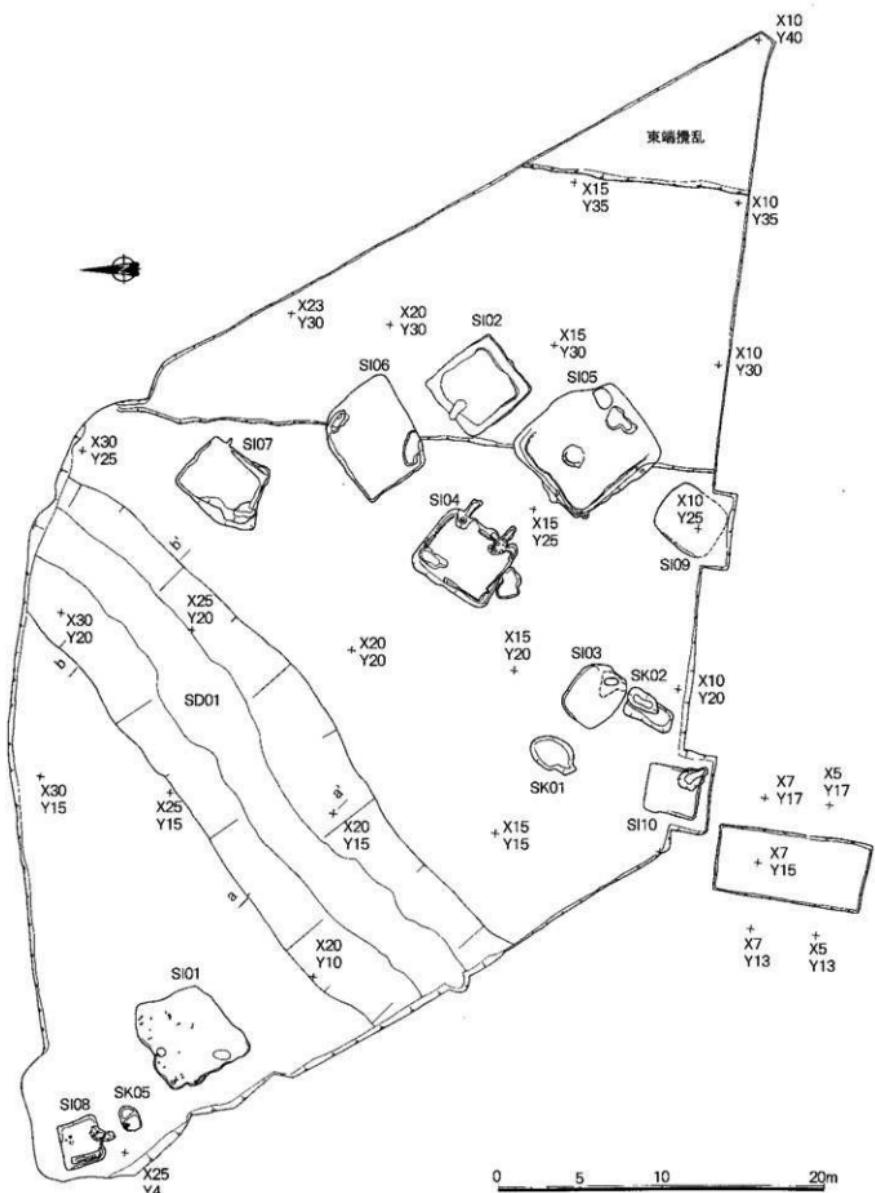
図版凡例

・遺構図

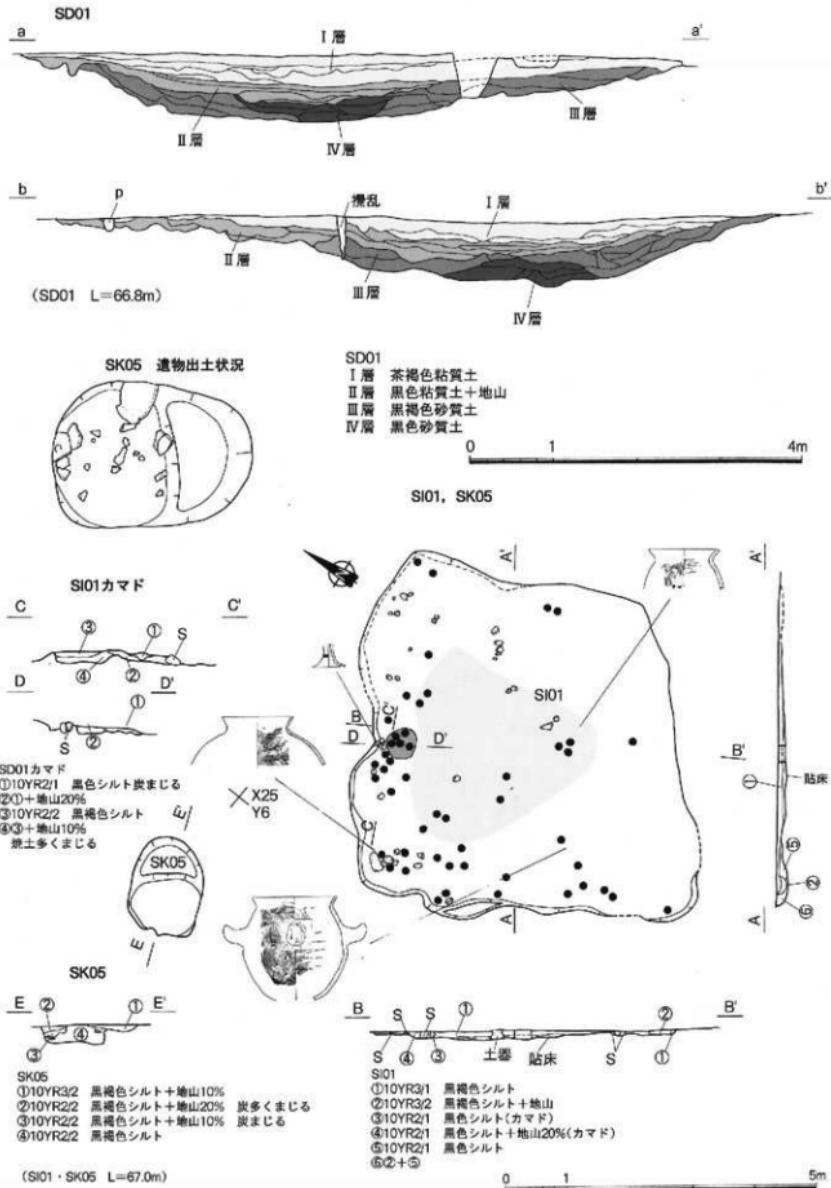
- 貼床
- 焙土
- 遺物出土地点

・遺物図

- 須恵器、珠洲
- 磁器
- 内面黒色部位
- 赤彩部位
- 漆付着部位

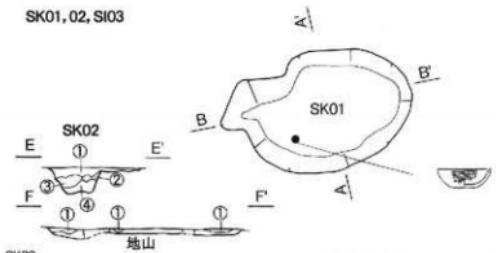


第7図 1地区下層造構配置図 (1:300)



第8図 1地区下層の遺構(1) (SD01は1:60, SI01-SK05は1:80, SI01カマドセクション・SK05遺物出土状況は1:40)

SK01, 02, SI03



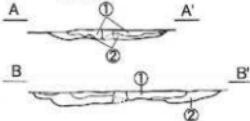
SK02

- ①2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト
1cm大のしょき多くまじる
- ②2.5Y3/2 黒褐色砂まじりシルト 塗まじる
- ③2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂まじりシルト
炭若干まじる
- ④2.5Y3/1 黒褐色シルト 粗砂まじり
炭、1~5cm大のレキまじる

SI03カマド

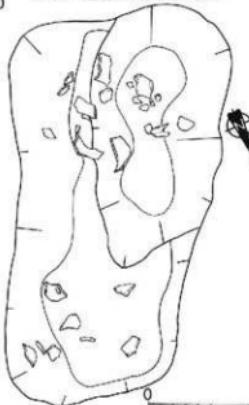
- ①10YR2/3 暗褐色砂まじりシルト(鉄土)
 - ②2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト
レキ、炭、鐵土若干まじる
 - ③④+2.5Y3/1 黒褐色シルト5%
 - ④2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂
 - ⑤2.5Y3/2 黑褐色砂まじりシルト
炭、鐵土まじる
- SI03
①2.5Y2/1 黒褐色細砂
②2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 粗砂まじる

SK01

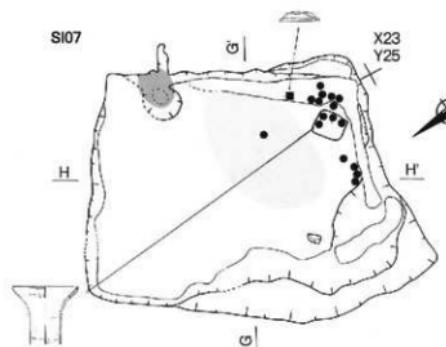


- SK01
①2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト
②2.5Y4/3 オリーブ褐色砂レキ(地山)

SK02 遺物出土状況(1:40)



SI07



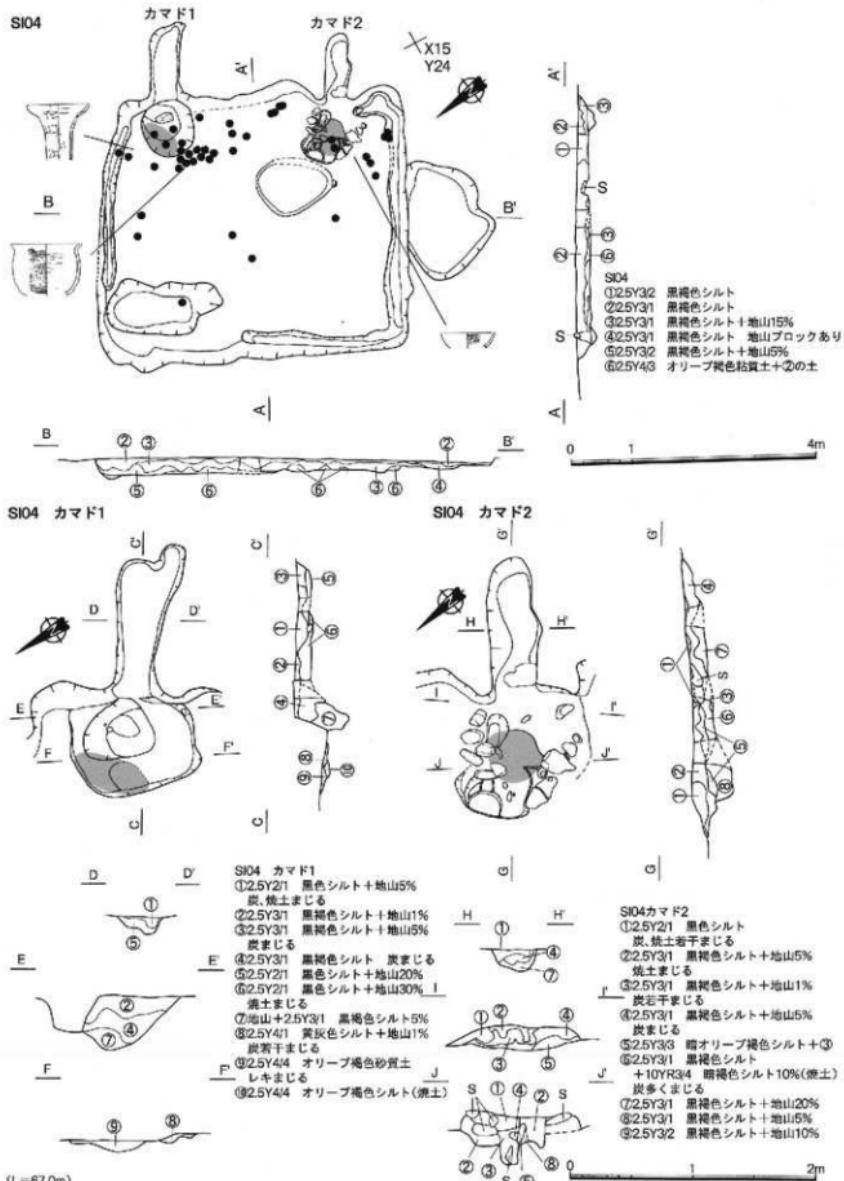
SI07

- ①2.5Y3/1 黒褐色砂シルト(新土)
- ②2.5Y3/2 黒褐色シルト+地山5%
- ③2.5Y3/1 黒褐色シルト
- ④2.5Y3/2 黒褐色シルト
- ⑤2.5Y3/2 黑褐色シルト30%
- ⑥⑦+地山 黒褐色シルト+地山40%

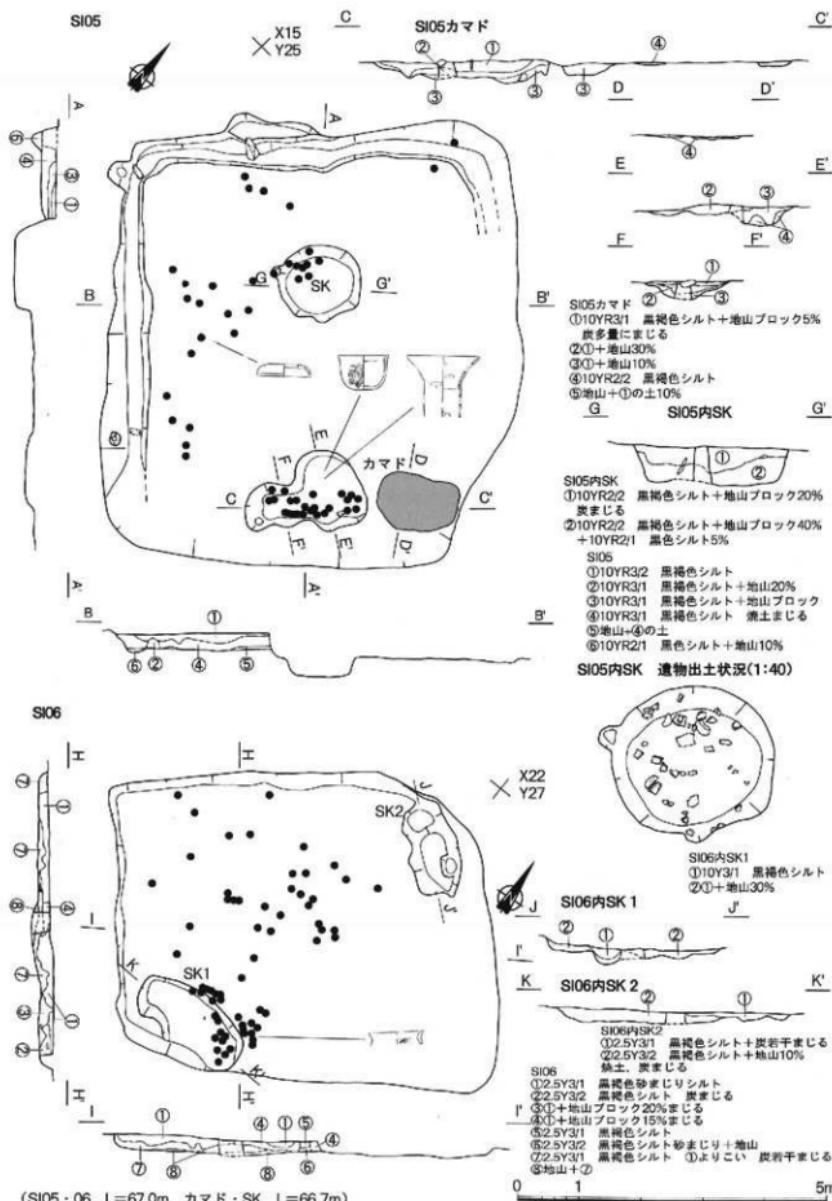
(L=67.0m)



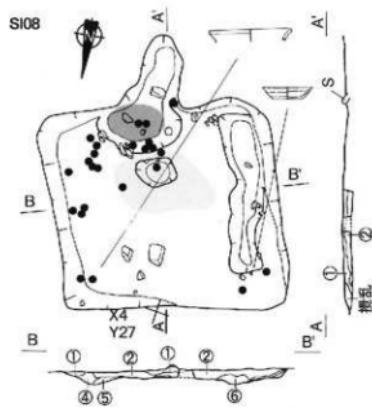
第9図 1地区下層の遺構(2) (1:80, SK02遺物出土状況は1:40)



第10図 1地区下層の構造(3) (1:80, カマドは1:40)

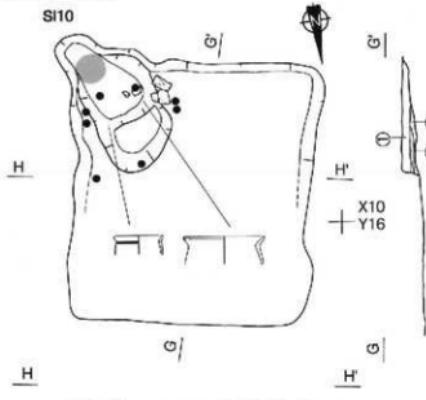


第11図 1地区下層の遺構(4) (1:80, カマド・SK・遺物出土状況は1:40)



SI08
 ①10YR2/3 黒褐色シルト+地山3%
 ②10YR2/3 黒褐色シルト 炭はじる
 ③2.5Y3/2 黒褐色砂質土 レキはじる
 ④2.5Y3/2 鮎オーリーブ褐色粘土
 ⑤2+地山
 ⑥2.5Y2/2 黒褐色シルト+地山5%

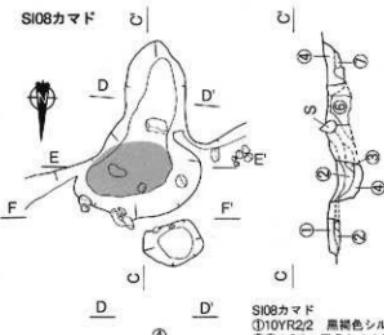
(SI08 L=67.0m)



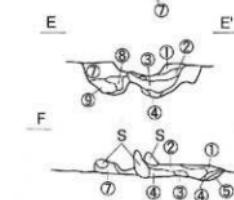
SI10
 ①10YR2/2 黒褐色砂はじりシルト 0.5~1cm大のレキはじる
 ②10YR2/1 黒褐色砂はじりシルト
 ③10YR2/2 黒褐色砂はじりシルト 0.5cm大のレキはじる
 ④10YR2/1 黒褐色砂はじりシルト 0.5cm大のレキはじる
 ⑤10YR3/3 黒褐色粗砂 0.5cm大のレキはじる

(SI10 L=67.3m)

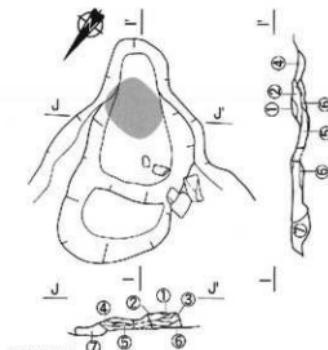
0 1 4m



SI08カマド
 ①10YR2/2 黒褐色シルト
 ②1+2/1 黒色シルト5%
 +地山15%
 ③10YR2/2 黒褐色シルト 焼土・炭はじる
 ④10YR2/3 黒褐色シルト
 +地山30%
 ⑤10YR2/2 黒褐色シルト
 ⑥地山+30% 炭はじる
 ⑦10YR2/1 黒褐色シルト
 +地山10%
 ⑧10YR2/1 黒褐色シルト
 +地山5%

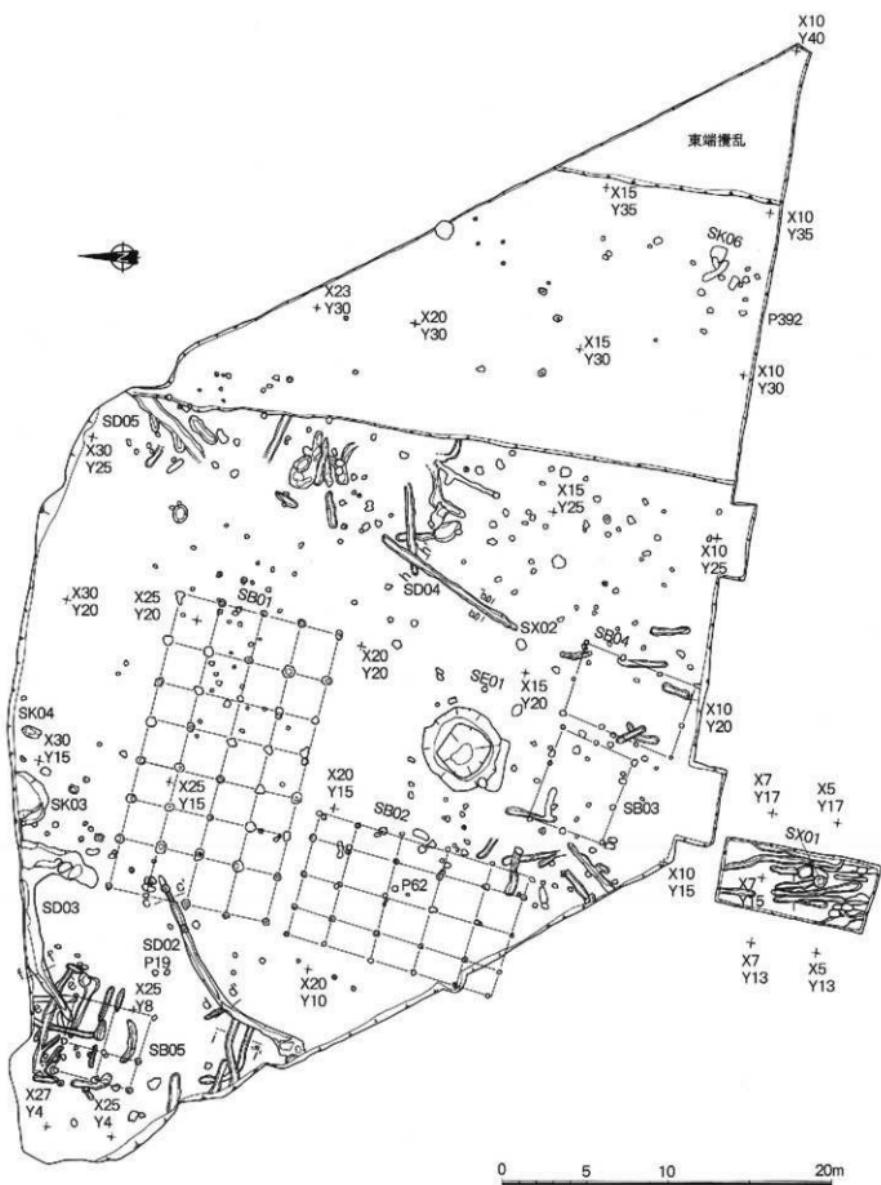


SI10カマド



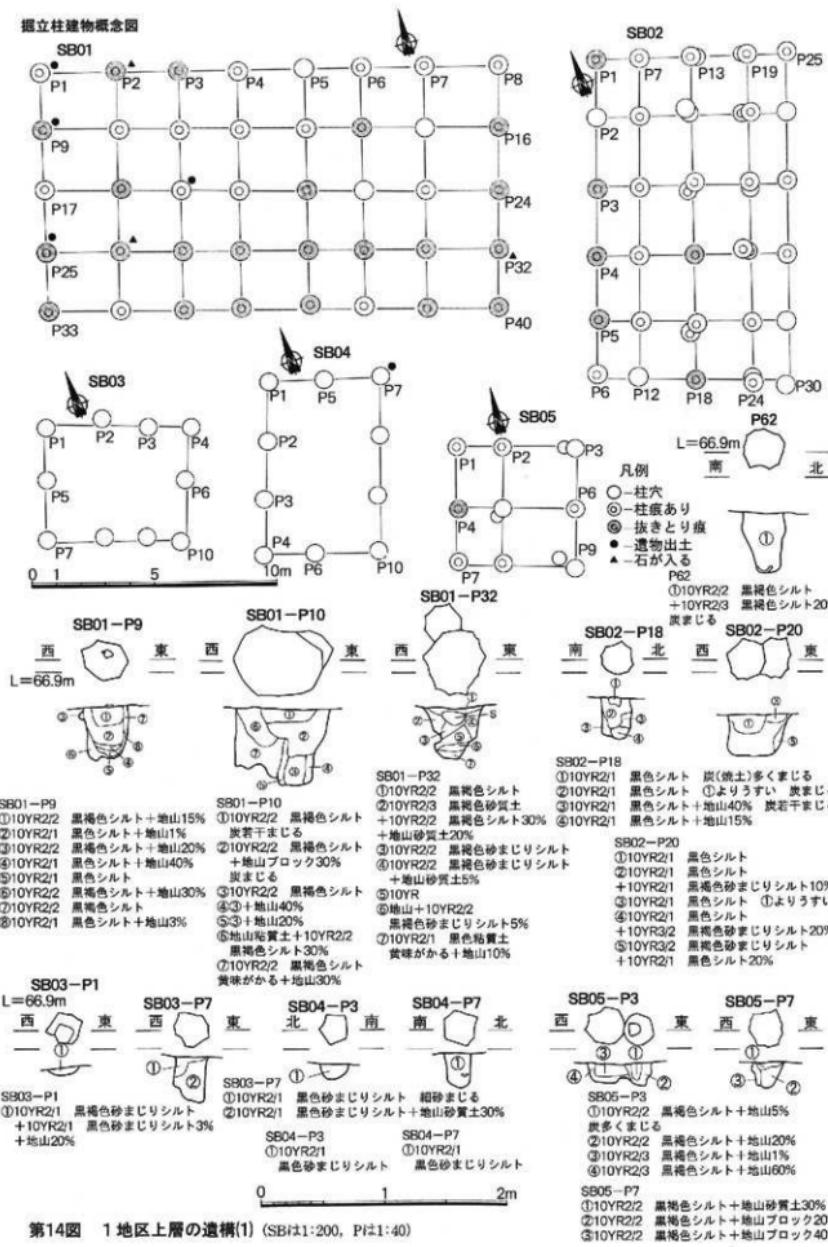
SI10カマド
 ①10YR2/3 黒褐色砂はじりシルト 0.5cm大のレキはじる
 ②10YR4/3 にぶい黒褐色粘質土
 +10YR2/2 黒褐色シルト 烧土はじる
 ③10YR2/2 黒褐色砂はじりシルト+地山砂質土10%
 ④10YR2/1 黒褐色砂はじりシルト
 ⑤10YR2/1 黒褐色砂はじりシルト
 ⑥10YR2/1 黒色砂質土 レキはじる
 ⑦10YR4/1 粘質土+10YR3/2 黑褐色粘土

第12図 1地区下層の遺構(5) (1:60, カマドは1:40)



第13図 1地区上層遺構配置図 (1:300)

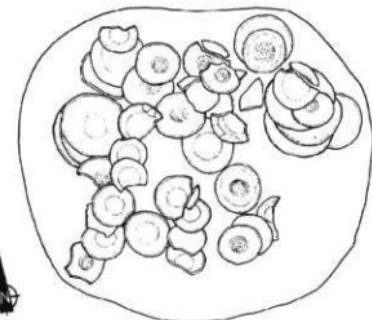
掘立柱建物概念図



第14図 1地区上層の構造(1) (SBは1:200, PIは1:40)

SX01

A

X5
Y15

A

A

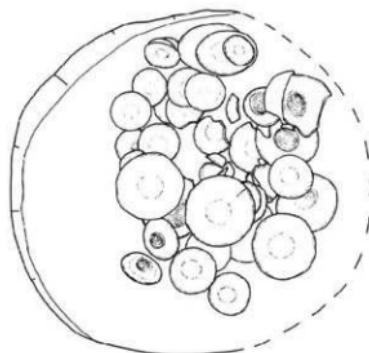


L=67.1m

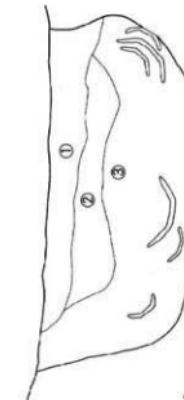
SX01
①10YR22 黒褐色砂まじリシルト 0.5cm大のレキをまじる

SX02

B

X15
Y21

B



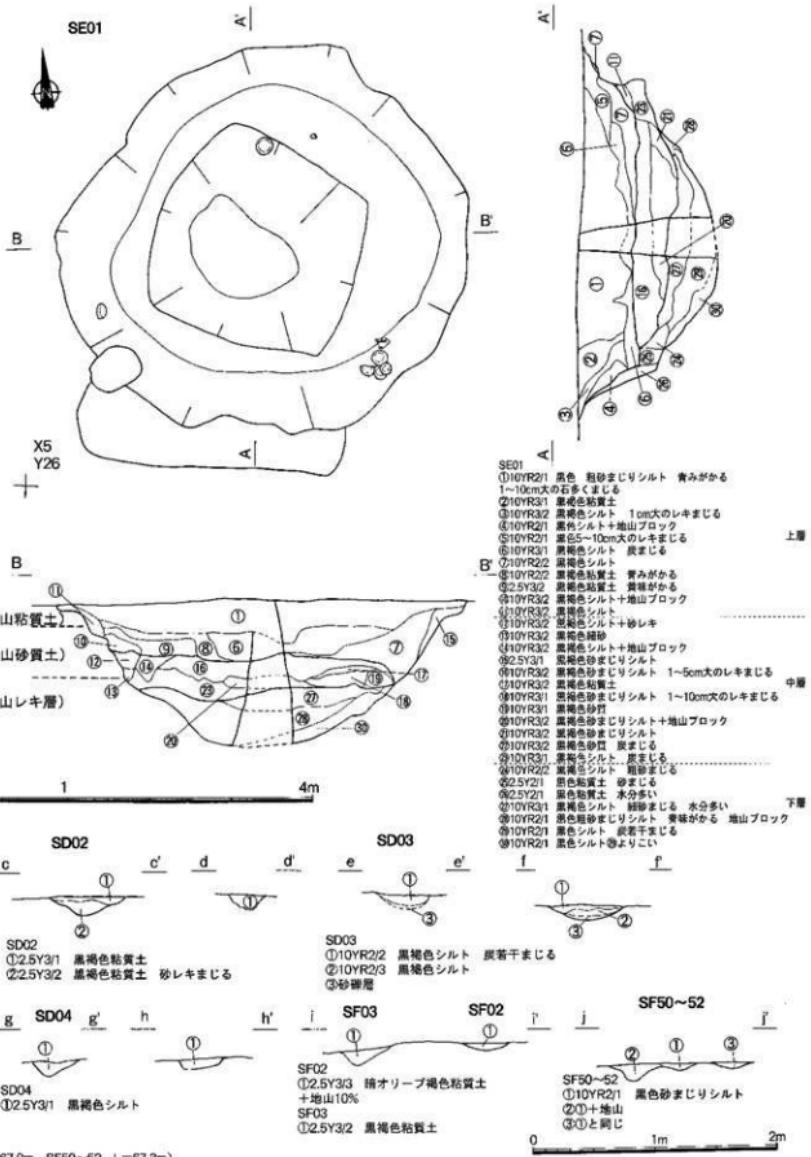
L=67.0m

SX02
①10YR21 黒褐色砂 0.5~1cm大のレキを多くまじる
②10YR21 黒褐色粗砂+塊状砂をまじる
③10YR23 黒褐色粗砂+塊状砂をまじる

0

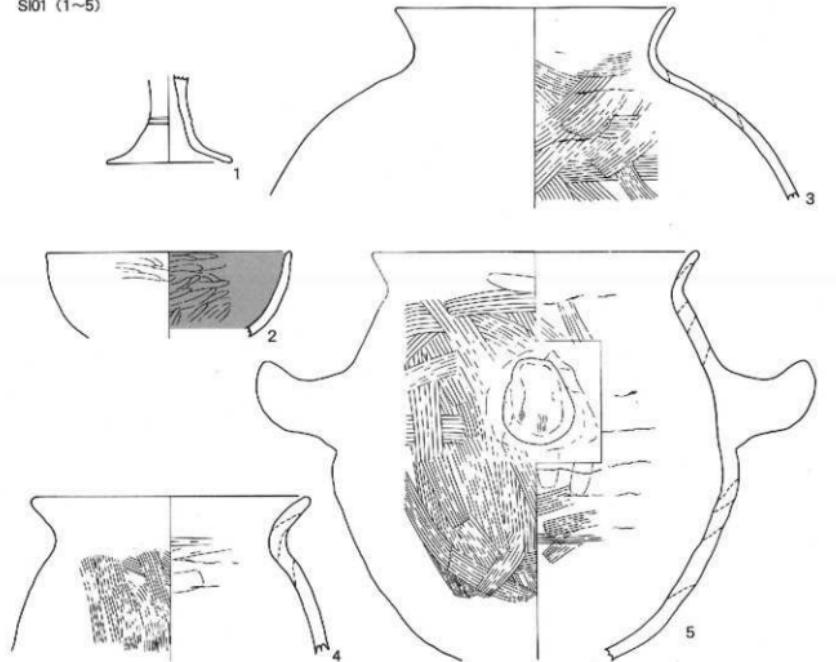
50cm

第15図 1地区上層の遺構(2) (1:10)

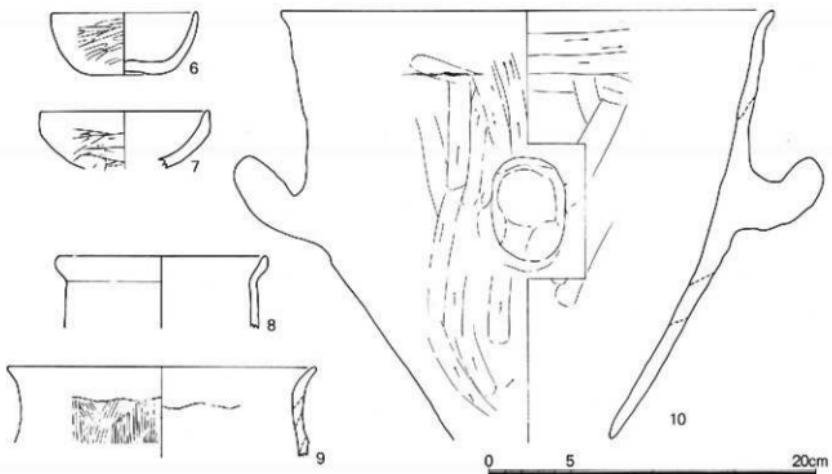


第16図 1地区上層の構造(3) (SE01は1:60, SD02~04・SF02~03・SF50~52は1:40)

SI01 (1~5)

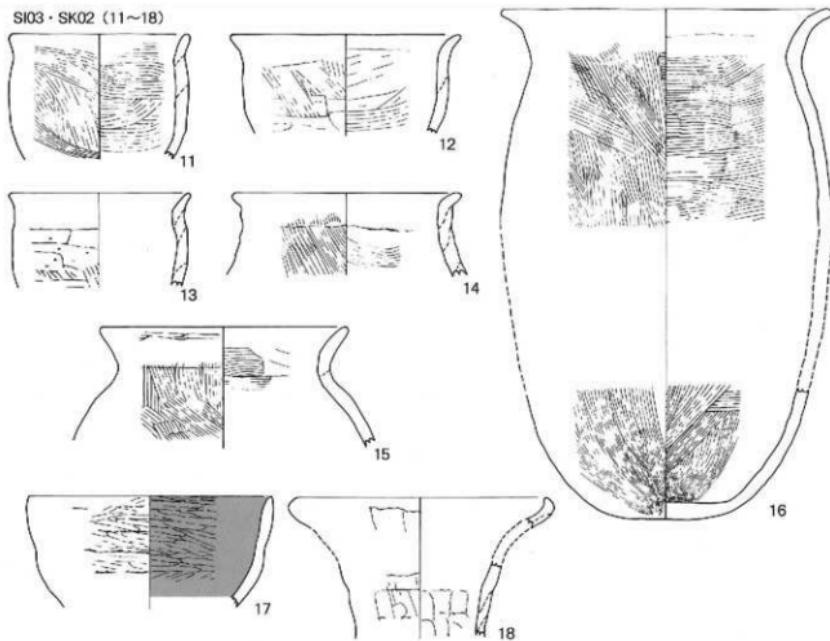


SK05 (6~10)

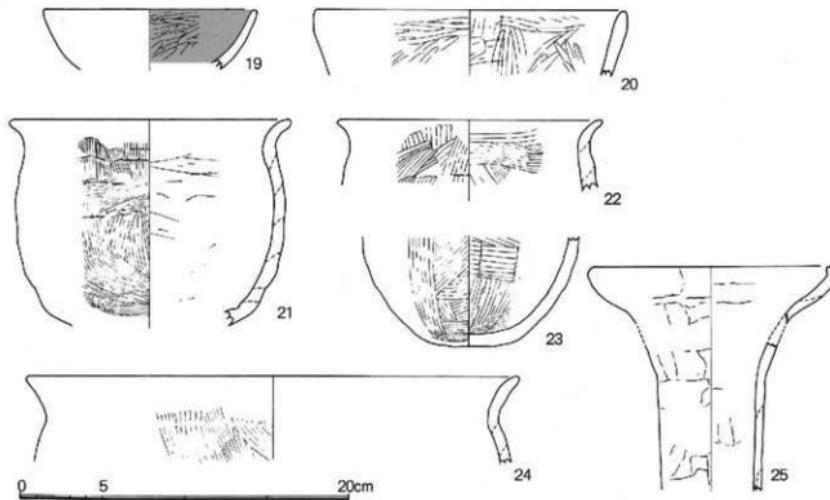


第17図 1地区下層の遺物(1) (1:3)

SI03・SK02 (11~18)

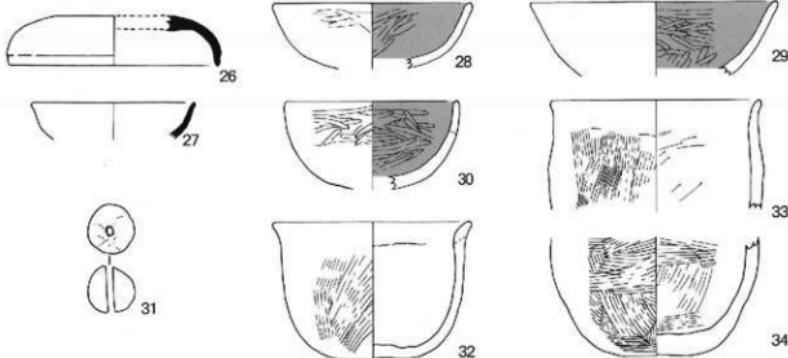


SI04 (19~25)

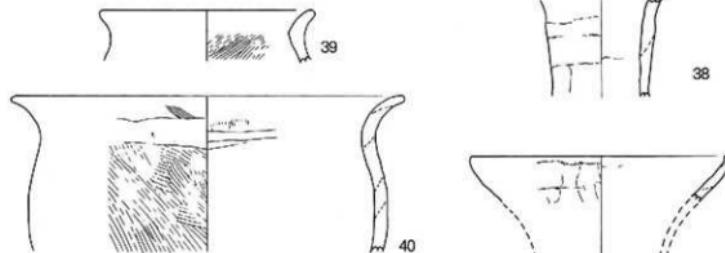


第18図 1地区下層の遺物(2) (1:3)

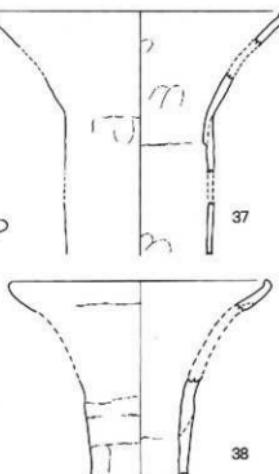
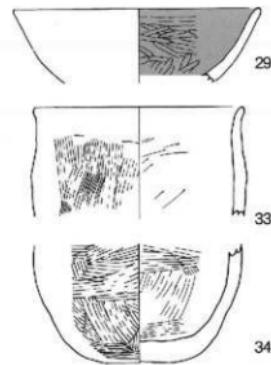
SI05 (26~38)



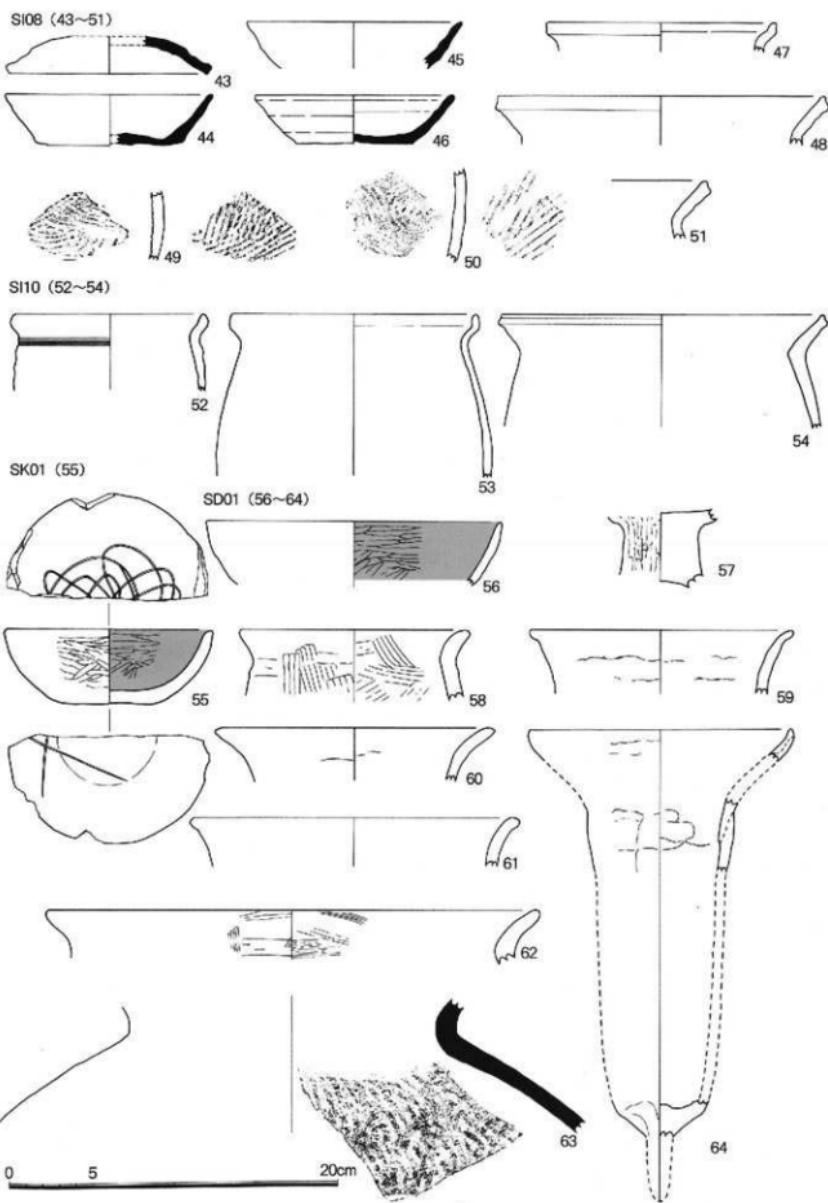
SI06 (39~40)



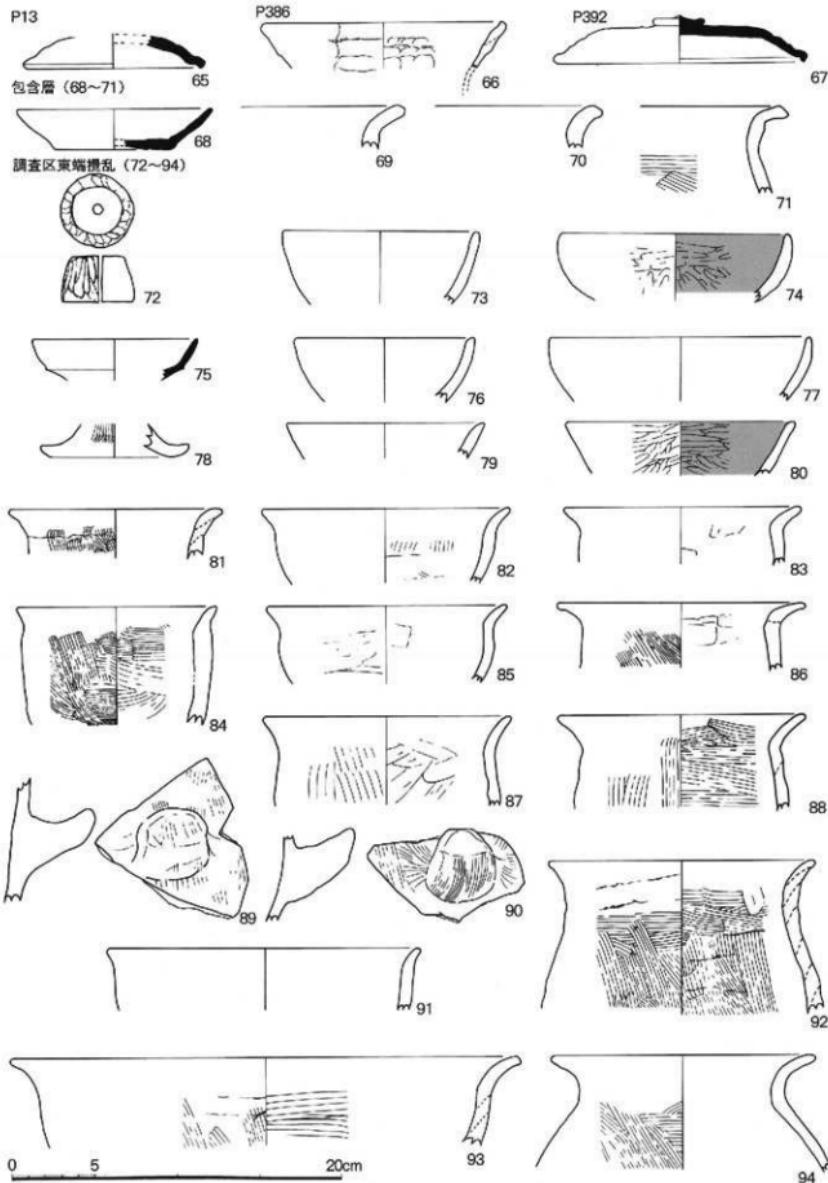
SI07 (41~42)



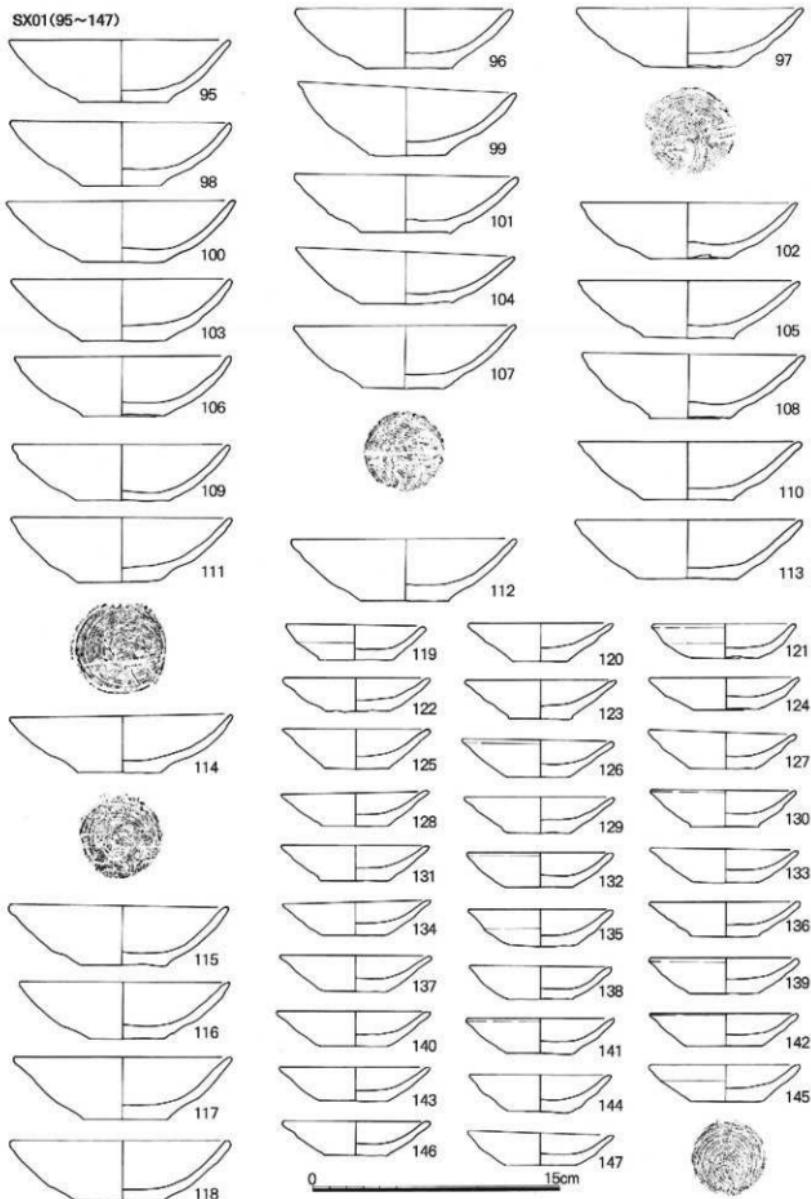
第19図 1地区下層の遺物(3) (1:3)



第20図 1地区下層の遺物(4) (1:3)

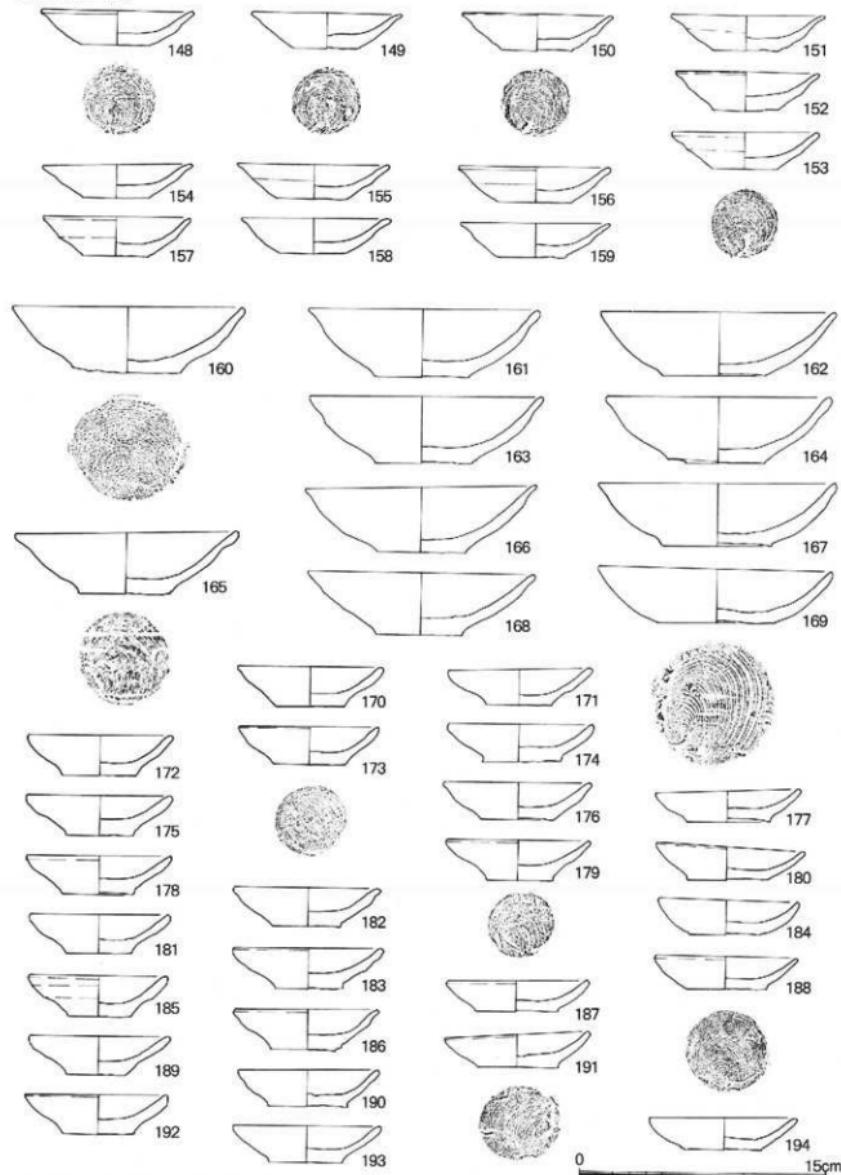


第21図 1地区下層の遺物(5) (1:3)

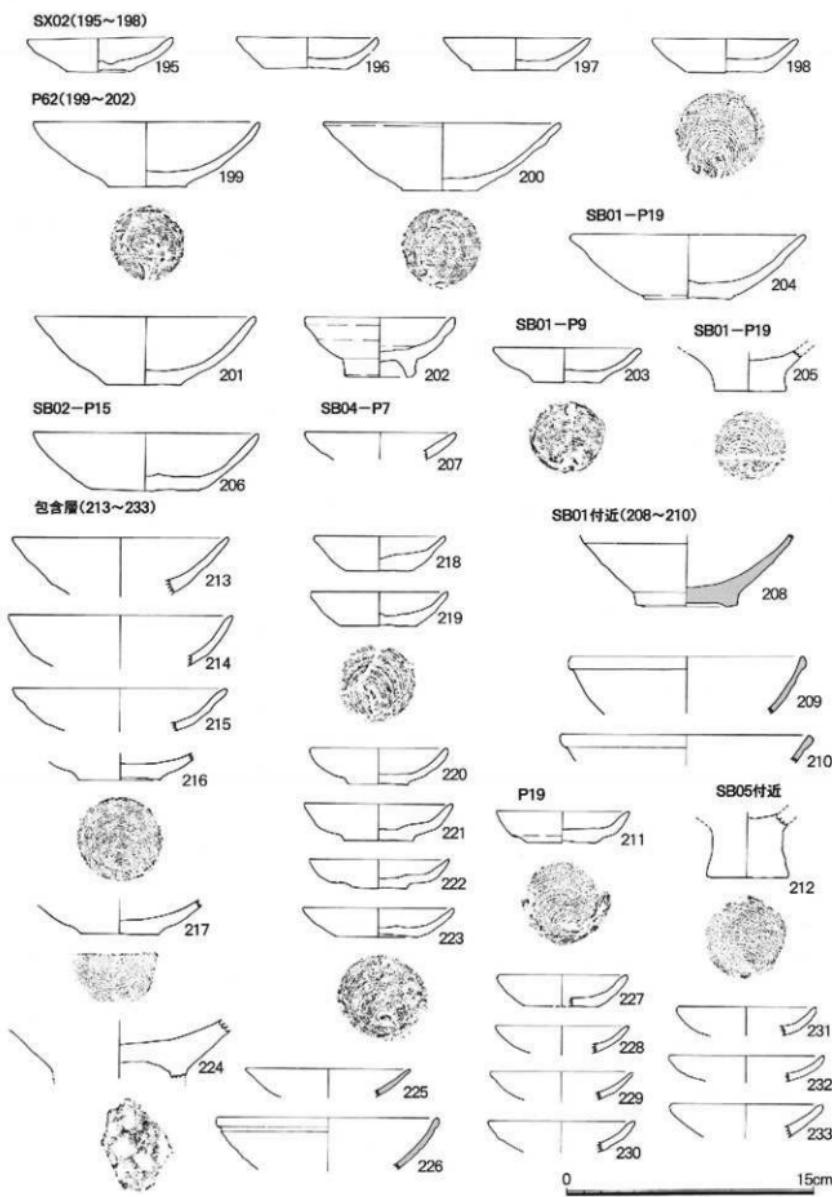


第22図 1地区上層の遺物(1) (1:3)

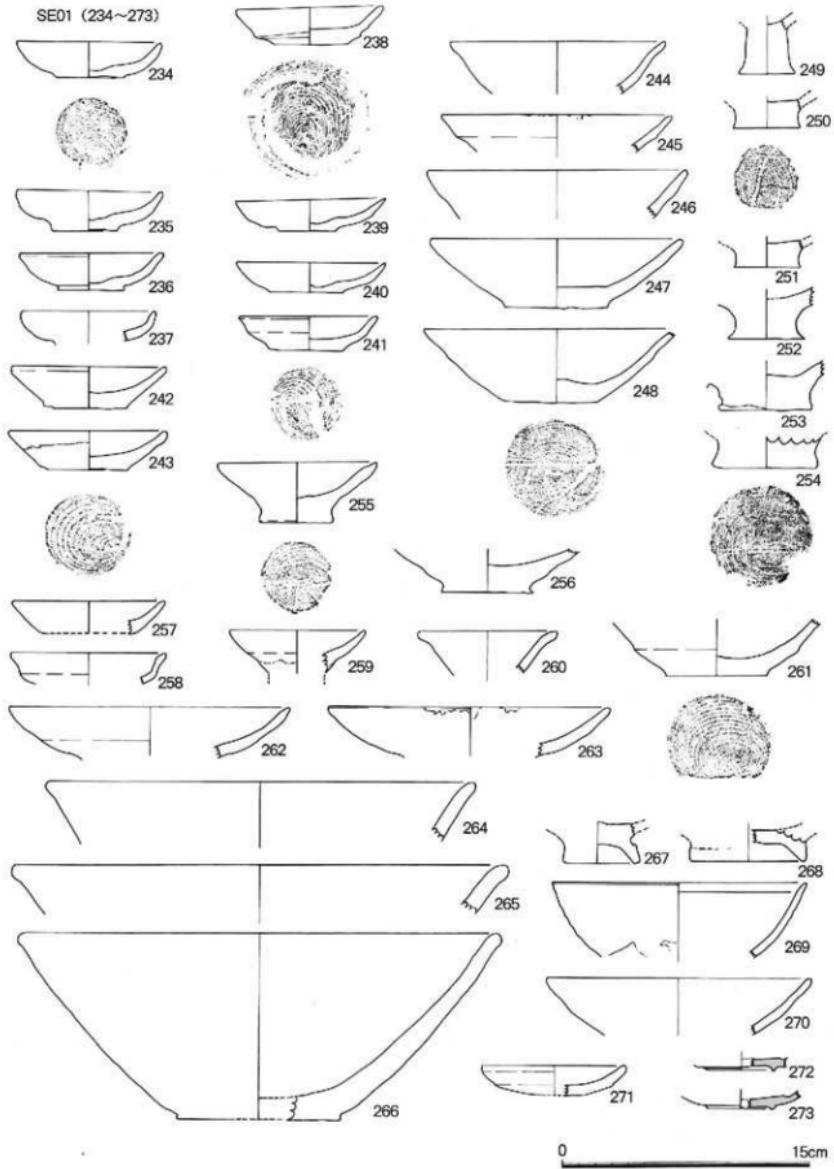
SX02(148~194)



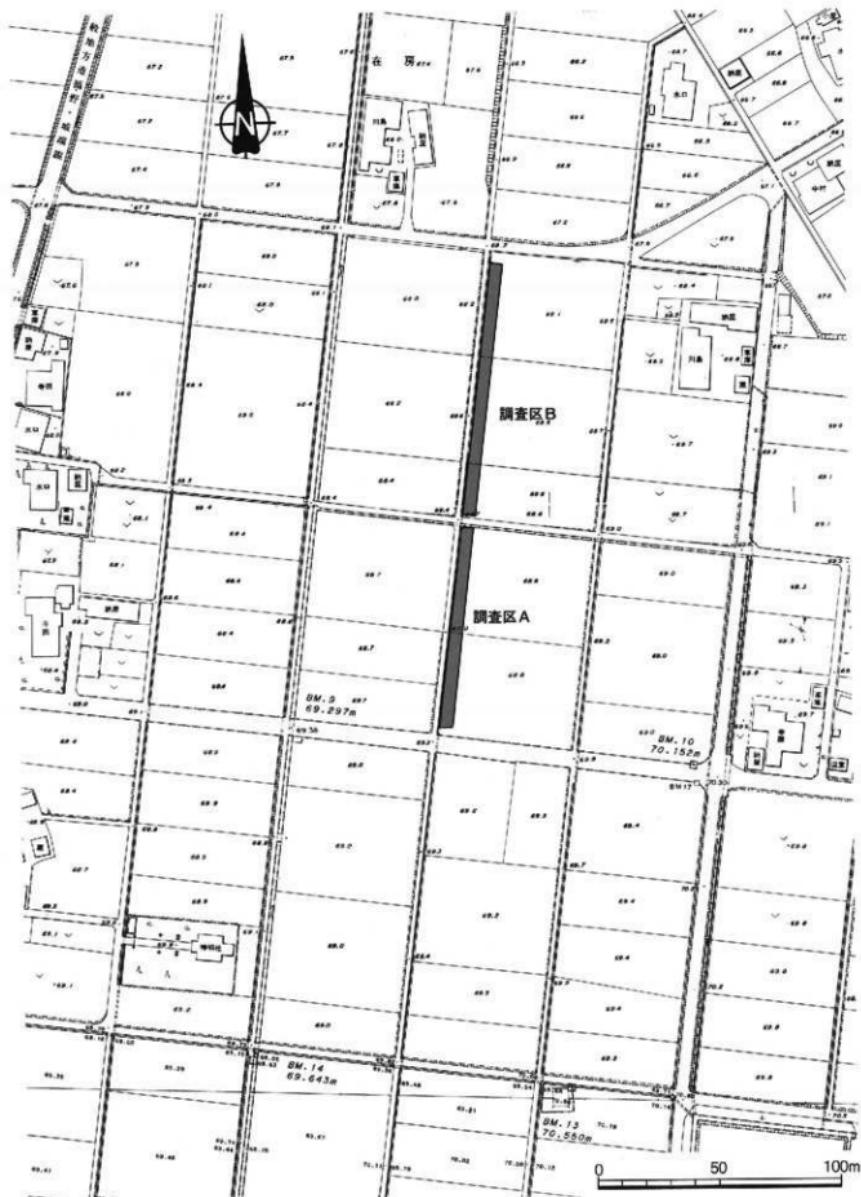
第23図 1地区上層の遺物(2) (1:3)



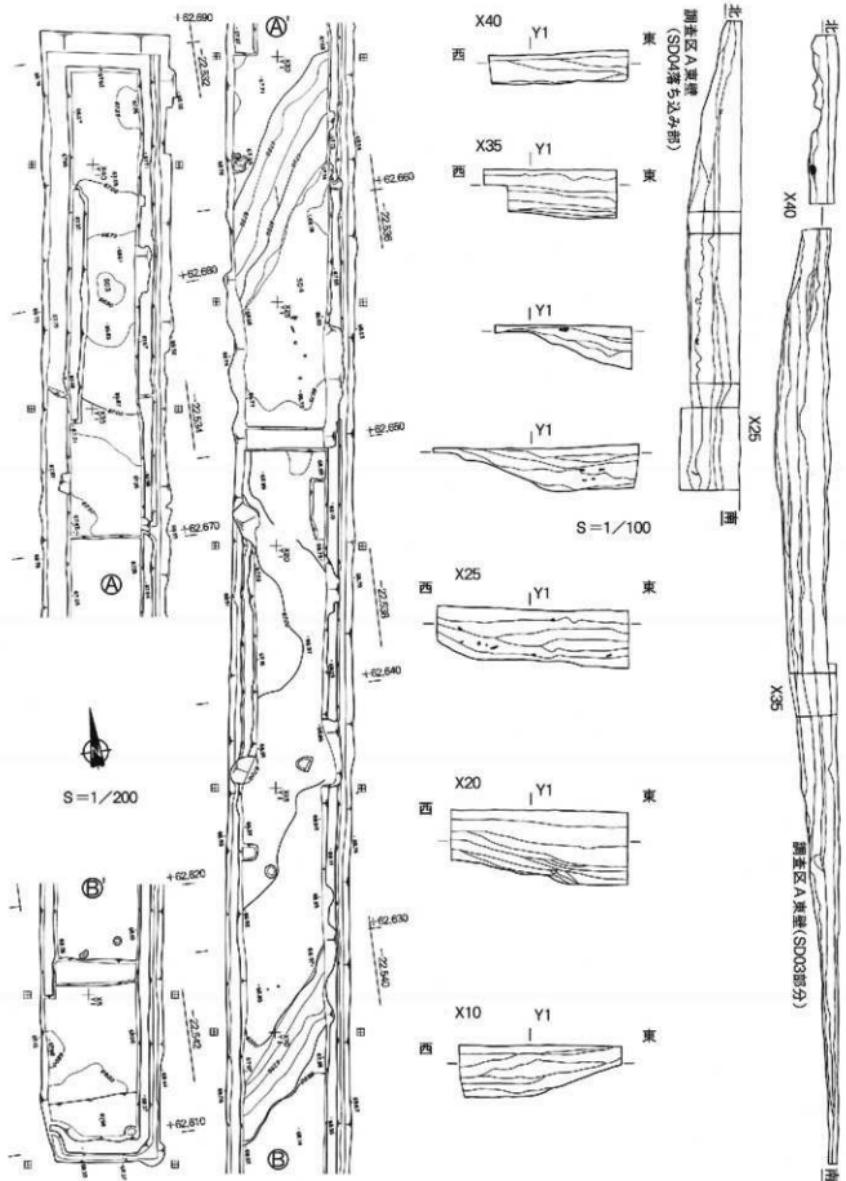
第24図 1地区上層の遺物(3) (1:3)



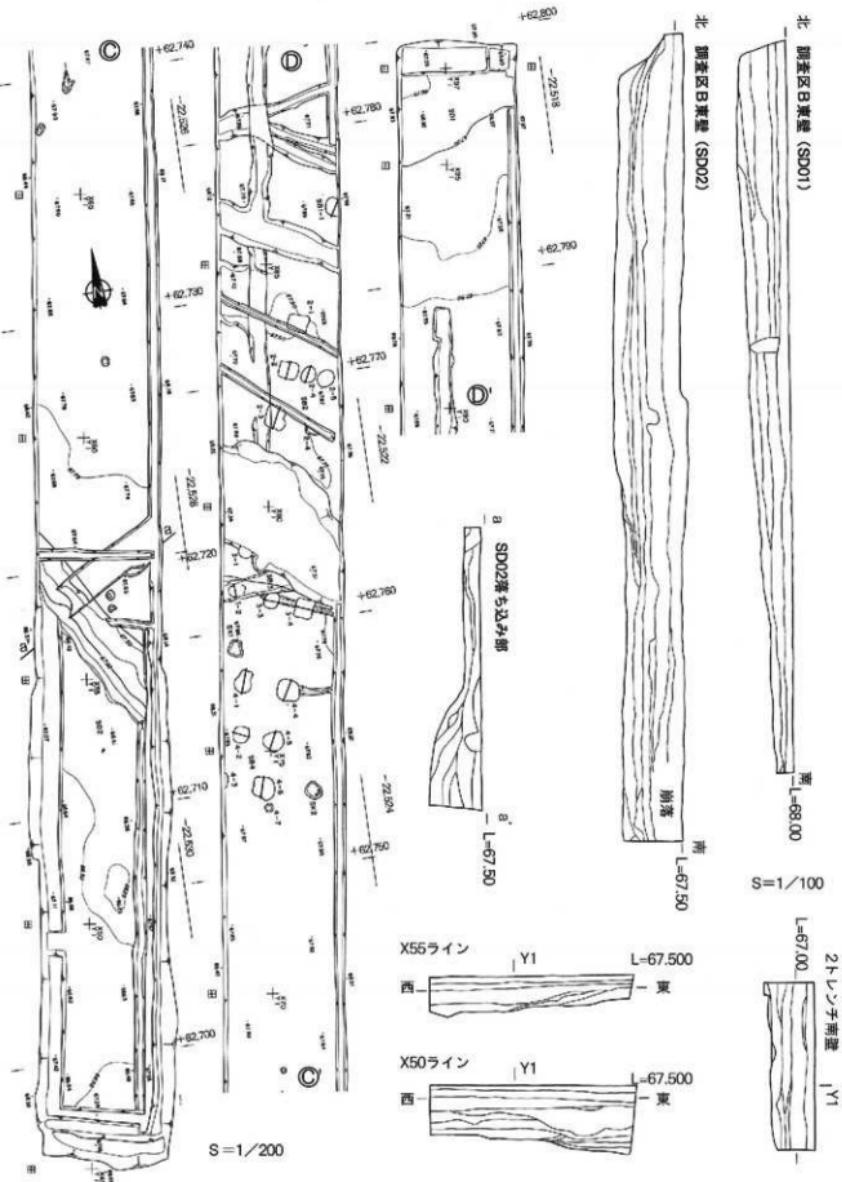
第25図 1地区上層の遺物(4) (1 : 3)



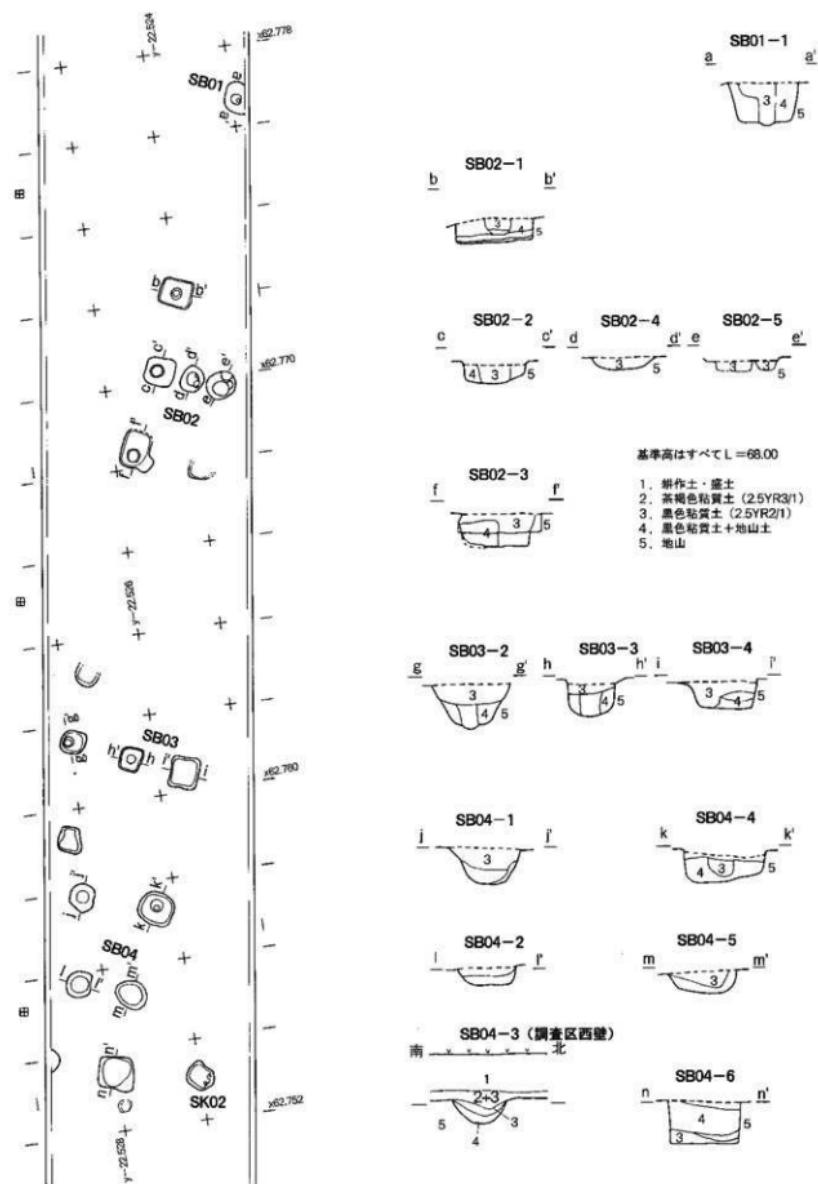
第26図 2地区調査区配置図（平成13年） S=1:2,000



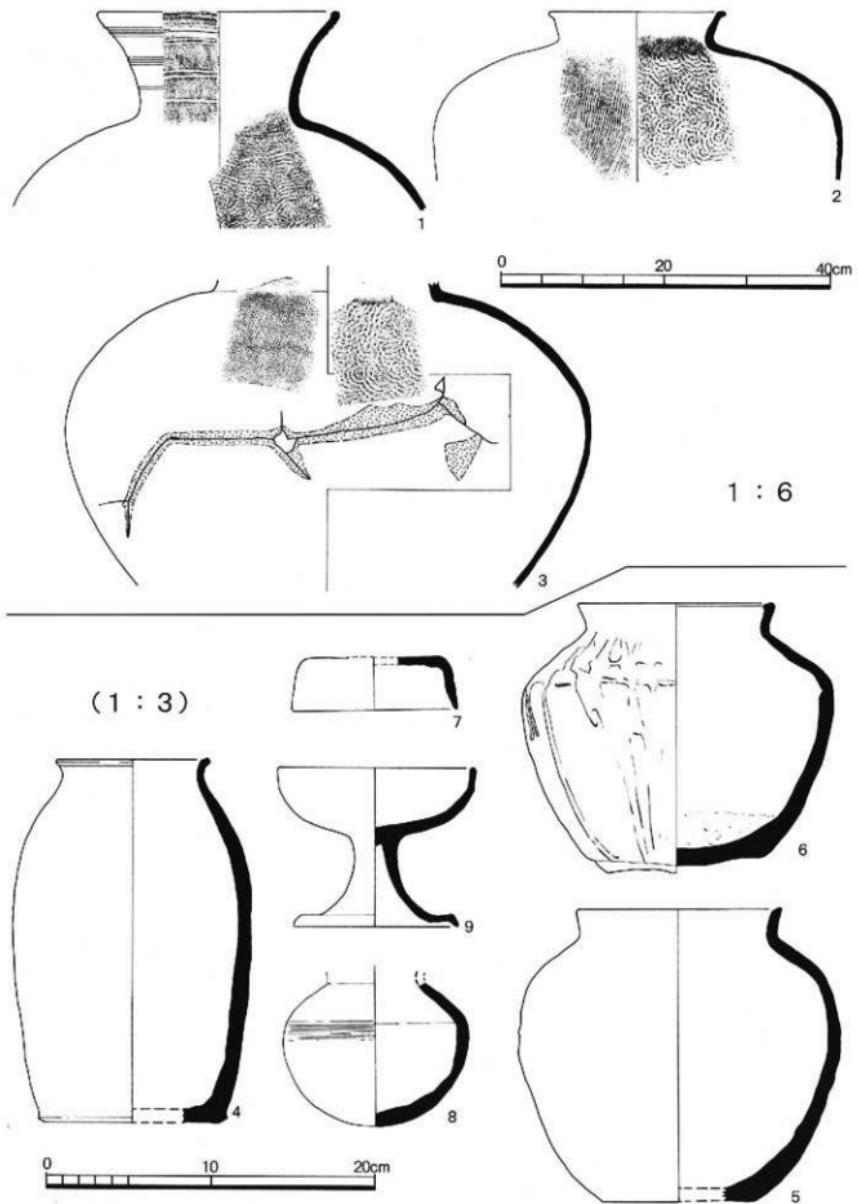
第27図 2地区調査区A・主要セクション図



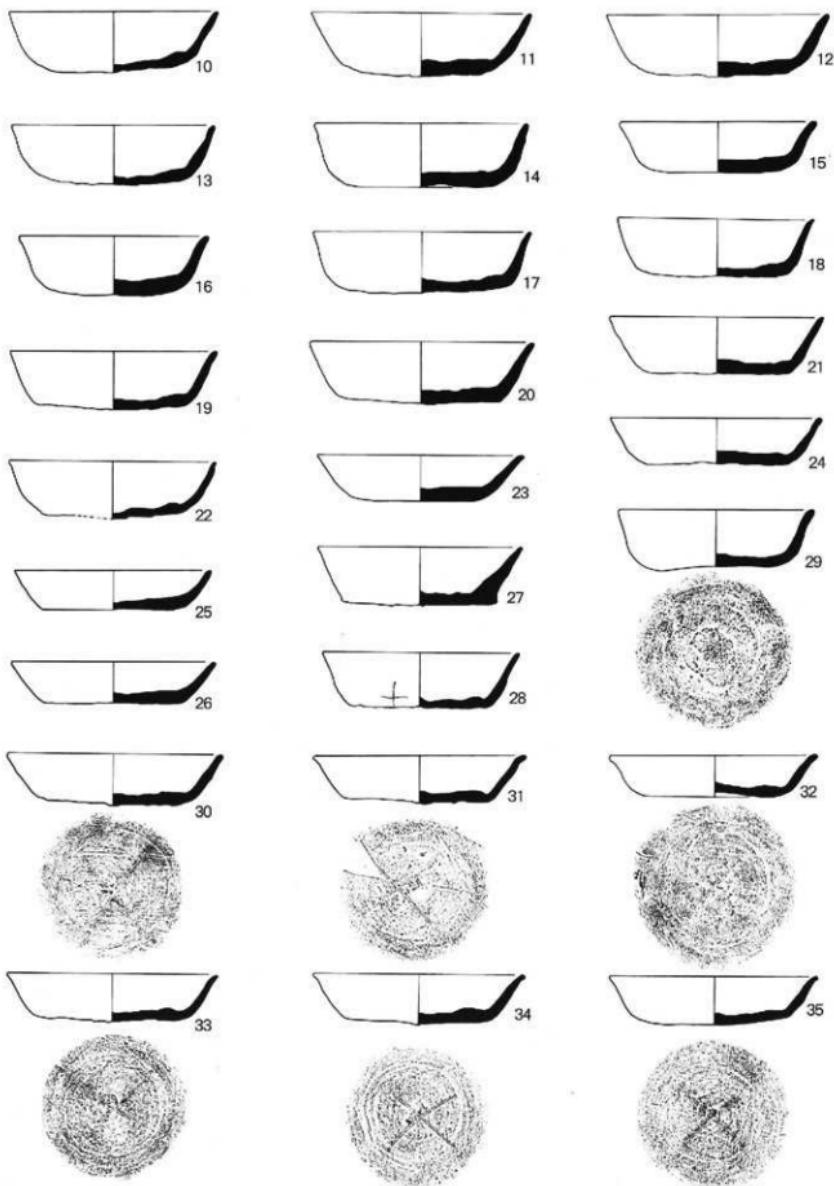
第28図 2地区調査区B・主要セクション図



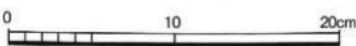
第29図 2地区調査区B内建築群・柱穴土層図

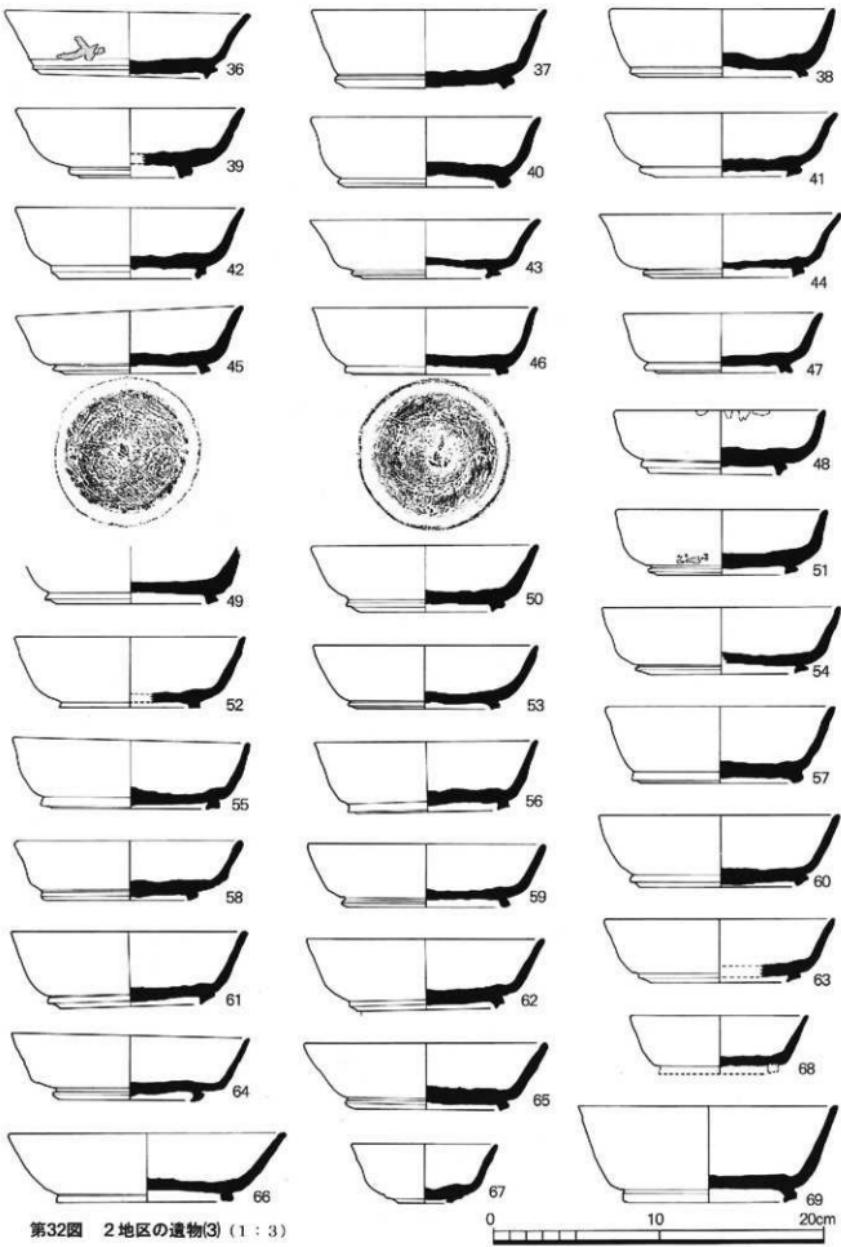


第30図 2地区の遺物(1)

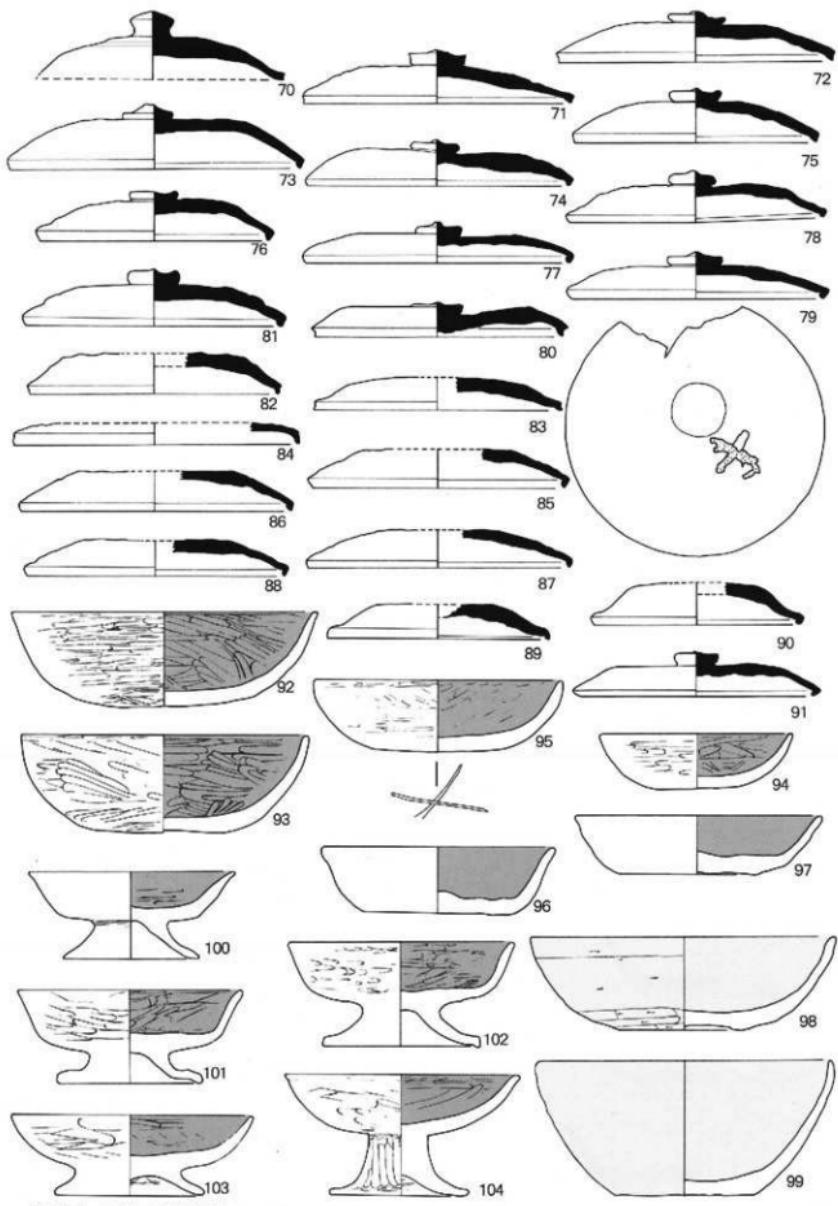


第31図 2地区の遺物(2) (1 : 3)

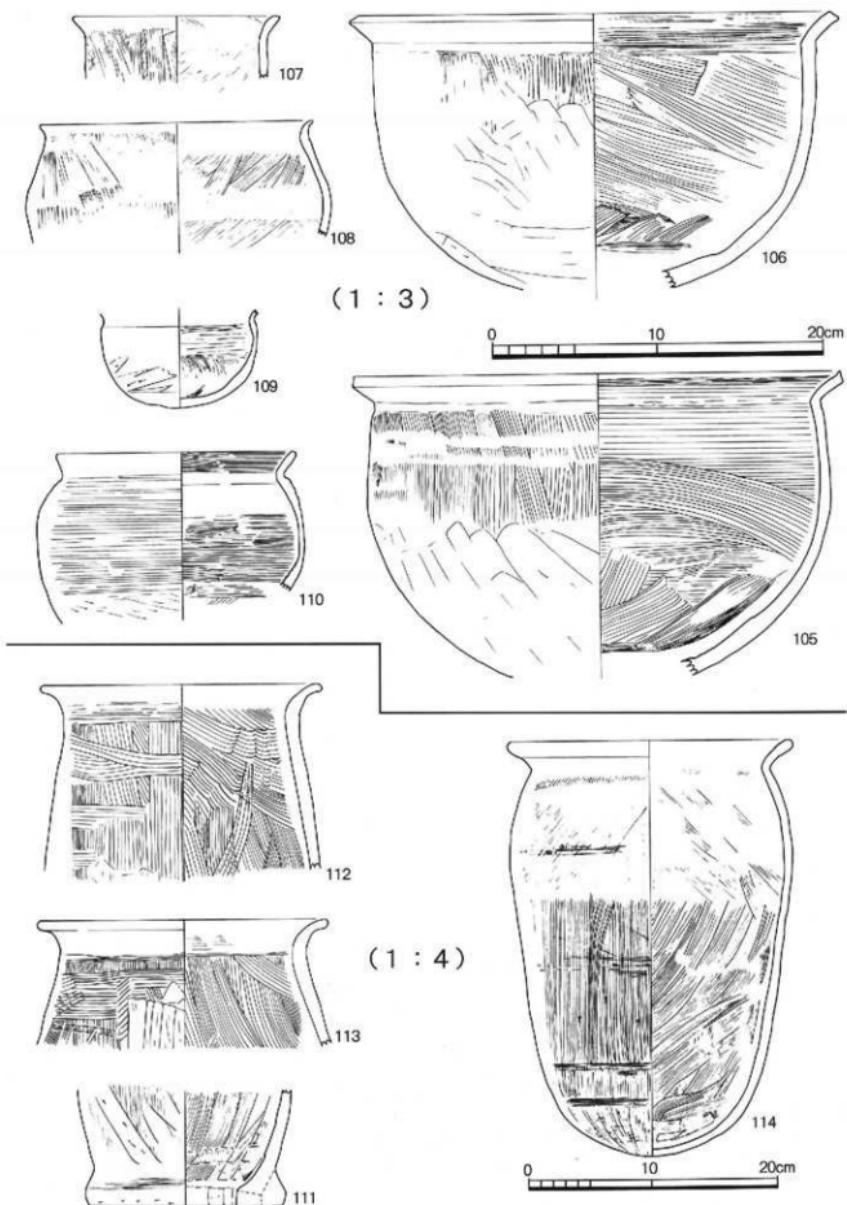




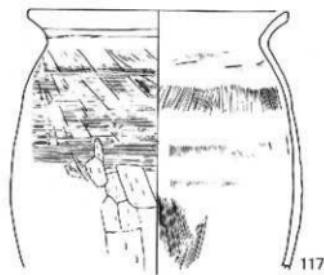
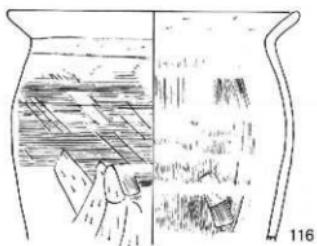
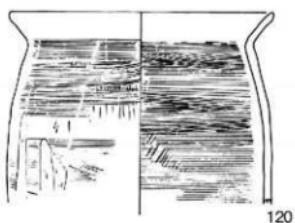
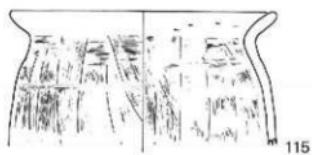
第32図 2地区の遺物(3) (1 : 3)



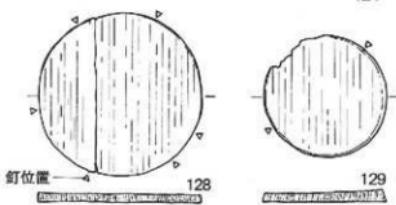
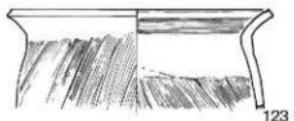
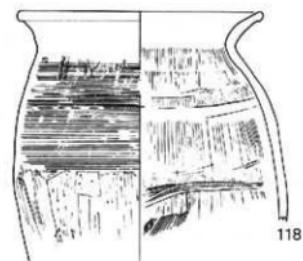
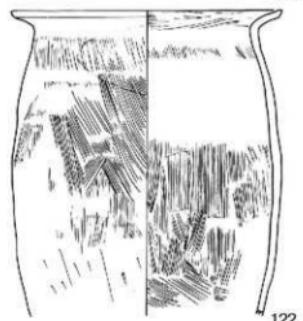
第33図 2地区の遺物(4) (1 : 3)



第34図 2地区の遺物(5)



(1 : 4)



第35図 2地区の遺物(6)



図版1 1地区の遺構(1)

① 遠景（北から）

② 調査区全景

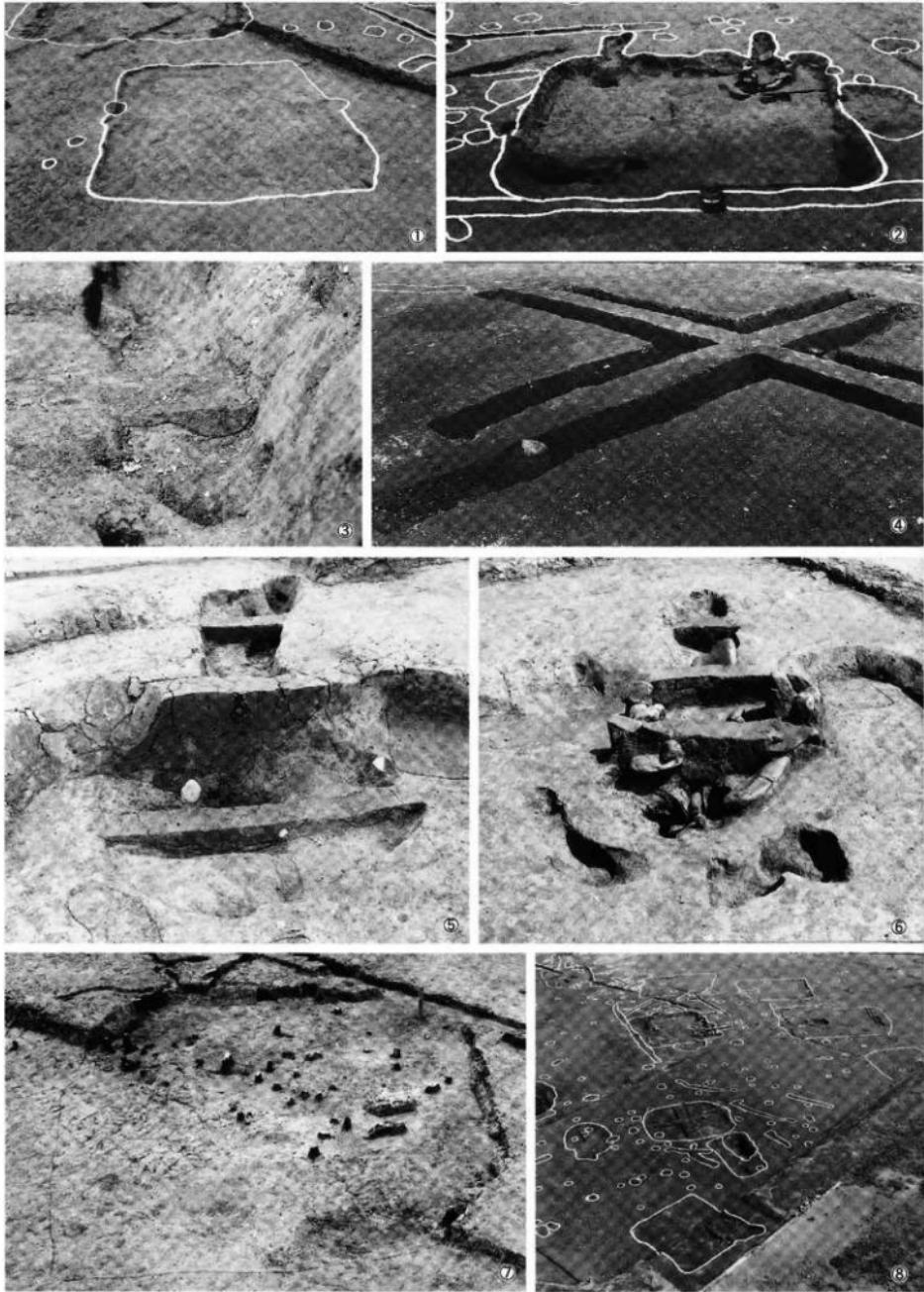


図版2 1地区の遺構(2)

① SI01, SK05（北から）
④ SK05遺物出土状況

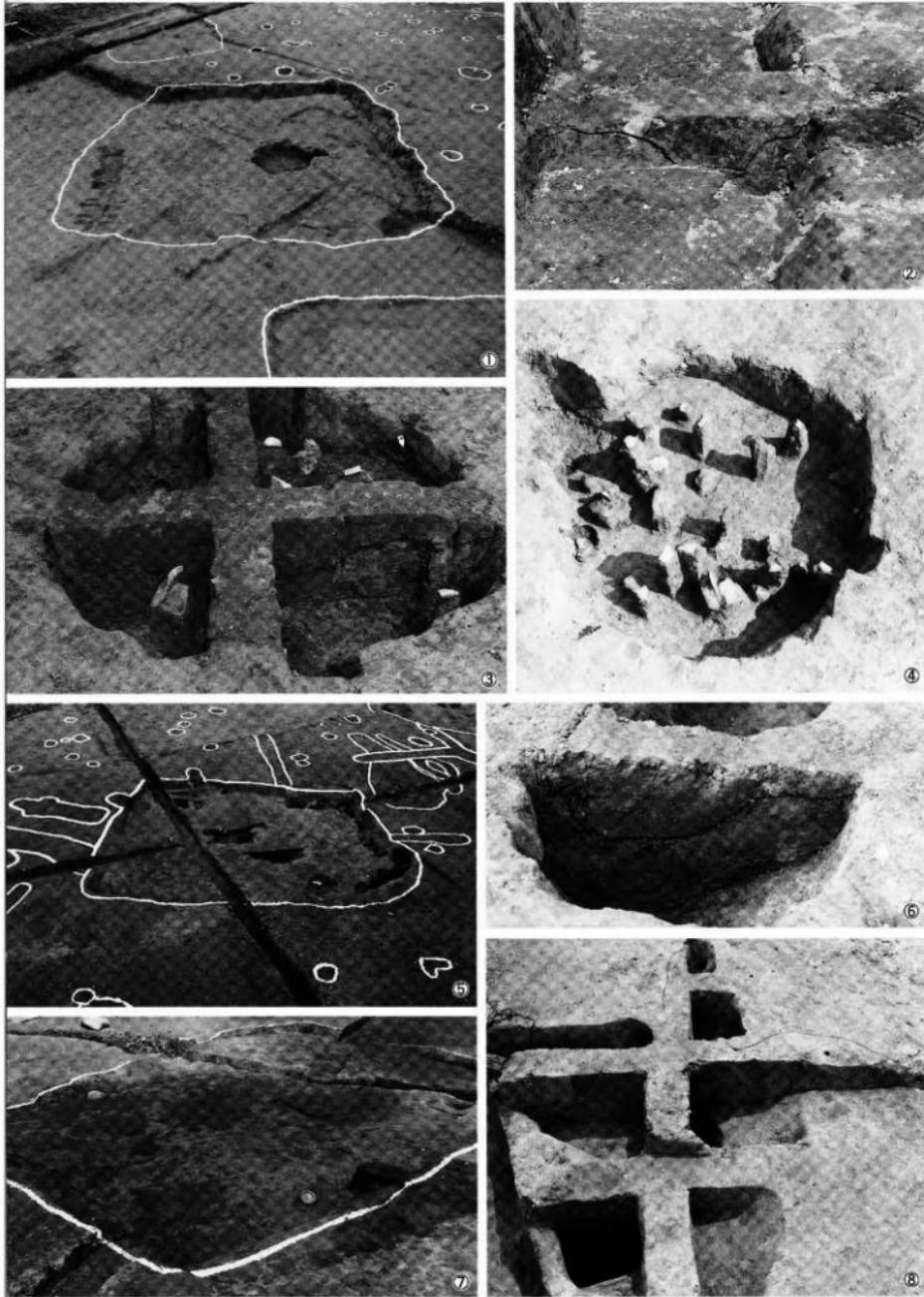
② SI01遺物出土状況（西から）
⑤ SI03, SK02（北から）

③ SI01カマド土層（西から）
⑥ SK02遺物出土状況（東から）



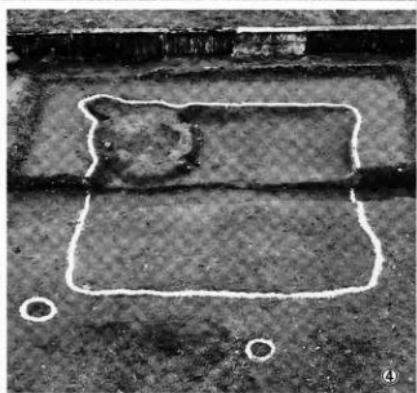
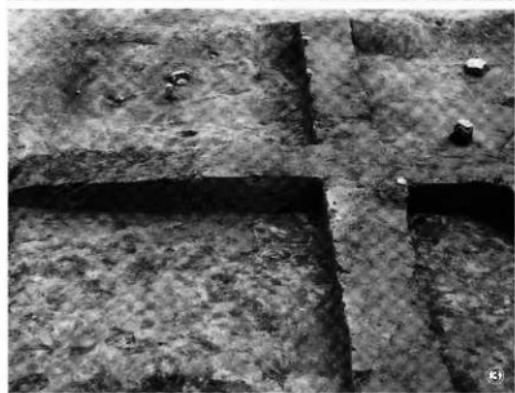
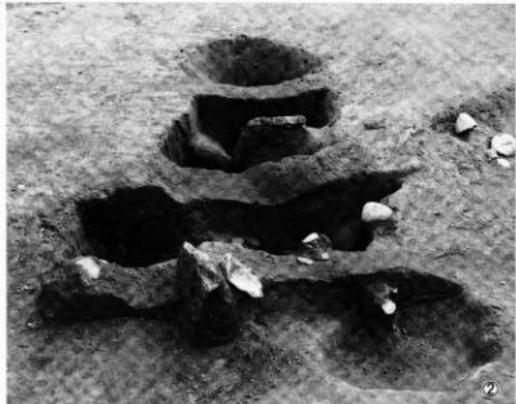
図版3 1地区の遺構(3)

- | | | |
|----------------|--------------------|--------------------|
| ① SI02 (北東から) | ② SI04 (西から) | ③ SI04溝土層 (東から) |
| ④ SI04土層 (南から) | ⑤ SI04カマド1土層 (西から) | ⑥ SI04カマド2土層 (西から) |
| ⑦ SI06 (北東から) | ⑧ 堅穴住居検出状況 (南西から) | |



図版4 1地区の遺構(4)

- | | | |
|-----------------|------------------|------------------|
| ① SI05（北東から） | ② SI05溝土層（東から） | ③ SI05内SK土層（東から） |
| ④ SI05内SK遺物出土状況 | ⑤ SI07（西から） | ⑥ SI07溝土層（南から） |
| ⑦ SI07須恵器蓋出土状況 | ⑧ SI07カマド土層（西から） | |



図版5 1地区の遺構(5)

① SI08 (北から)

⑤ SD01 (南西から)

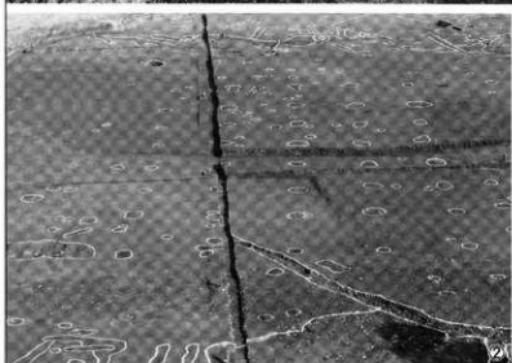
② SI08カマド土層（北から）

⑥ SD01土層（南西から）

③ SI08土層（西から）

⑦ 作業状況

④ SI10 (北から)

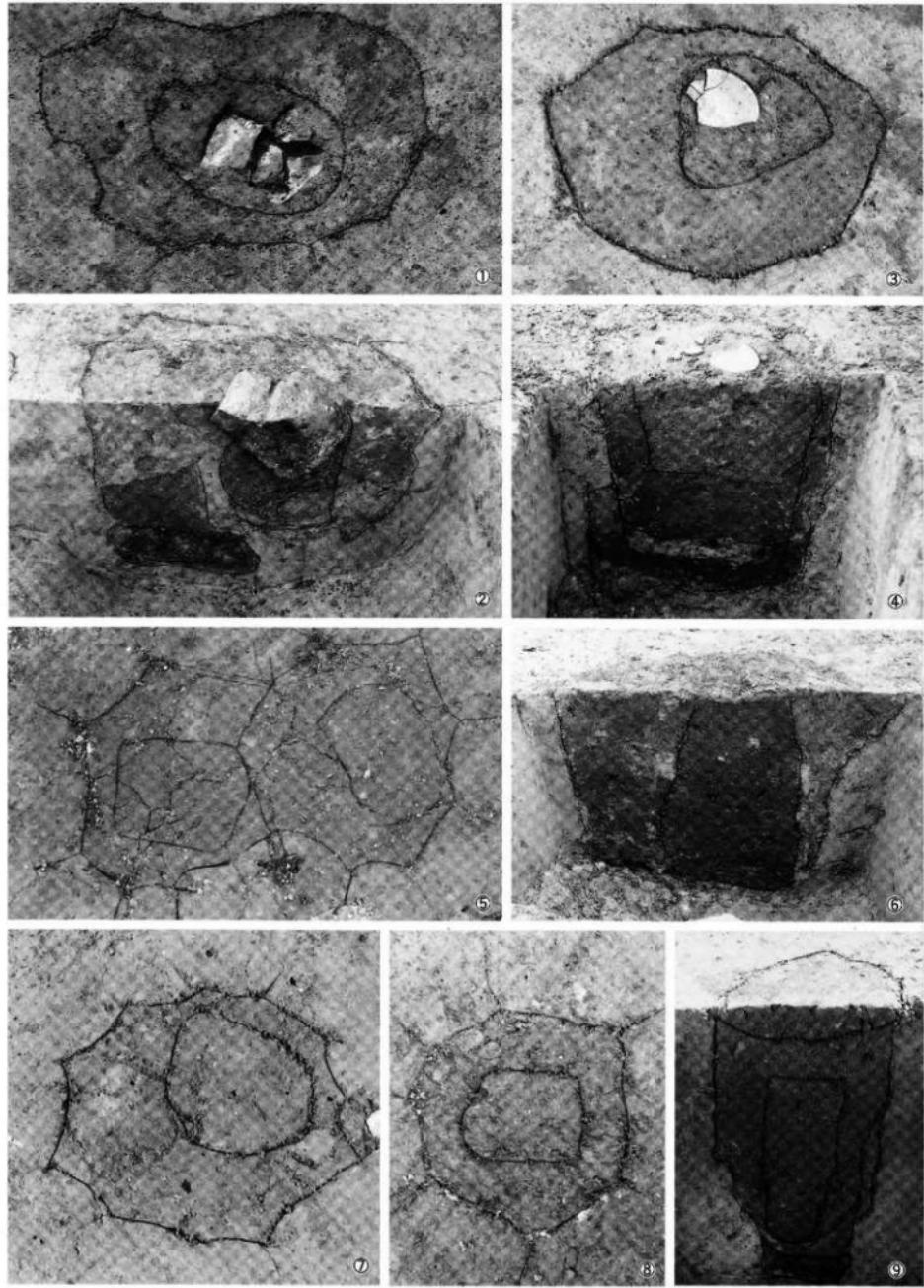


図版6 1地区の遺構(6)

① 遺景（南から）
④ SB03・04（西から）

② SB01（西から）
⑤ SB05（西から）

③ SB02（南から）



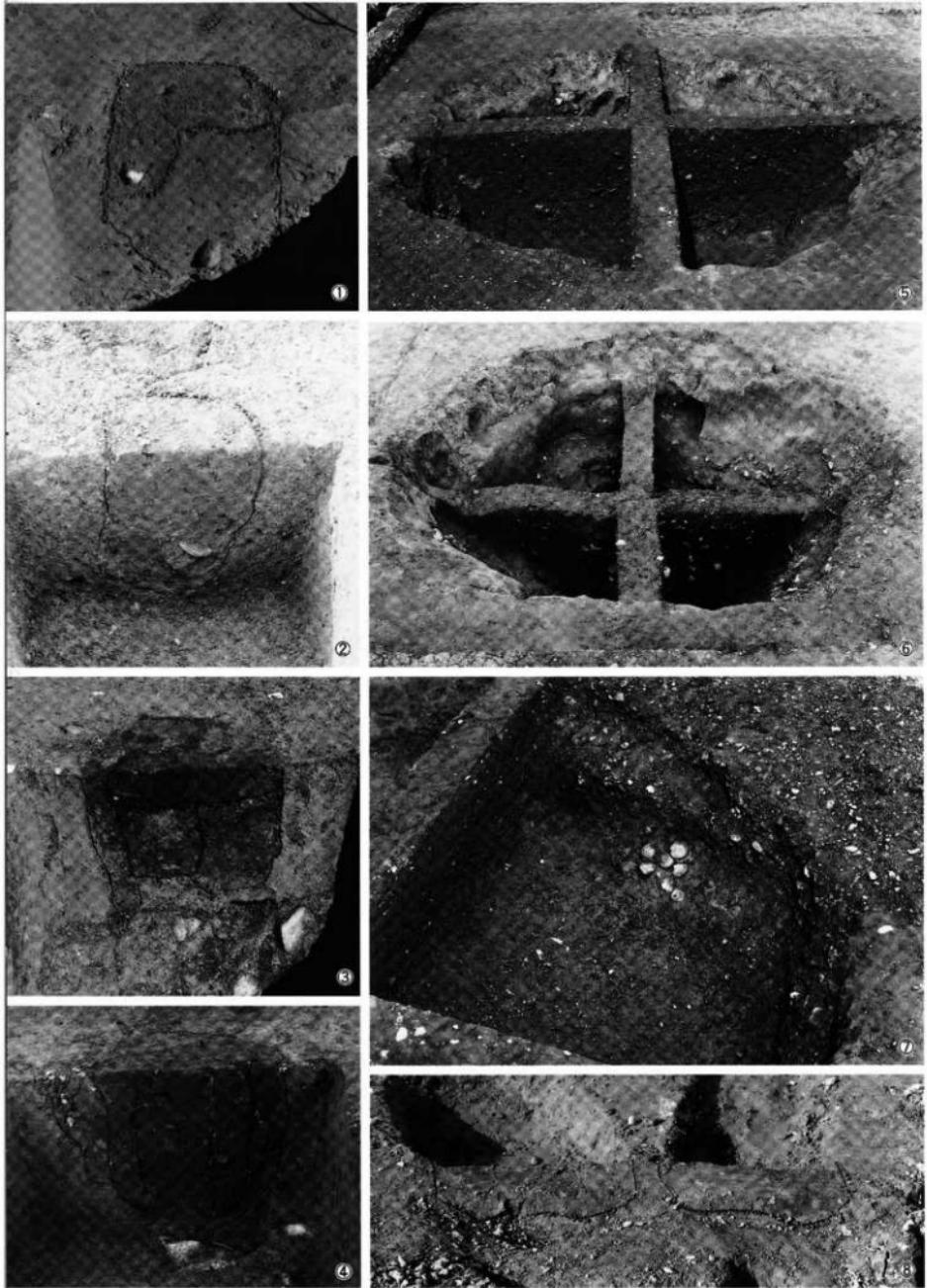
図版7 1地区の遺構(7)

①② SB01-P2
⑦ SB01-P33

③④ SB01-P10
⑧ SB02-P5

⑤ SB01-P32
⑨ SB02-P2

⑥ SB01-P1



図版8 1地区の遺構⑧

- ① SB03-P7 ② SB04-P7 ③ SB05-P5 ④ SB05-P8 ⑤ SE01上層部分土層（南から）
⑥ SE01下層部分土層（南から） ⑦ SE01遺物出土状況 ⑧ SF22, 23土層（南から）



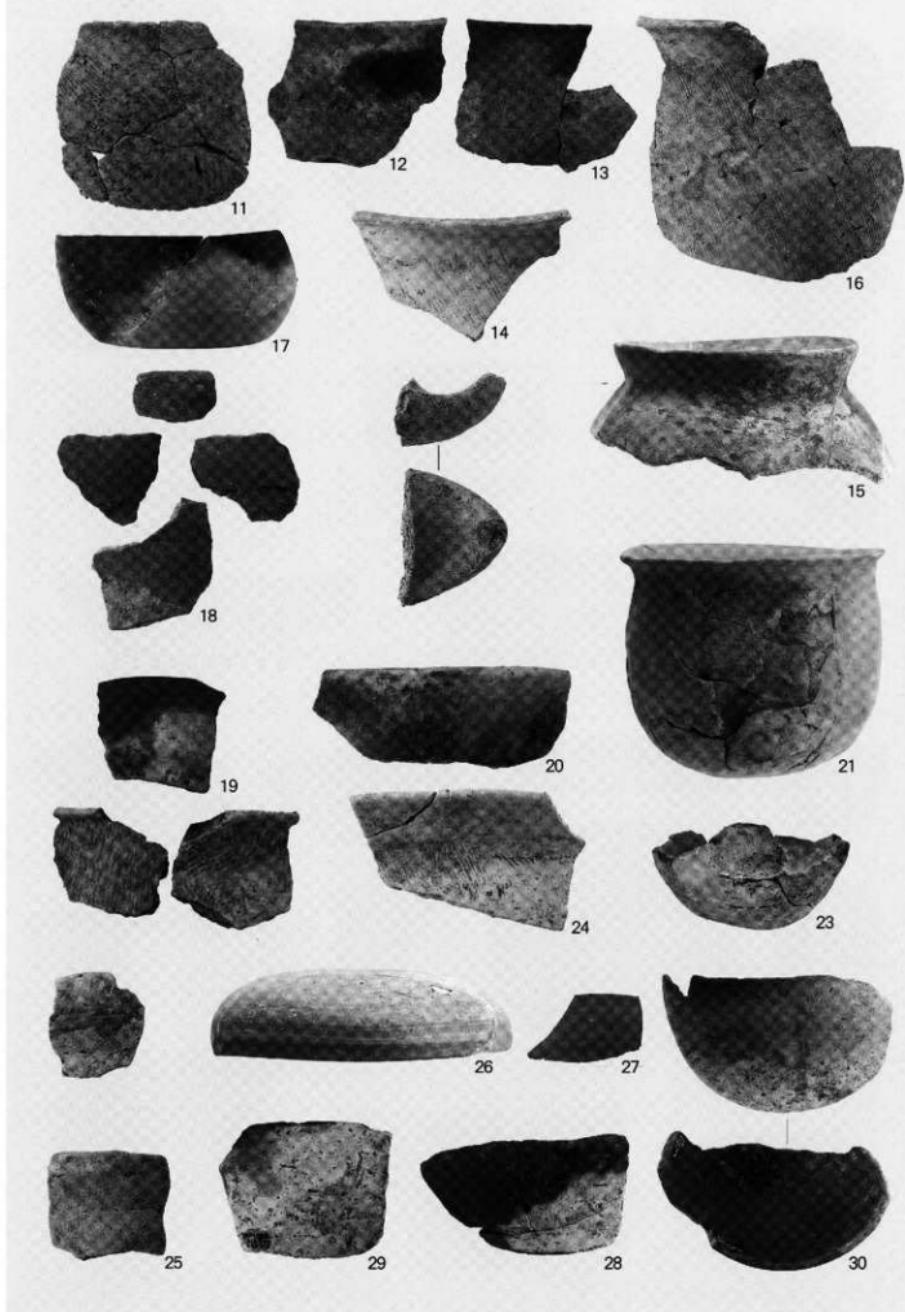
図版9 1地区の遺構(9)

- ①② SX01 ③④ SX02 ⑤ P62 ⑥ SD02土層（南西から）
⑦ SD03土層（南西から） ⑧ SD05土層



図版10 1地区下層の遺物(1) (1:2, 3~5・10は1:3)

SI01 (1~5), SK05 (6~10)



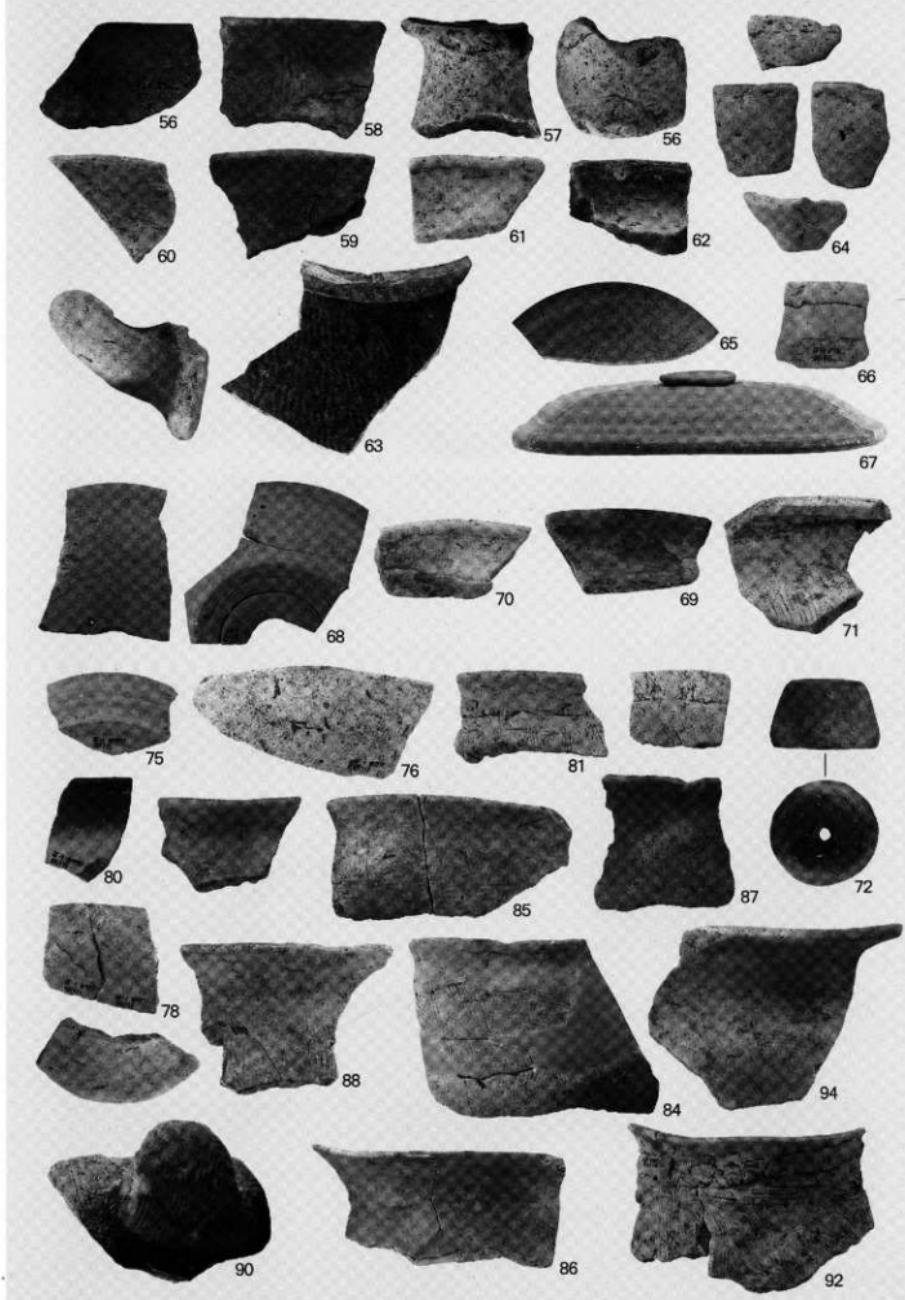
図版11 1地区下層の遺物(2) (1:2, 15・16・21・23は1:3)

SI03・SK02(11~18), SI04(19~25), SI05(26~30)



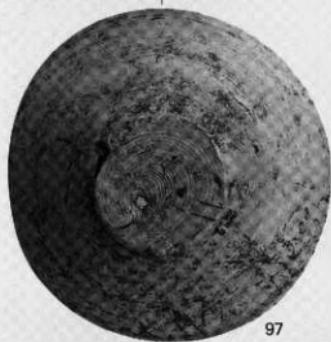
図版12 1地区下層の遺物(3) (1 : 2, 31は1 : 1, 34~36・52~54は1 : 3)

SI05 (31~38), SI06 (39~40), SI07 (41~42), SI08 (43~46・50), SI10 (52~54)
SK01 (55)



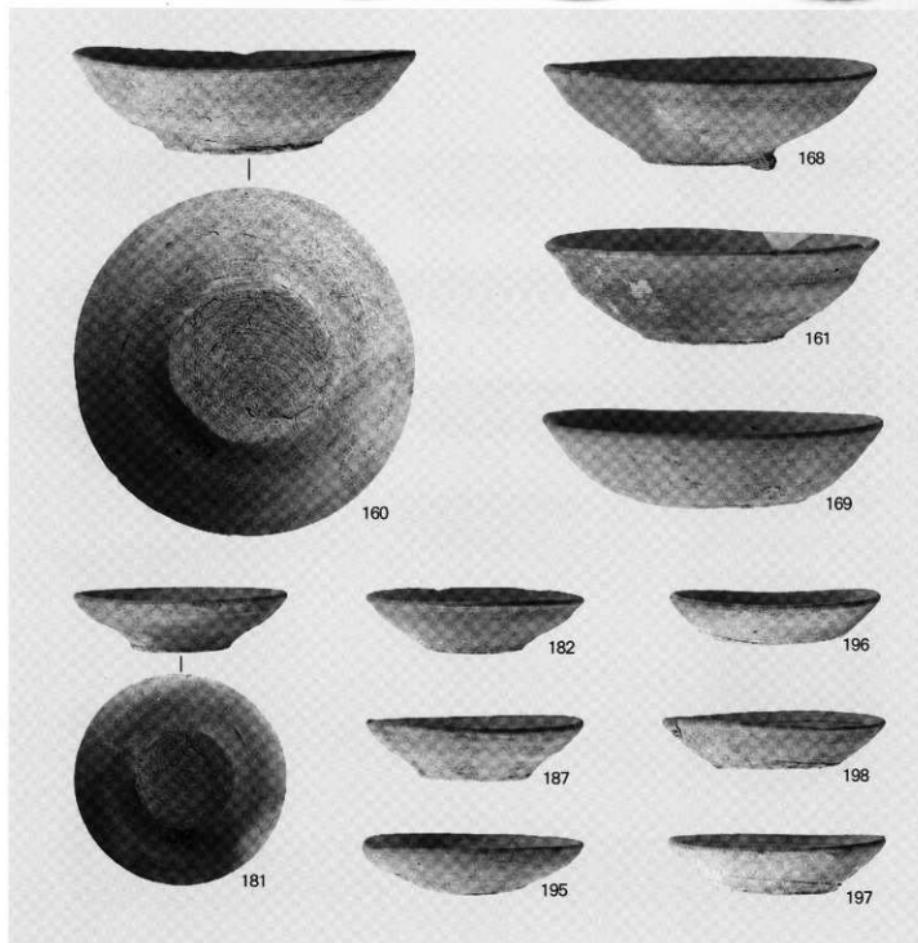
図版13 1地区下層の遺物(4) (1:2, 63~92は1:4)

SD01 (56~64), 小穴 (65~67), 包含層 (68~71), 東端擾乱 (72~94)



図版14 1地区上層の遺物(1) (1 : 2)

SX01 (97~154)



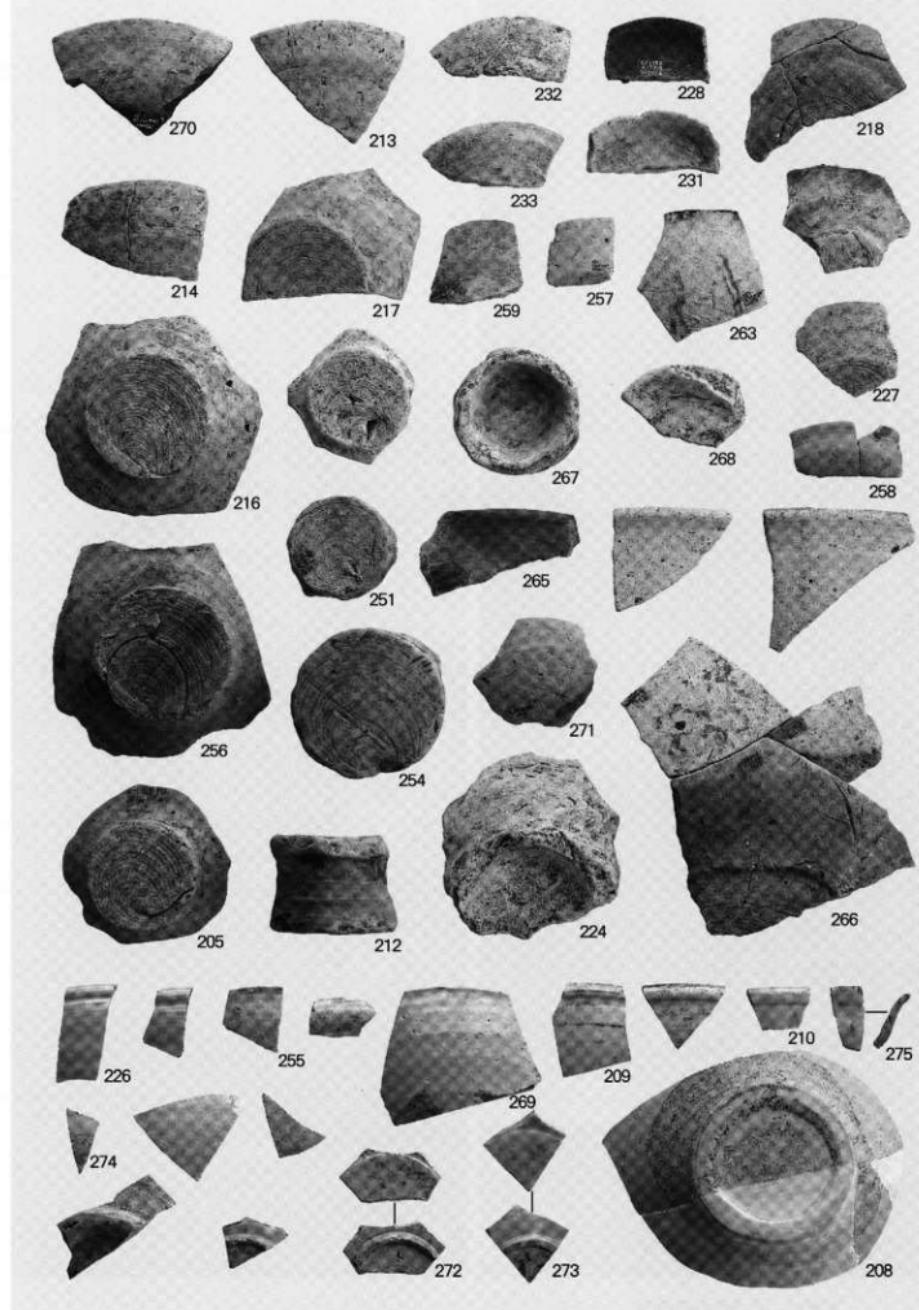
図版15 1地区上層の遺物[2] (1 : 2)

SX02 (160~197)



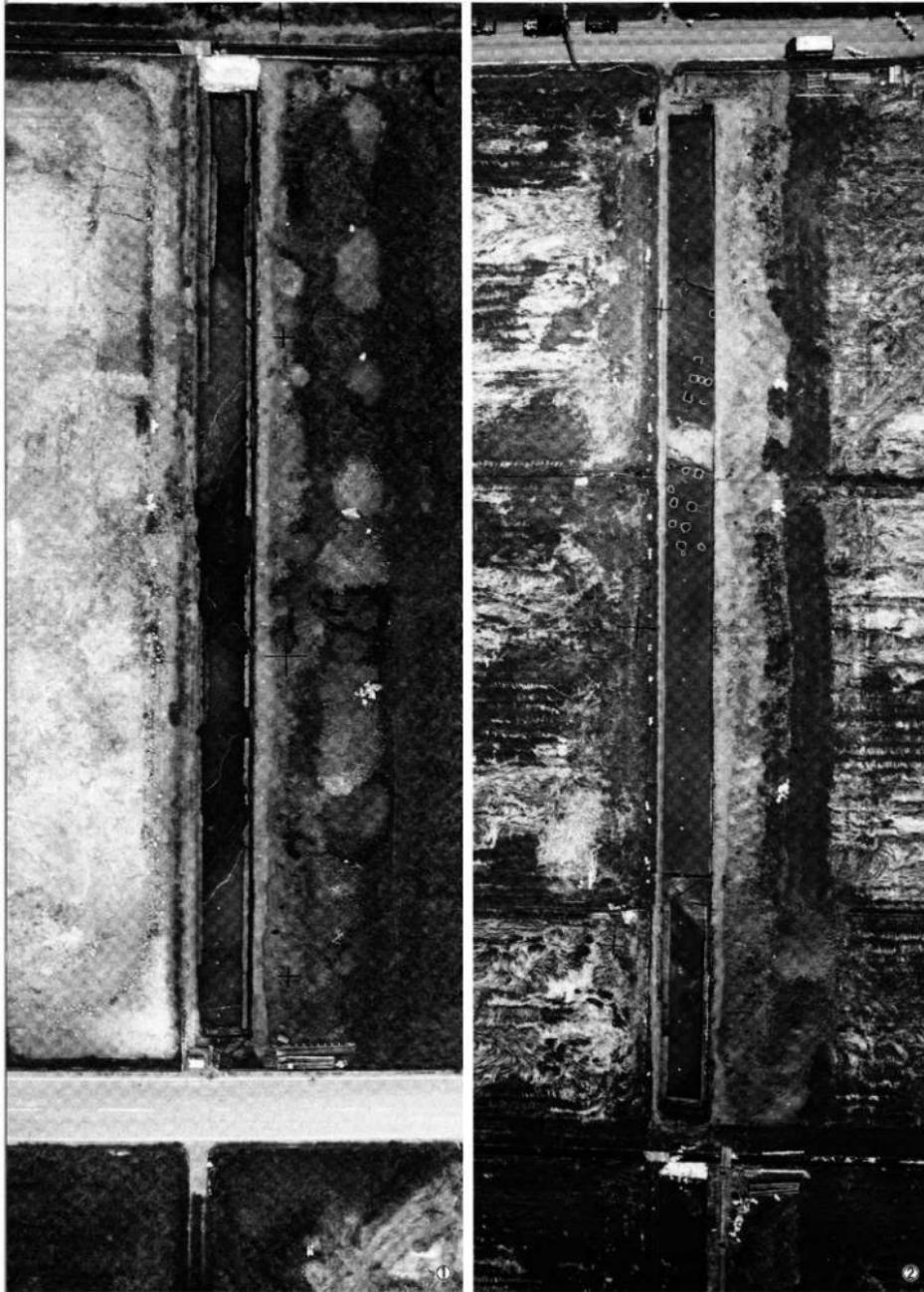
図版16 1地区上層の遺物(3) (1 : 2)

P62 (199~202), SB01-P9 (203), SB02-P15 (206), P19 (211), 包含層 (219~223)
SE01 (234~255)



図版17 1地区上層の遺物(4) (1 : 2)

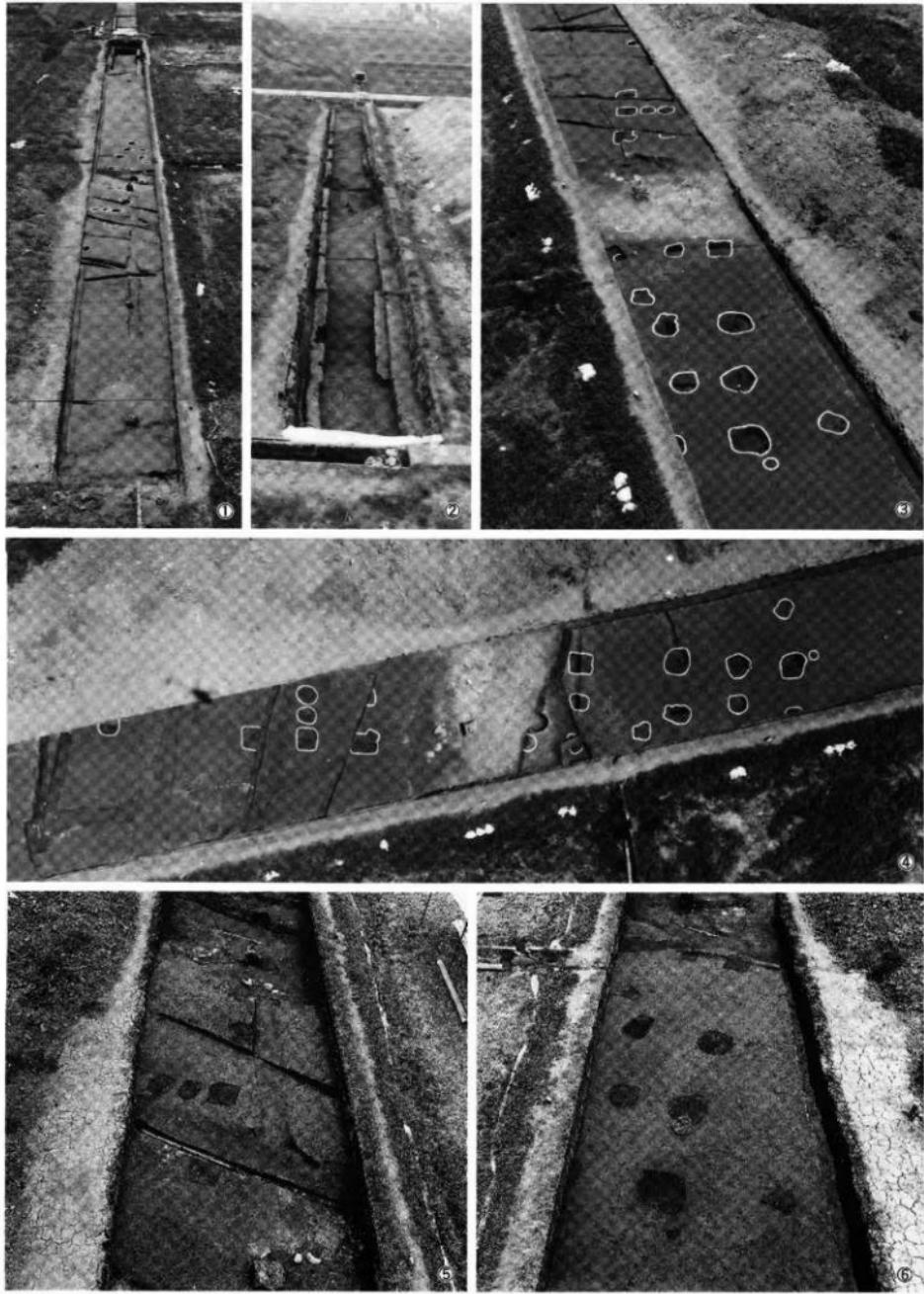
SB01-P19 (205), SB01-P25 (208), SD01上面 (209・210), SI01 (212)
包含層 (213~224・227~233), SE01 (225・226・251~272)



図版18 2地区の遺構(1)

① 調査区B

② 調査区A

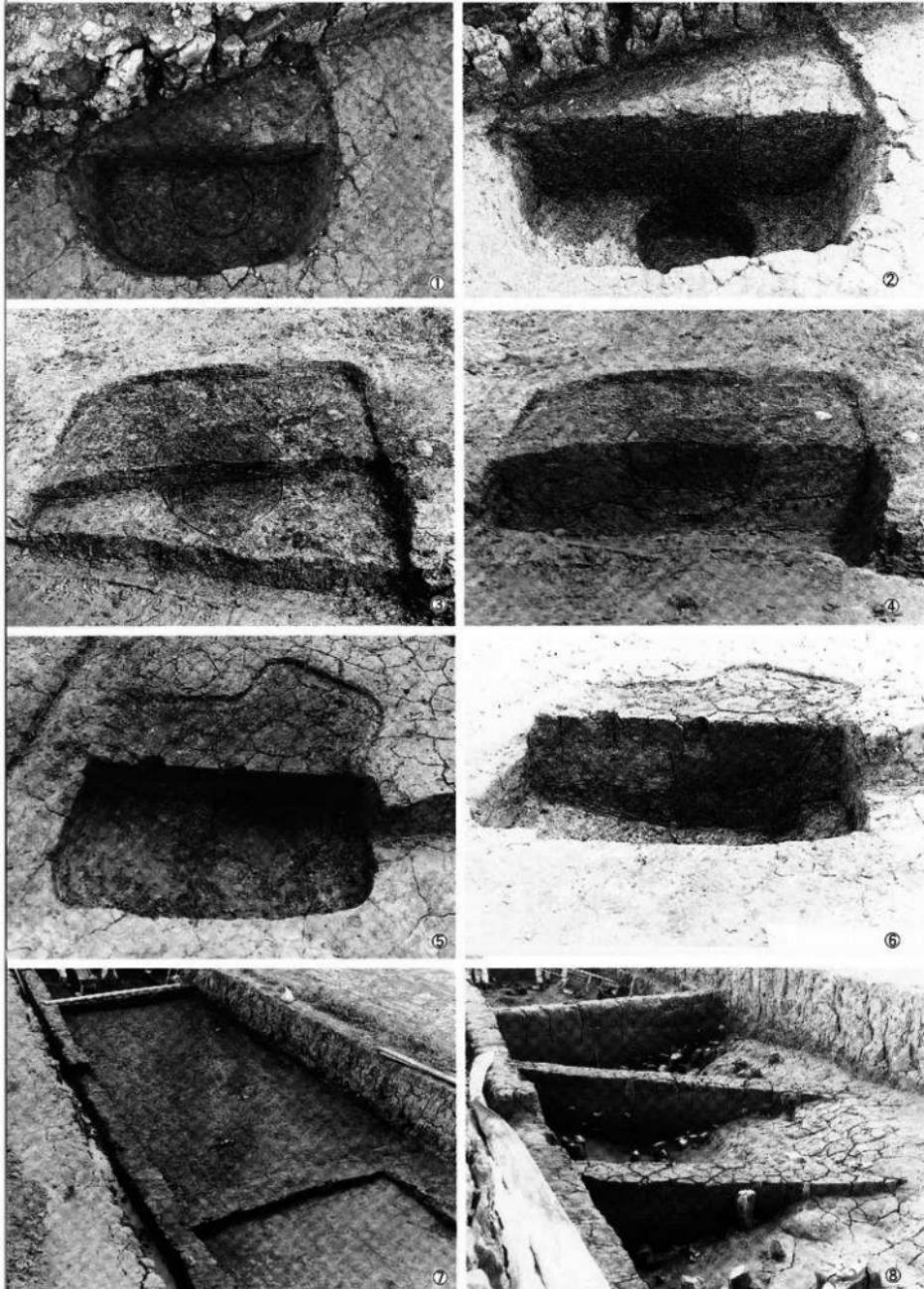


図版19 2地区の遺構(2)

① 調査区B（北から）
④ 建物群（全景）

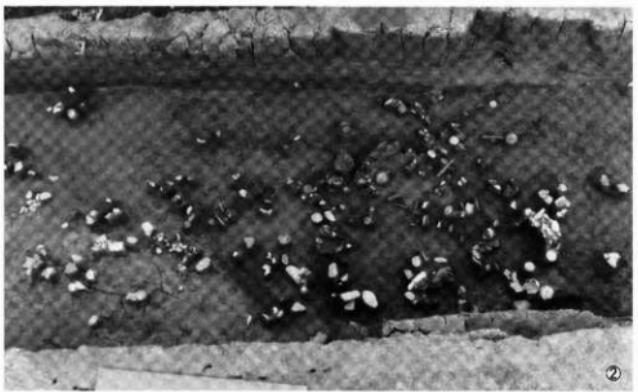
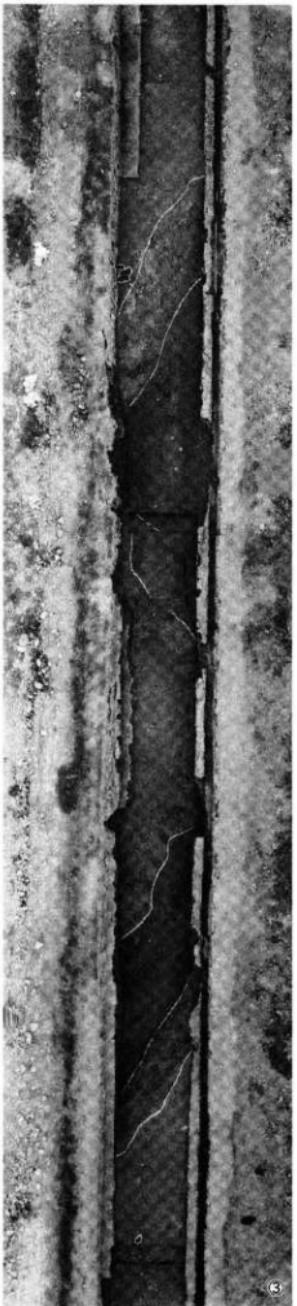
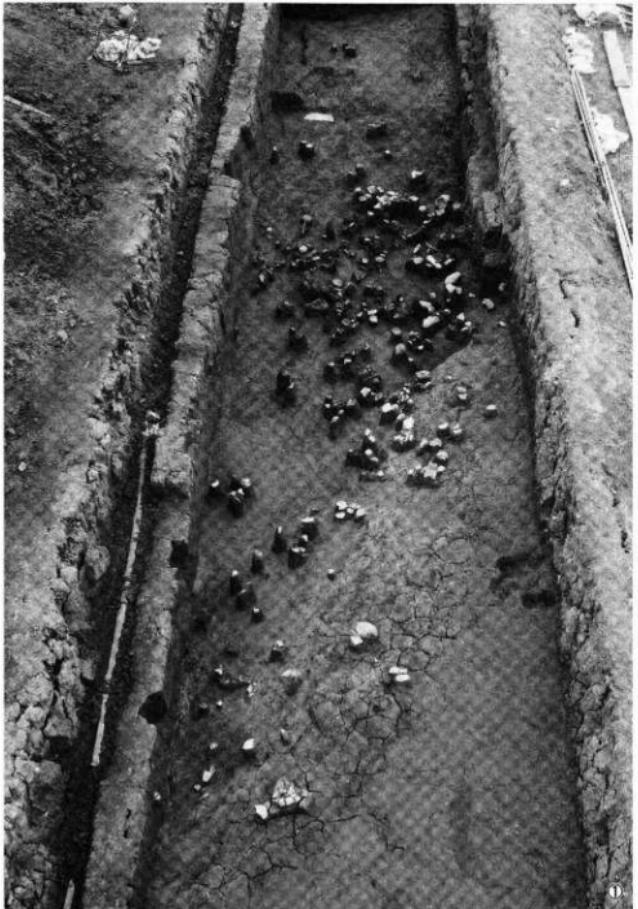
② 調査区A（北から）
⑤ SB02検出状況（北から）

③ 建物群（南から）
⑥ SB04検出状況（南から）



図版20 2地区の遺構(3)

- ① SB01-1検出 ② SB01-1断面 ③ SB02-1検出 ④ SB02-1断面 ⑤ SB02-3検出
- ⑥ SB02-3断面 ⑦ SD04検出状況 ⑧ SD04落ち込み状況

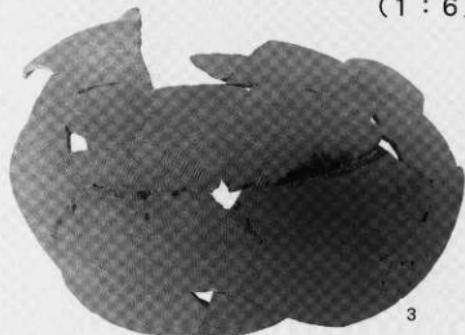


図版21 2地区の遺構[4]

① SD04遺物出土状況 ② SD04遺物出土状況部分 ③ SD04全景（真上から）



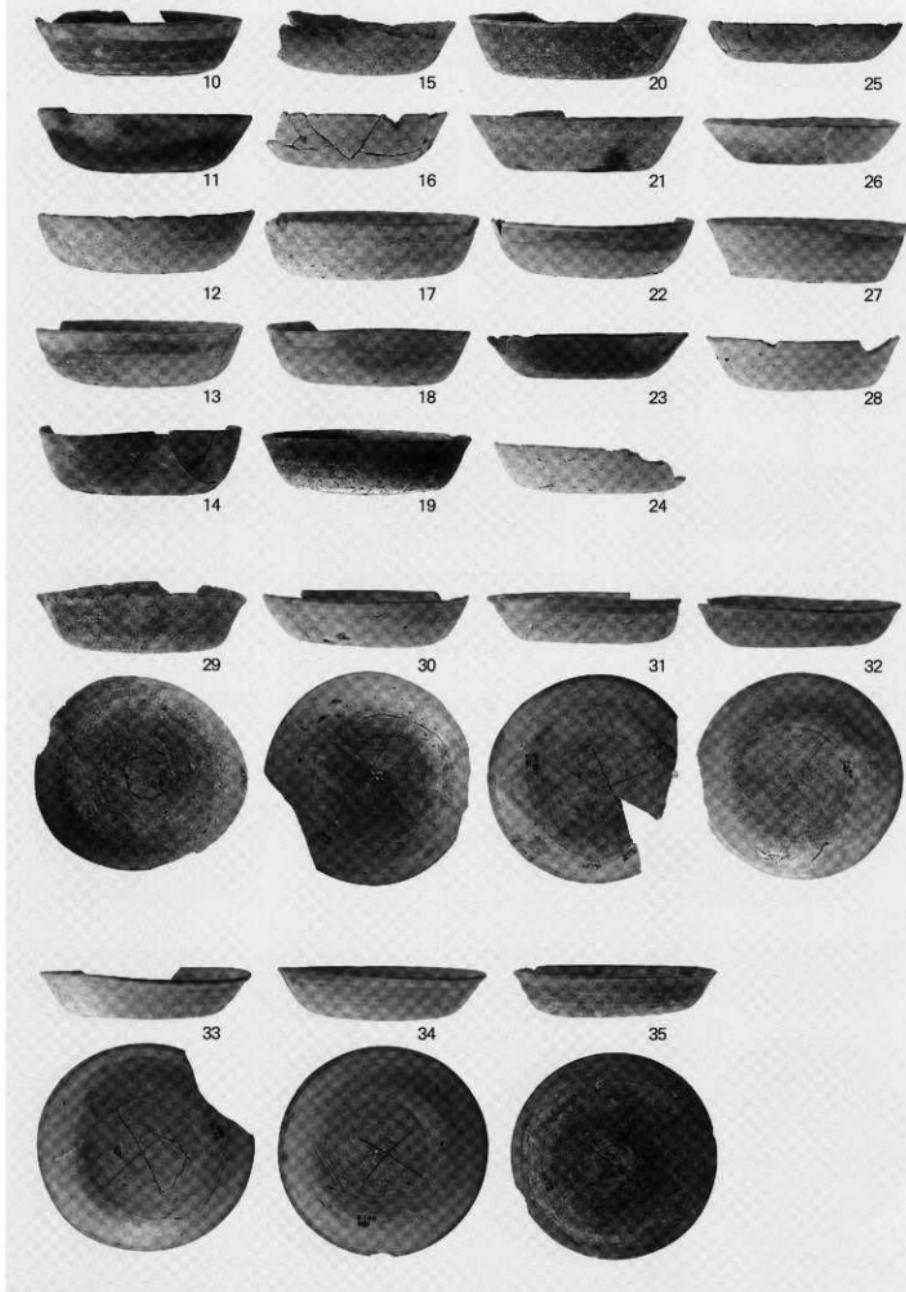
(1 : 6)



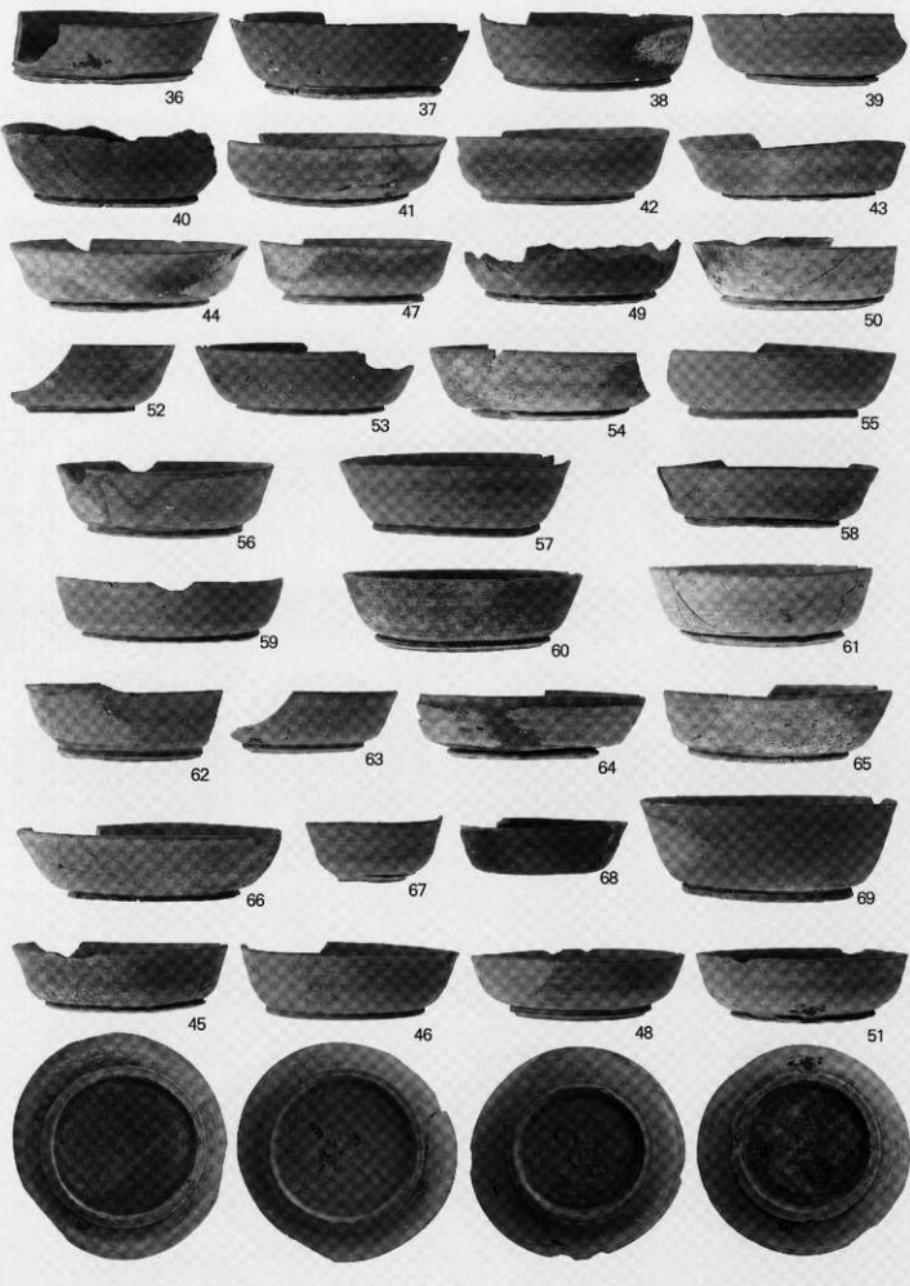
(1 : 3)



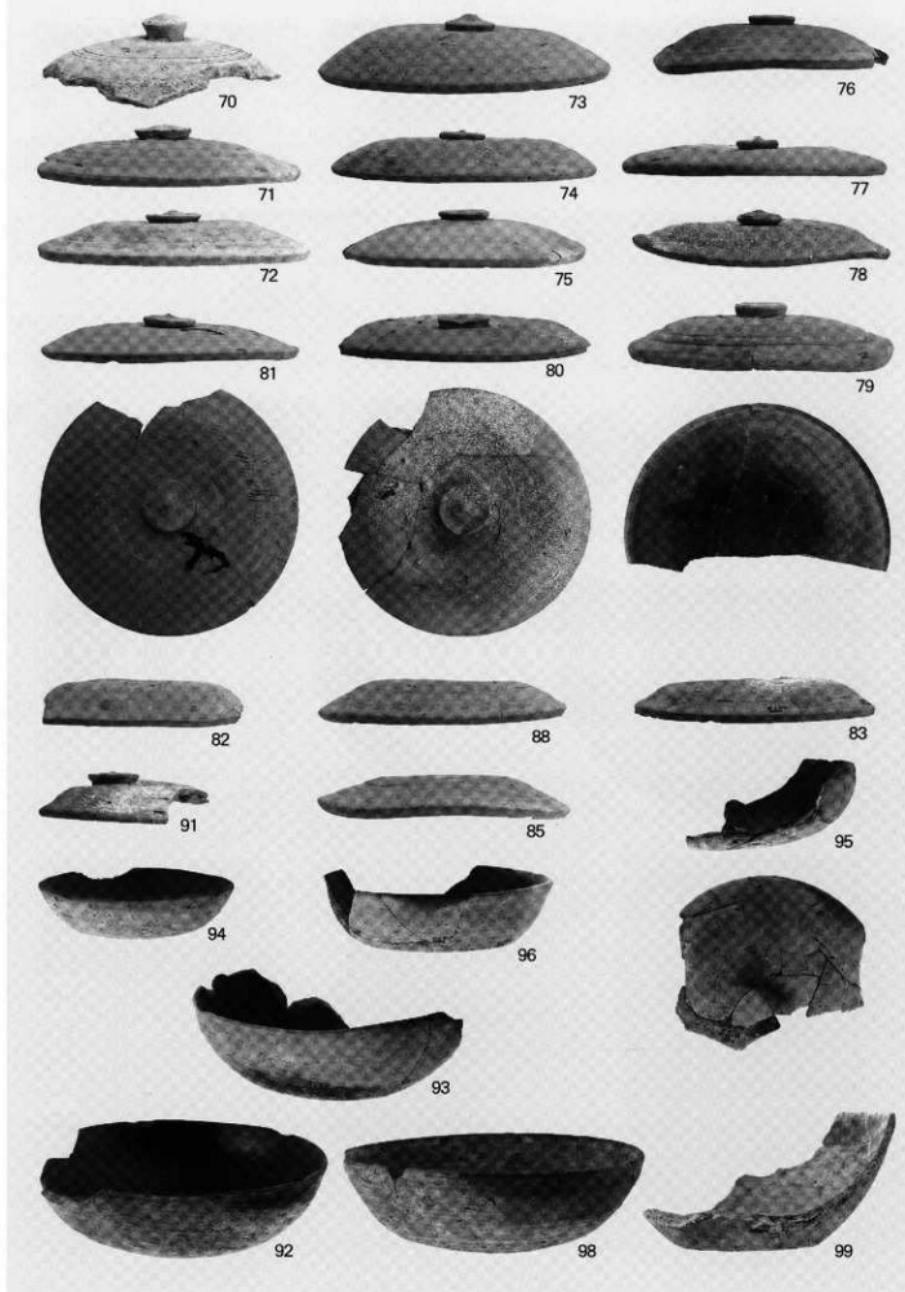
図版22 2地区の遺物(1)



図版23 2地区の遺物(2) (1 : 3)



図版24 2地区の遺物(3) (1 : 3)



図版25 2地区の遺物(4) (1 : 3)



104



103



102



100



101

(1 : 3)



110



109



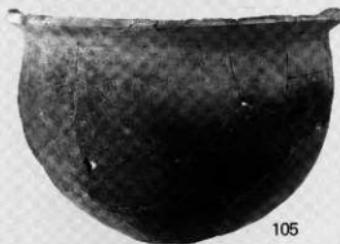
108



107



111



105



106



(1 : 4)



114



118

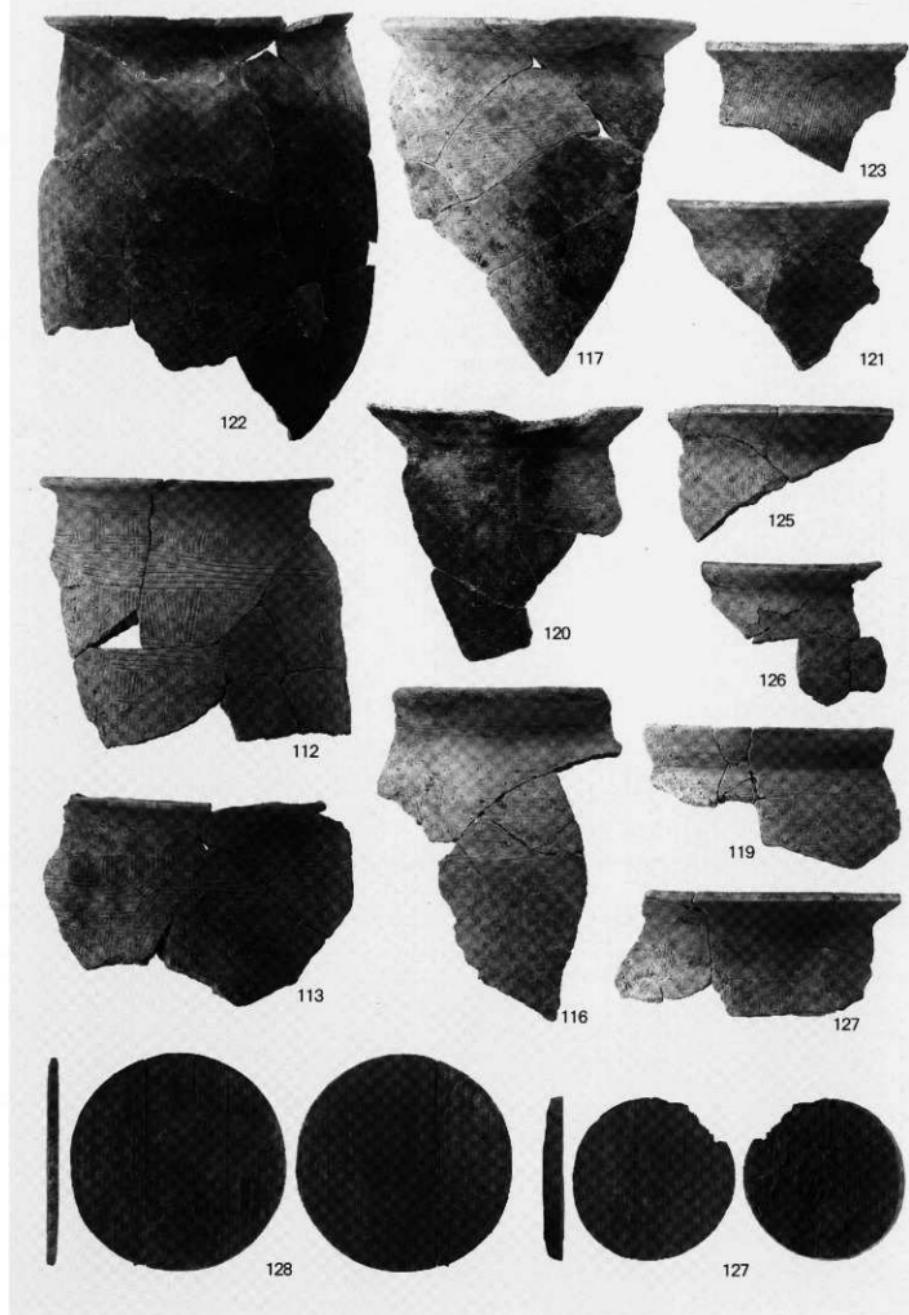


115



124

図版26 2地区の遺物(5)



図版27 2地区の遺物(6) (1 : 3)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちありふさいせきいち							
書名	富山県福光町在房遺跡 I							
副書名	県管は場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴なう埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)							
編著者名	深田亜紀、中井英策、越前慶祐							
編集機関	福光町教育委員会							
所在地	〒939-1692 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763)52-1111							
発行年月日	西暦2001年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
在房遺跡	富山県 福光町在房	16421	421170	36度35分 53秒	136度54分 38秒	000617 ～001215	3,175	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
在房遺跡集落	古墳時代後期 古代 古代～中世	堅穴住居、土坑、溝 堅穴住居、柱穴、溝 掘立柱建物、土坑、 井戸、溝、サク状遺構	土師器、須恵器、製塙土器 土製紡錘車 須恵器、土師器、 土師器、白磁					

県管は場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)

富山県福光町在房遺跡 I

平成13年3月

編集 福光町教育委員会

発行 福光町教育委員会

印刷 (角)ナカダ印刷

